

対の情理 影の愉楽 (3)

夏

剛

「戦状/場」——「煽/煽情」——「線上/条/状」「扇状・織条」「線/旋条痕」
——「ライフル/来復」「一陽来復」——「嘉節・昌期」

『現漢』の【战(戰)】zhàn (59項)と【线(綫、線)】xiàn (同24)は離れ(1647~8/1425頁)、前者の¹(「**①**戦争。戦闘。**②**戦争或いは戦闘を行う。**③** [Zhàn] 宦姓の一)は、**①**の例(「宣~|停~|持久~◇商~」[◇=比喩の用法])の全部、**②**(「~勝|百~百勝|愈~愈勇[戦えば戦うほど勇壯になる]」)の2/3が日本語と共通する。²「震える [=発抖]」の3例(「寒~|打~|胆~心驚」[「寒くて震える」「身震いする」「心胆を寒からしめる」])は同形でないが、「抖」の「斗」(「闘」の簡体字)と同様「^{おの}戦く・戦慄」の発想と通じ、「生」より「戦」に多い両言語の類似を窺わせる。

『広辞苑』の【戦状】(「戦争の状況。戦況」)に当る『現漢』の項は【戦況】(「作戦の情況」)で、両書の【戦場】(「戦闘の行われる場所。戦地」/「両軍が交戦する場所 [原文=地方]。比喩にも用いる」)は、後者の用例(「戦場に赴く」「洪水と闘う戦場」[同=抗洪~])に語源国での多義・常用が見える。次の【煽情・煽情】(「情欲をそそりおこさせること。“一的”」)は「戦/状況」と同じ和製で、『現漢』の【煽】shān (1138頁)の5項中の【煽情】(「^画人の感情或いは情緒を煽動する。“監督は^{ムード}雰囲気を作って [=營造気勢] 感情を煽動する事がとても得意だ」, 『漢大』未収)と半同形・異義である。

【線上】(「**①**線の上。“球は一に落ちた”“捜査一に浮かぶ”**②**成否の分かれるぎりぎりの所。“当落一にある”)は、中国にも同形・同義の常用語は有るが『漢大』も載せない。【上】(「^{じょう}呉音。漢音はショウ」)^⑤(「[接尾辞(旧版=語) 的] “…の上で”“…に関して”の意を表す。“教育一”」)より、【上】shàng (184項, 1143~8頁)の方位詞(¹等4類中の最後)は範囲が広い(「**①**名詞の後に用い、物体の表面を表す。“顔に”“壁面”“机の上”**②**名詞の後に用い、ある種の物事の範囲内を表す。“会議で”“本の中”“教室内”“新聞の中”**③**ある方面を表す。“組織 [にて]”“事実上”“思想上”)故である。

『広辞苑』の「教育一」の両言語共通に対し、『現漢』の3義・10例(**①**「臉~|墙~|桌子~」, **②**「会~|書~|課堂~|報紙~」, **③**「組織~|事実~|思想~」)の内、同形3語も日本語と用法ま

で一致するのが③の2・3番目である。両書の11例とも立項の必要が無く、『現漢』の【网(網)】wǎng (60項, 1353~4頁)でも, ④(「特に計算機網状組織を指す。“コンピュータ・ネットワーク”ネットに接続する”“インターネット”インターネット」)の例に動詞の「上」が出るが, 「網上」(電腦網上)の単独項は無く, 【網上商店/銀行】(=『広辞苑』の【ネット】の複合語【-ショッピング/バンキング】)が有る。

『広辞苑』の【線上】立項は多義・頻用を思わせ, 前頁の同音語(【千丈/乗/疊】【占城】【先生】【洗滌/滌】【扇状】【船上】)中の【船上】(船の上。“一生活”)も, 【線状】(「細長い, 線の形をしていること」と同類の【扇状】(「扇を開いた形」と共に, 『現漢』の【船】chuán (23項, 202頁), 【扇】shàn (同6, 1139。「扇」と通じるshānは前頁, 【扇動】の項のみ)には無い。3「線」語の『現漢』共有の項は【線条】(「①すじ。せん。②→せんじょう [織条]」)で, 【織条】(「①細い線。②[“線条”とも書く] フィラメントのこと)も『現漢』の【纤(織)】(17, 1417~8)に入らない。

『現漢』の【線条】(「①絵を画く時に引く, 曲がったり真っ直ぐだったり, 太ったり細かったりする線。“太い線”[原文=粗~] “この絵の線は非常に柔和だ”ソフト②人体或いは工芸品の輪廓」)は, 『広辞苑』の【線】「ライン [line]」の多義の一部と重なるが, 同項の複合語【線条痕・旋条痕】(「すじ状のあとかた。特に, ライフルから発した弾丸についての」), 【線条体】(「[医] 大脳基底核を構成する[旧版=のうち,]尾状核とレンズ核の被殻とを結ぶ灰白質。[略]」)は, 中国語に成っていない。【旋】xuán (13項, 1485頁)は「線」と発音が違う為, 「線/旋条痕」の混用も成り立たない。

『広辞苑』の「ライン [line]」(8義・複合語9項)と同じ見開きの右隣の3050頁に, 「ライフル [rifle]」(「①弾丸に回転を与えて弾道を安定させるため, 銃身内部に施した螺旋^{らせん}条溝。②1を施した銃。ライフル銃。施条^{らせん}銃」), 【一射撃】(「ライフル銃やピストルを用いて, 定められた時間内に, 既定の弾数で標的を撃ち, その的中点によって勝敗を争うスポーツ」)と有る。『現漢』の関連項は【来¹²(來)】(51項, 772~3頁)の内の【来復槍】láifùqiāng (「昔, 銃身内部に螺旋条溝を刻んだ小銃[原文=膛内刻有来复線の歩槍]を指した。[来复, 英 rifle]」), 【来復線】(「膛線に同じ。[同]」)である。

『漢大』の【來復槍】(同音異称「來福槍」併記, 用例=「章裕昆《文学者武昌首義紀実》」), 【來復線】(「膛線」併記, 初出=「吳運鐸《把一切献给党・我們的平射炮》」), 【來復螺旋】(「即ち來復線」, 用例=「鄭觀應《盛世危言・火器》」)の親項目は, 『現漢』未収の【來復】である。①(「往還。去った後復来る」, 語源=《易・復》, 初出=「《三国演義》第四九回」), ②(「回復。帰来[原文=回来]」, 同=「唐李復言《統幽怪録・蘇州客》」)に次いで, ③(「繰り返して反復する。1回又1回」, 用例=「蕭紅《生死場》」)より先に, 「膛線」を意味する英文音訳の④(同=「嚴復《救亡決論》」)が現れた。

嚴復(『広辞苑』直近新設の項=「[Yan Fu] 中国の思想家・学者。福建候官[福州]の人。字は又陵・幾道。清朝末期, 英国に留学し, 西欧近代思想を翻訳・紹介, 知識層に大きな影響をあたえたが, のち伝統擁護を主張。『天演論』[TH ハックスリ『進化と論理』]や『原富』[A スミス『国富論』]などが代表的翻訳。二三四)が訳語に使った「來復」は, 日本語では単一の意味・用法しか無い(「一度去ったものが, またもとにかえること。“一陽一”/「一度去ったものがふたたびもとにかえってく

ること。“一陽來復”，初出・漢典＝「文明本節用集〔室町中〕」「易経－復卦」。

「一陽來復」は日本で純和製とされる（『広辞苑』の「①陰がきわまって陽がかえってくること。陰暦一月または冬至の称。②冬が去り春が来ること。③悪い事ばかりあったのがようやく回復して善い方に向いてくること」は、『日国』で和文例のみ，初出＝「艸余集〔1409頃〕」「太平記〔14C後〕」「明徳記〔1392-93頃〕」が、『漢大』（語釈＝「古人は，天地の間に二氣が有り，毎年，夏至に至ると陽氣が尽き陰氣が生じ始め，冬至に至ると陰氣が尽き陽氣が復生し始めると考え，之を“一陽來復”と謂う）には，和製語義の誕生前の出典が有る（語源・初出＝「《易・復》孔穎達疏」「宋王安石《回賀冬啓》」）。

両国の4書中『日国』だけの【一陽】（『日国』でいう陽の氣。→一陽來復。②冬が去り春が来ること。新年になること。また，逆境のあとに好運が向いて来ること。一陽來復，初出＝「菅家文章〔900頃〕」「日葡辞書〔1603-04〕」，漢典＝「易経－繫辭」「杜牧－冬至日寄小姪阿宜詩」）は，成句項【一の嘉節】（「陽氣のかえってくるめでたい日。冬至を祝ってという語。《季・冬》，用例・漢典＝「俳諧・増山の井〔1663〕」「曹植－冬至獻襪履表」），【一の春】（「めぐり来る春。また，幸運の向いて来る時節」，初出＝「大観本謡曲・放下僧〔1464頃〕」）が付き，漢籍の影響と日本での派生，中国での後退を思わせる。

『漢大』のみの【一陽生】（「冬至の後に白昼が次第に長くなり，古代には陽氣の初動と認識され，故に冬至は又“一陽生”と称される」）は，初出（『易・復』“後不省方”唐孔穎達疏：“冬至一陽生，是陽動而用陰復於靜也。”）が，『日国』の【一陽】①の漢典（「一陰陽謂之道，繼之者善也，成之者性也」）と同じ陰陽哲学の根源を示し，2例目（『唐杜牧《冬至日遇京使發寄舍弟》詩：“遠信初逢雙鯉去，他鄉正遇一陽生”」）が，同②の同一作者に由る詩題類似的別作品の逆語順の3文字（「今日我江外，今日生一陽」）と異曲同工の対を成す。

【一陽の嘉節】の漢典（「千歲昌期，一陽嘉節，四方交泰，萬彙昭蘇」）は，「佳節・嘉節」（「①よい季節。〈日葡〉②よい日がら。めでたい日。祝い日。佳辰。嘉辰。吉辰。吉日」/「①よい時節。②めでたい日。祝日。佳辰」，初出＝「翰林胡蘆集〔1518頃〕三・清明日看花“春風國破有山河。不覺人生佳節過。”」「看聞御記－永享四年〔1432〕五月五日“端午嘉節幸甚々々，御節供如例”」），漢典＝「曹植－冬至獻襪履表“千歲昌期，一陽嘉節”」「謝瞻－九日從宋戲馬台集送孔令詩“聖心眷嘉節，揚鑾辰行宮”」）でも前半が引かれる。

対語の「昌期」は『日国』で別の漢籍が掲げられる（「盛んな時期。*蕉堅菓〔1403〕和乾杜多韻“昌期帝載熙，法運中興時”*旧唐書－音楽志“堂堂聖祖興，赫赫昌期泰”」）が，『旧唐書』（『広辞苑』＝「二十四史の一つ。唐代の正史の一つ。本紀二〇卷，志三〇卷，列伝一五〇卷。五代後晋の劉昫らの奉勅撰。九四五年成立。→新唐書。副項目＝【旧唐書】）は，曹植歿の713年後の晩成文献（造語）である。「捨近求遠」（近きを捨てて遠くに求める）の回り道は，最古に近く手近（他の2項）に在る漢典を使わない事にも当るが，使い回しを嫌う所為か項目・語句の整合性が損われる。

両国のこの現代死語（『漢大』の語釈・初出＝「興隆・昌盛の時期」《楽府詩集・郊廟歌辭七・周郊祀樂章》）は，他の3書に無い【一陽節】（「即ち冬至節」）の初出（『三国魏曹植《冬至獻襪履表》：“千

載昌期，一陽嘉節。四方交泰，萬物昭蘇”）」にも有る「亦“一陽日”と称する」（出典＝「明錢德洪《王文成公全書統編序》」）の語義は、題・文中3字（傍点付き）の齟齬とは別に『日国』の①よりも②に当る事を示唆する。「千載」（「千歳」と同音・同義 [千年] の日本語に対して、「載/歳」は其々 zǎi/suì と読み特に年/齢を表す）対「一陽」以上に、「昌期」と「嘉節」は厳密な対を成す。

「嘉慶」 「嘉靖」 —— 「佳績」 「佳音」 —— 「嘉 / 佳偶 / 耦」 —— 「佳期」 ——
「嘉 / 佳肴」 —— 「旨酒」 —— 「嘉 / 佳賓」

『現漢』の【嘉】（①素晴らしい [原文=美好]。②賞賛。称揚 [同=夸奖; 賛許]。[各2・3例] ③ [Jiā] ㊦姓）は、8項（【嘉賓】 [佳賓] / 獎 / 靖 / 勉 / 年華 / 慶 / 許 / 言懿行）の内に【嘉慶】だけが『広辞苑』と共有し、而も語義（「清仁宗 [愛新覺羅・顯琿] 年号 [西曆紀元 <= 公元> 1796-1820]」）は、従来の【嘉慶】（「[カケイ] [毛詩正義] 南北朝時代の北朝、後小松天皇朝の年号。至徳四年八月二三日 [一三八七年一〇月五日] 改元, 嘉慶三年二月九日 [一三八九年三月七日] 康応に改元」, 同義副項目 = 【嘉慶】）に含まれず、最新版の【嘉慶】（「①→かきょう。②中国, 仁宗朝の年号。二〇〇〇」）に漸く入った。

『現漢』の【嘉靖】（「明世宗 [朱厚熜] 年号 [西曆紀元 1522-1566]」）は『広辞苑』には無く、1998年版以来の【海瑞】（「明の政治家。瓊山 [海南瓊山] [旧版=広東瓊山] の人。挙人で任官、嘉靖帝をいさめて下獄、隆慶帝・万曆帝に重用され、清官として名を馳せた。呉晗がが彼をモデルに書いた『海瑞罷官』は、文化大革命の発端となった。二〇〇〇）に有る帝は、2008年版増設の【嘉靖帝】（「明朝第一二代皇帝。名は厚熜みょう。[略] 治世当初は宦官の抑制に努めたが、のち道教に耽溺し政務を怠る。北方のモンゴル、南方の倭寇の侵入 [北虜南倭] に苦しんだ。[在位二〇〇〇] [二〇〇〇]」）で紹介される。

同じ追加の【嘉慶帝】（「清朝第七代の皇帝、仁宗の称。名は永琰えん、のち顯琰えん。乾隆帝の第一五子。治世には前代に続いて考証学などの学術が発達 [乾嘉の学]。一方で南方の白蓮教徒の乱、北方の天理教徒の乱などの反乱が続いた。[在位二〇〇〇] [二〇〇〇]」）は、1字共有の前朝の帝と同じ多難を思わせる。他方、『漢大』の【嘉靖】（「素晴らしい [原文=美好的] 教化を以て安定・順服 [同=平服] させる事を謂う」, 初出 = 《書・無逸》）, 【嘉慶】 ①（「縁起が好く喜ばしい [= 吉祥喜慶]。亦愛めでたい慶事 [= 喜慶的事] を指す」, 同 = 「漢焦贛《易林・萃之夬》」）の通年号は安泰や好運の祈願を込めた。

『日国』は「嘉靖」「嘉靖帝」「海瑞」「呉晗」（『広辞苑』 = 「[Wu Han] 中国の歴史家・政治家。浙江義烏の人。清華大学出身。明史研究で知られた。人民共和国の [旧版=に従い, 『朱元璋伝』を著す。一九五二年] 北京副市長などを歴任 [補筆]。その著『海瑞罷官』批判により文化大革命が始まり、反党・反社会主義と攻撃され、迫害 [←惨] 死。七九年名誉回復。[二〇〇〇]」）を悉く採らず、現代史と関りの薄い「嘉慶帝」も入れず、【嘉慶】は旧『広辞苑』と同じく本邦の1義である（「南北朝末期」, 「將軍足利義満の時代」, 「出典は『毛詩正義』の“將し有三嘉慶-, 禎祥先來見也”と特記）。

【嘉慶・佳慶】（「よろこび、祝うこと。めでたいこと」, 初出・漢典 = 「文明本節用集 [室町中]」 「顔

延之-秋胡行)は、4例中2点目(「運歩色葉 [1548])のみに見える「佳慶」(『漢大』未収の和製漢語)の混用が日本的である。中国語の「嘉」は字形に「吉・加」(其々「極(jí)・佳」と同音/声調)を含む「吉祥字」(造語)で、『現漢』の【佳】(「①羽美しい。好い。[5例] ② [Jiā] ㊦姓)の14項は、同音/声調の【家/加】(89・47項)より少ないものの、数も『広辞苑』と共有する比率(【佳賓/話/節/境/句/麗/釀/期/人/肴/作】, 78.6%)も【嘉】を上回る。

中国独特の【佳績】(「優良な成績。優良な業績。“再び好成绩/業績を作る[原文=創]”)は、「良績」の様な2字類語も無い日本語と比べて成績・業績重視の時流を現す。『漢大』未収、『現漢』2005年版増補のこの新語に対して、【佳音】(「〈書〉㊦好い消息。“静かに朗報を待つ”[同=静候~])は歴史が古く、『日国』に残っている(「よい知らせ。喜ばしい消息。かおん」[副項目に【佳音^{おん}】、初出=「蕉壘藁 [1403]「謝靈運-酬從弟惠連詩」)。「佳偶」(「仲睦まじい [=感情融洽], 生活が円満な [=美満的] 夫婦。素敵な [=美好的] 配偶)は、『日国』の【嘉耦・佳耦】で同義ながら異形と為る。

同項の語釈(「よいつれあい。よい夫婦。嘉偶)に有る「嘉偶」は項が無く、漢典(「春秋左伝-桓公二年)の「嘉耦」と2例(初出=「東京新繁昌記 [1874-76]〈服部誠一〉)の「佳耦」が見出し語を成し、補注の文献(「名物六帖-人事箋)の「佳偶」は異端に位置付けられる。『漢大』の【嘉耦/偶】(同=《左伝-桓公二年》「漢焦贛《易林-隨之觀》)の並立に対して、【佳偶】は【佳耦】(「よい配偶。意に適う[原文=称心的] 配偶。亦円満・幸福な夫婦を指す」、両義の初出/用例=「唐皇甫枚《三水小牘-王知古》「清錢謙益《觀管夫人画竹並書松雪公修竹賦歌題短歌》)の副項目である。

『日国』の「ぐう」《字音語素》1 禺の類)の6字(【偶/寓/遇=遇/隅/耦/藕], 全て㊦)中、【偶】(「①対になる。つれあい。/対偶, 配偶, 匹偶/偶坐, 偶視, 偶処/好偶, 良偶/偶力/②二で割り切れる。“奇”の対。/偶数, 偶関数, 偶蹄類/③思いがけなく, たまたま。/偶因, 偶詠, 偶吟, 偶作, 偶感, 偶合, 偶成, 偶題, 偶発, 偶有/偶然/④人がた。人形。/土偶, 木偶/偶像, 偶人/→ぐう【偶】), 【耦】(「むきあう。ふたりでならぶ。“偶”に同じ。/対耦/耦語, 耦坐, 耦進, 耦耕/嘉耦, 敵耦)の例(『広辞苑』と共有)に、「嘉耦」の収録が有る半面「嘉偶」は類義の「好/良偶」と並ぶ事が無い。

『現漢』のǒuの7親字の内【呕(嘔)】(「嘔吐く)等と【藕(藕)】(「①蓮の地下茎。[略] ② [Ōu] 姓の一)の間の【偶】(「木・泥等で作った人形[原文=人像], ②「①偶数。対を成す[“奇”(jī)に対して言う]。②配偶。③ [Ōu] 姓の一, ③「偶然。偶々[同=偶爾]), 【耦】(「〈書〉①2人が並んで耕す。②“偶²①②に同じ)は、前者の10項(【偶爾/発/感/合/或/然/然性/数/像/一])中5項()が『広辞苑』と共有し、後者の1項(【耦合])は共通しない。【偶】²②の例示「佳~」は未収の「佳耦」と通じるが、古今の「嘉耦」→「佳偶」の変容は2字の人偏に個人本位を現す。

【佳期】(「①結婚の期日[原文=日期]。②愛し合っている[同=相愛的] 男女の密会 [=幽会]の期日・時間)も、『日国』には有る(「よい時期。よい季節。また、楽しい時。好期」, 初出=漢典=「晋家文草 [900頃]「陸龜蒙-中秋待月詩)が、『漢大』の①(初出=《楚辞-九歌-湘夫人》, 「後に男女がデートする [=约会] 期日を指す), ②(「婚期」, 同=「明江鏡《春燕記-家門》)は日本語に入らず、

③ (「素敵な時 [=美好的時光]。多く親友と再会する [=重晤]、或いは昔の居住地を再訪する [=故地重游]の時期)とも範囲・重点が違い、「昌期」と対を成す「嘉節」に似て良い期日・時機を表す。

日本語の「嘉肴・佳肴」(「よい肴^{さか}。うまい御馳走」/「おいしい肴 [さかな]。うまい料理」, 初出 = 「文明節用集 [室町中]」)は、表記が「嘉肴」から「佳肴」(5例中3・5点目の「運歩色葉 [1548]」「寄笑新聞 [1875] (梅亭金鶯)」)に移り変ったが、『広辞苑』の【嘉肴ありと雖^{いへど}も食らわずんばその旨^{いへど}きを知らず】(「[礼記学記] ごちそうも、食べてみなくてはそのうまさかわからない。聖人のすぐれた道も、これを学ばなければその価値を知り得ない意。転じて、大人物も用いなければその器量を知り得ないことにもいう)の通り、両言語の最古の表記が日本で正統とされている。

『日国』の【一有りと雖^あも = 食^{いへど}わずんばその旨^くきを [= 食^{うま}せざればその味^{しよく}いを知らず】(「[礼記-学記]の“雖^レ有^二嘉肴^一、弗^レ食^レ不^レ知^二其旨^一也、雖^レ有^二至道^一、弗^レ学^レ不^レ知^二其善^一也”による句で、いくらおいしいごちそうがあっても食べてみなければそのうまさはわからないの意から] 聖人のりつばな道も学ばなければそのよさがわからないことのとえ。まず実践することの必要を教えたもの。また、大人物も実際に用いなければその器量を知ることができないことのとえ。旨酒嘉肴有りと雖も嘗めざれば其の旨を知らず)も、2例(「浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵 [1748] 等)とも「嘉肴」に作る。

漢典(「韓詩外伝-卷三“雖^レ有^二旨酒嘉殺^一、不^レ嘗^レ不^レ知^二其旨^一、雖^レ有^二善道^一、不^レ学^レ不^レ達^二其功^一”)は、対句の前半に「旨酒・嘉肴」の対語を用いる。「旨酒」(「[詩經小雅、鹿鳴] うまい酒。美酒」/「味のよい酒。うま酒。美酒」, 初出・漢典 = 「三教指帰 [797 頃]」「[詩經-小雅・正月“彼有^二旨酒^一、又有^二嘉殺^一”」)は、【佳賓・嘉賓】(後掲)①の漢典(「[詩經-小雅・鹿鳴“我有^二旨酒^一、以燕^二樂嘉賓^一之心”」)でも「嘉」との親和性を呈す。『漢大』の【嘉賓】①(「[貴賓] [原文=貴客]」の初出(「[詩・小雅・鹿鳴]:“我有嘉賓、鼓瑟吹笙”」)は、『日国』の採録に秘めた旨酒好みの匂いを感じさせる。

「異味」——「食指動」——「珍羞 / 膳 / 肴 / 饌」——「美味 / 酒」——「佳釀」——「美食 / 餐」——「美好・好日」

『現漢』の【旨】zhǐの2項(【旨趣 / 意】、前者が『広辞苑』と共有)は、見出しに異体字「^①旨」を併記した¹(「^①目的。目論見 [原文=用意]。目的。^② [多く遵守すべきものを指す] 意図 [同=旨意]、特に帝王の命令を指す」, 各4・1例)の部類に入り、²(「[書] 味が美味しい [=滋味美]」)の例に同じ不立項の「~酒」「甘~」(甘美)が有る。『日国』の成句項の漢典中の「旨酒嘉殺」は中国でも熟語化していないが、『現漢』の【佳肴】(「洗練された美味しい料理 [=精美的菜肴]。 “美味佳肴” “佳肴美酒”」)で、「旨酒」の類語「美酒」は「美味」が修飾語を為す「佳肴」と対に成る。

【異味】①(「尋常ならぬ美味。得難い旨い食物)も「~佳肴」を例とするが、②(「[~臭] 変な臭い。“食物は一旦異臭が有ったら、もう食べられなくなる”)は古典に見えない(『漢大』の②「異なる味」の初出 = 「漢王充《論衡・幸偶》)が、日本語(「普通とはちがった味。また、珍しい食物。珍味」/「普

通とは違った味。また、そのような味の食べ物。珍しい食物。珍味。初出＝「色葉字類抄 [1177-81]」は、漢典（「春秋左伝－宣公四年 “子公之食指動，以示子家。曰，他日我如此，必嘗異味。”」）が、①（「異常な美味」）及び【食指動】（「御馳走に恵まれる幸運 [原文＝口福] が有る予兆」）と同じである。

「食指が動く」（「左伝宣公四年」[鄭の子公が食指の動いたのを見て，御馳走になる前兆と言った故事から] 食欲が起こる。転じて，物事を求める心が起こる）/「鄭の子公がひとさしゆびの動いたのを見て，ごちそうになる前ふれだと言ったという『春秋左伝－宣公四年』の “子公之食指動，以示子家。曰，他日我如此必嘗異味。” の故事から] 食欲がきざす。また，広く物事をもとめる心がおこる。初出＝「徂徠集 [1735-40]」は，「食指を動かす」（『日国』のみ，「自分のものにしたいという気をおこす。欲しがる」，同＝「杉梅太郎宛吉田松陰書－嘉永四年 [1851]」）を派生した上で，今も能く使われる。

他の成句が無い【食指】（同じ「ひとさしゆび」，初出・漢典＝「色葉字類抄 [1177-81]」/「南斉書－張融伝」）は，【人差指・食指】（「[人をゆびさす指の意] 手の指の一つ。親指と中指との間の指。食指」と）/「説明同上] 親指のとなりにある指。親指と中指の間の指。ひとさしの指。ひとさし」，初出＝「撮壤集 [1454]」，【人差】（「ひとさしゆび」の略）/『日国』の【人差・食指】は「ひとさしゆび [人差指]」の略，同＝「観智院本名義抄 [1241]」より早い。最古の方（『日国』の後者の成句項【一のおよびゆび指】「ひきさしゆび [人差指]」に同じ）も，初出（「十卷本和名抄 [934 頃]」）で「食指」に作る。

『現漢』の【食指】 shízhǐ（「示指の通称」）の類語【示指】 shìzhǐ（「拇指の直ぐ隣に在る [原文＝緊挨着] 手の指。通称食指」，『漢大』未収）は，和製漢語である（『広辞苑』の【示指】「人差し指」/『日国』の同項の主項目【示指】「[“じし”とも] 手の第二指。人さしゆび」は初出＝「解体新書 [1774]」）。後者（『広辞苑』未収）の3例の最後（「閑耳目 [1908] 〈澁川玄耳〉」）に出た「這麼様（こんな）」は，類語【嫌気が差す】「いやだという気持が起こる。いやになる。いやけがさす。いやきざす」の初出「青春 [1905-06] 〈小栗風葉〉」中の「這麼 [こんな]」と共に，明治末の輸入漢語の健在を示す。

【異味】の和文4例（初出の第2（「語孟字義 [1705] 下・論堯舜既没邪說暴行又作 “譬諸珍羞異味，人多貪饑”」）に，対語の「珍羞」（「[“羞”は食物をすすめる意] めずらしくてうまい食物。珍膳」/「めずらしくておいしい食物。珍饌。珍膳。珍肴」，初出・漢典＝「垂髮往来 [1253]」[後漢書－姜詩妻伝]）が見える。『現漢』の同語（「珍饌」に同じ）の同音・正字項【珍饌】 zhēnxiū（「〈書〉 珍奇・貴重な食物。“珍饌美味”。珍羞にも作る」）は，【佳肴】と共に【美味】（「味が美味しい [原文＝味道鮮美的] 食品。“美味佳肴” “珍饌美味”」）の熟語用例を共有する。

『日国』のみの【珍羞異味】（「めずらしい料理やおいしい食べ物。美味な料理や珍味」，用例＝「語孟字義 [1705] 下・論堯舜既没邪說暴行又作 “譬諸珍羞異味，人多貪饑，至於五穀常膳，則不知嗜焉”」），【珍羞佳肴】（「“ちんみかこう [珍味佳肴]」に同じ，同＝「奇想凡想 [1920] 〈宮武外骨〉 人肉の味 “総ての美味，珍羞佳肴 [チンシウカカウ] 大牢 [たいろう] の珍膳も此人肉を喰ふによって獲 [う] るのであるから」）は，『漢大』の熟語項が無い【珍羞】（副項目が【珍饌】）の内に，4例（同＝「漢張衡〈南都賦〉」）の最後（「老舍〈茶館〉第一幕」）の中の「珍饌美味」が対応と成る。

日本語の「珍膳」(「めずらしい美味な料理」/「めずらしい料理。珍肴。珍羞。珍饌」,初出・漢典=「本朝文粹 [1060 頃]〈大江朝綱作〉」後漢書-百官志三),「珍肴」(「めずらしいさかな。めずらしいごちそう」/「前の2文同上」珍羞。珍饌。珍膳,同=「文明本節用集 [室町中]」翰林記),「珍饌」(「めずらしい料理。めずらしい食物」/「めずらしい料理。めずらしい食物。珍肴。珍膳。珍羞」,同=「性靈集-七 [835 頃]」楊万里-初食笋蕨詩)は、『現漢』の【珍】zhēn (21 項中 2/3 の【珍宝/本/藏/貴/品/奇/禽/玩/聞/稀/羞/饌/異/重】が『広辞苑』と共有,【真珠】の主項目【珍珠】は半共通)に無い。

『日国』の【珍肴】の4 例目(「信長記 [1622]」)中の「旨酒珍肴」,『漢大』の【珍膳】(初出=「周礼・天官序 漢鄭玄注」)の2 例目(「三国魏嵇康《難自然好学論》」)中の「嘉肴珍膳」,【珍肴】(同=「漢辛延年《羽林郎》詩」)の同(「水滸伝 第四一回」)中の「珍肴異饌」,【珍饌】(同=「東觀漢記・威宗孝桓皇帝紀」)の4 例目(「清錢泳《履園叢話・芸能・治庖》」)中の「珍饌嘉肴」,【嘉肴】(同=「詩・小雅・正月」)の6 例目(「歐陽子倩《荊軻》第一幕」)中の「旨酒嘉肴」等,両国の古今の文献には関連の4 字熟語が多い。

日本語の「珍味」(「めずらしい, 味のよい食物。“山海の珍味”」/「めずらしい味。めったにないほどのよい味。また, その食物」,初出・漢典=「北山抄 [1012-21 頃]」新唐書-穆員伝)は,「珍味佳肴」を派生した(『日国』のみ。「めずらしい味の食物や肴。たいそうなごちそう」,初出=「談義本-勞四狂 [1747]」)。和製の「山海の珍味」(「山や海でとれる, めずらしい食べ物。また, さまざまな種類の御馳走」/「山や海の産物からつくった珍しい味の食べ物。転じて, いろいろな材料がとりそろえられた御馳走」,初出=「読本・椿説弓張月 [1807-11]」)は, 親語・4 字熟語の8 世紀/60 年後に出た。

中国の両書には「珍味佳肴」は見当らず『現漢』は「珍味」も採らないが,「山海の珍味」の漢字から成る「山珍海味」(「山野と海洋が所産の各種の珍貴な食物, 多く盛り沢山の [原文= 豊富的] 料理を指す。山珍海錯とも言う」,『漢大』の初出=「紅樓夢 第三九回」,「山珍海錯」(『現漢』の副項目, 同=「唐韋応物《長安道》詩」)が有る。後者の由来(『漢大』=「南朝梁沈約《究竟慈悲論》」中の「山毛海錯」)は熟語化していないが,『日国』の【海錯】(「種々の豊かな海産物」, 用例=「己巳紀行 [1682]」)で引かれる(「沈約-究竟慈悲論 “秋禽夏卵, 此_レ之如_二浮雲_一, 山毛海錯, 事同_二於腐鼠_一”)。

【山珍】(「山から採れた珍しい食べ物」, 初出=「東京新繁昌記 [1874-76]〈服部誠一〉」)は, 2 例目(「露団々 [1889]〈幸田露伴〉“山珍 [サンチン] 海錯の数を尽して [略]”)に欠落の漢典が隠れる。同じ『広辞苑』未収の【海味】(「海でとれる食品。海の産物の味覚。海の珍味」)は, 初出・漢典(「鴨東西時雜詞 [1816]」耿漳-送友人游江南詩)とも4 字熟語を含めない。『現漢』の【山珍海錯/味】を含む【山】shān の95 項には「山珍」が無いが,【海】hǎi の119 項には【海味】(「海洋から産出する副食品 [多く珍貴な物を指す]」)が有り, 挙例が決り型の様に「山珍～」である。

【美酒】(「味が濃厚で美味しい [原文= 醇美的] 酒。好い酒。“美酒佳肴”」)は,【佳肴】の「～美酒」と反転一体(「表裏一体」を振った造語)の4 字熟語を例に用いる。日本語(「味のよい酒。うまざけ」/「味のよい酒。うまい酒。うまざけ」, 初出・漢典=「色葉字類抄 [1177-81]」礼記-内則)も,

4例の最後(『横浜新誌 [1877] 〈川井景一〉)に「美酒佳肴」が書かれた。初出の700年後の4字の組み合わせは中国語より遅い(同じ熟語項が無い『漢大』の初出は【嘉肴】の5例目「明王玉峰《焚香記・赴試》」中の「美酒嘉穀」)が、対語・類語複合の4字熟語を好む共通の趣向が確認できる。

『広辞苑』の【美味】(「うまい味。また、その食物」)の用例「一佳肴^が」,『日国』(「うまいあじ。また、その食物。美食」,漢典=「揚雄-解難」)の初出(『靈異記 [810-824]』)中の「美味芬馥 [ふんふく]」,【珍羞】の第2例(「文明本節用集 [室町中]」)に見える「珍羞 [チンシウ] 嘉旨」,最後の5例目(「内地雑居未来之夢 [1886] 〈坪内逍遙〉」)の「内外の美酒。山海の珍羞 [チンシウ]」も、美食・佳釀を並立させる。『現漢』の【佳釀】(「美酒。“~名酒”」)は美/名酒の同類加法(足し算)の相乗であるが、「珍羞」に足した「嘉旨」は日本語で独立しなかった。

『広辞苑』の同項(「よい酒。うまい酒」)は、『日国』で2表記併記の【佳釀・嘉釀】(「よい醸造酒。うまい酒」)と為る。漢典(「范成大-次韻子永雪後見贈詩“想得村田来歲好,瓦盆嘉釀灌二愁城-”」)は、『漢大』の【佳釀】(語釈・初出=「美酒」[「金元好問《送武誠之往溪陂》詩」。「嘉釀」未収]より早い。精選版(3巻,2005~06)追加の用例(「春城隨筆 [1926] 〈市島春城〉趣味談叢“村居佳釀無しと雖も、却って趣を感ずることあり”」)は、范成大(南宋の詩人,1126~93)の生誕800周年に当る大正→昭和改元の年に書かれた。

日本語の「美食」(「うまい物や贅沢な物をたべること。また、その食物。[『今昔五』出典略]“一家”/「ぜいたくなもの、うまいものを食べること。また、その食事」,初出・漢典=「今昔 [1120頃か]」[漢書-鮑宣伝])は、『現漢』の同項(「洗練された美味しい食物。“美食に拘る [原文=講究]”“美食街”」)の1義より,【美餐】(「①口に合う食事 [同=可口的飯食]。“美食佳肴”②勳豪快に食べる [=痛快地吃]。“思う存分1回の食事 [=一頓]を楽しむ”)と通じる。中国語独特の「美餐」(『漢大』未収)は,【美味/異味/美酒」と同じく「佳肴」を含む4字熟語が引かれる。

『日国』の【美衣美食】(「美しい衣服を着て、うまいものを食べること。ぜいたくをすること」,初出=「時事新報-明治一九年 [1886]」)は,100年前に現れた【美衣】(「美しい衣服。立派な衣服」,同=「譬喩尽 [1786]」[「管子-重令」])と共に,『広辞苑』から消えている。「美衣」未収の『漢大』の【美食】では,①(「味の美味しい食物」,用例=《墨子・辞過》)に次ぐ②(「美味しい食物を食べる」)の2例(《韓非子・六反》《晋書・傅咸伝》)に,其々日本語にも無く中国でも廃れた「温衣美食」「好衣美食」が書いてある。

「好衣美食」の2字を含む「美好」(「^好好い [多く生活・前途・願望等の抽象的事物に用いる]“素敵な願望”“素晴らしい未来”)は,『日国』の保存(「[名] [形動] 美しいこと。美しくすぐれていること。また、そのさま」,初出・漢典=「江家次第 [1111頃]」[「管子-四称」])も空しく死語化した。『漢大』の【嘉節】の語釈(「美好的節日」[素敵な祝祭日・節句])に有る「好・日」の複合は,両国共通の語義(『広辞苑』の「よい日。“日日これ一”/『日国』の「よい日。吉日」/『漢大』の②「吉日」,④「美好的日子」[好い日])が「嘉節」と対に為る。

『日国』の【好日】の初出（『日葡辞書 [1603-04]』）は、漢典（『碧巖録-六則』〔宋〕圓悟克勤撰、1125年成立）より5世紀遅い。『漢大』の多義（初出順=②「唐岑參《鳳翔府行軍送程使君赴成州》詩」→①「好天」、唐王建《調笑令》詞之三）→③「特に結婚の日を指す」、《初刻拍案驚奇》卷五）→④「《二刻拍案驚奇》卷十一」は、8世紀に最古の例が出た。『日国』の【嘉肴・佳肴】に欠けた漢典は『漢大』で記され、【嘉肴】初出の『詩経』（『日国』の【旨酒】と同篇、【佳賓・嘉賓】と別篇）と、【佳肴】の転形の出現（『元張養浩《翠陰亭落成自和》』）の間隔が更に大きい。

「異郷・異客」——「登高・茱萸」——「異郷/域の鬼」——「鬼籍・鬼録・
点鬼簿・過去帳・靈簿・冥帳」——「別世・別世界」——「必然・偶然」

『現漢』の【佳節】（「美好而歡樂の節日：中秋～|每逢～倍思親」〔素晴らしくて楽しい祝祭日・節句。「中秋の佳節」「佳節に逢う毎に倍親を思う」〕）は、【逢】①（「まますしん 遇到；遇見」〔出会う。出交す〕）、【倍】②（「加倍」〔倍にする〕）と同じ名句を例に取る。『日国』の【異郷】①（「故郷や母国を遠く離れた、よその土地。他郷。外国」）初出＝「早霖集 [1422]」、【異客】①（「故郷を遠く離れた土地や、また外国で暮らす人。また、故郷を離れて旅する人」）用例無しも、同じ漢典（「王維-九月九日憶山東兄弟詩“独在異郷為異客，每逢佳節倍思親”」）を用いる。

【登高】②（「〔中国漢代に、道士の費長房が弟子の桓景に“九月九日に災難があるから、家人とともに赤い袋に茱萸しゅゆを入れて腕に結び、山に登って菊花をうかべた酒を飲め”という『統斉諧記』にみえる故事による〕陰暦九月九日に小高い山に登って頭に茱萸をさし、菊酒を飲んで遊ぶという風習。悪気をさけ、厄病を防ぐとされる。《季・秋》、初出＝「菅家文章 [900頃]」の漢典は、同じ七絶の後半（「遙知兄弟登高處，遍插茱萸少一人」）である。漢典（『礼記-曲礼上』）由来の①（「高い所に登ること」）は、唯一の用例（『雁列 [1955]〈皆吉爽雨〉』）が千年余り遅い。

【茱萸】①（「“ごしゅゆ 呉茱萸”または“さんしゅゆ 山茱萸”の略、初出＝「日本紀略-寬平五年 [893]」）は、漢典（『曹植-浮萍篇“茱萸自有芳，不若桂与蘭”』）が「一陽嘉節」と同じ作者に由る。【茱萸節】（「昔、中国で、茱萸の実を入れた赤い袋を持って山に登り、菊花酒を飲んで邪気を払ったところから。一説に、茱萸の実の房を頭に挿し、邪気を払ったところからともいう」九月九日の節句、漢典＝「張説-湘州九日城北亭女詩」）や、例の盛唐「詩仏」の2句を語源とした『漢大』の【佳節】（「美好的節日」）とも照らすまでもなく、一陽来復の嘉/佳き節句を指す。

『広辞苑』では【登高】（「①高い所にのぼること。②中国で、陰暦九月九日、丘にのぼり菊酒を飲む行事。高きに登る。〈しゅう 秋〉。→重陽ちゅうやう」）、【異郷】（「故国や郷里から遠く離れた土地。他郷。他国。異域。“一に骨を埋める”」）に対して、【異客】（「①主客以外の客。②好ましくない客。困る客。〔浄、油地獄〕出典略 ③旅人。いかく」と、『日国』で同形・異読語の副項目と成る【異客】（「①他国から来た客。②故郷を離れて他郷にいる人。たびびと。遊子。③常とはかわった客、すなわち盗賊。」

→いさやく[異客])の多義は、漢・和の間と日本語の内の異同を窺わせる。

『日国』の【異客】の上記以外の語義(「②主賓以外の客。③[近世、格式に違う意の“違格”と混同し、正当でない来客や遊客の意にとり]好ましくない客。歓迎されない来客や遊客。いさやくもつきやく。④[常と変わった客の意から]盗賊。⑤死去してあの世に行った人」, ③の初出=「雑俳・削かけ[1713]」, ④の漢典=「春秋左伝-襄公三一年」, ⑤の用例=「蘭東事初[1815]」), 【異郷】の同(「②人が死んでから行くと考えられているところ。他界。人間世界でない世界。仙境」)は、死に絡む意味が和製で、「異客/違格」の混同も中国語(其々 yikè / wéigé 読む)では有り得ない。

【異郷】①の初出(「高麗人“流_レ寓異郷_一為_レ異客_一, 不_レ言_レ心事_一使_レ人悲_一」)は、第3~7字が王維の名句を借用した。同じ漢語由来の【一の客】(「故郷を遠く離れた地や外国で暮らす人。また、故郷を離れて旅をしている人。異客」, 用例・漢典=「思い出の記[1900-01]〈徳富蘆花〉」「李白-江行寄遠詩」)を経て、和製成句【一の鬼】(「故郷を遠く離れた地、または外国で死んだ人」, 用例は同前文献[内容が別])、【一の花】(「①外国で見る美人。②海外に出稼[でかせ]ぎの日本人の売春婦」, ②の用例=「大増補改訂版新しい言葉の字引[1925]〈服部嘉香・植原路郎〉」)が現れた。

『広辞苑』の【異郷の鬼】(「異郷で鬼籍_{きせき}に入った人。他国で死んだ人。“異域の鬼”とも。“一となる”)には、「異域」(「よその地域。外国。異郷」/「“域”は“国”の意」別の国。外国。異国。初出・漢典=「続日本紀-大宝三年[703]」「漢書-蘇建伝“異域の人”」), 「異域の鬼」とも。「一となる」とも/「外国で死ぬ」, 同=「武蔵野[1887]〈山田美妙〉」「李陵-答蘇武書“生為_レ別世之人_一, 死為_レ異域之鬼_一」)が出るが、『現漢』の【異域】(「①外国。②他郷。他所の地[原文=外郷]」)は例も無い。

「鬼籍」(「“鬼”は死者の意 過去帳。点鬼簿」/「死者の名や死亡の年月日などを記しておく帳簿。過去帳。点鬼簿[てんきぼ]」, 初出=「改正増補和英語林集成[1886]」)と、先行の成句(【一に入る】「旧版の“死んで”削除 亡者の籍に記入される。死ぬことを婉曲に言う語[←死亡する]」/【一に入る】「死んで鬼籍に記入される。死亡する。鬼録に登る」, 同=「経国美談[1883-84]〈矢野龍溪〉」)は、漢語縁の「鬼録」(「過去帳。鬼籍」/「“閻魔[えんま]”が死者の姓名を書くという帳面の意 過去帳。鬼籍」, 初出・漢典=「三代実録-貞観元年[859]〈901年成立〉[陶潜-擬挽歌辞]」)が祖形である。

「過去帳」(「寺院で檀家・信徒の死者の法名・俗名・死亡年月日などを記し置く帳簿。鬼籍。鬼簿。霊簿。点鬼簿。冥帳」/「寺で、檀位[だんと]の死者の戒名[法名], 実名, 死亡年月日などを記録し保管しておく帳簿。鬼籍[きせき]。霊簿。鬼簿」, 初出=「平松家本平家[13C前]」)の4世紀後に、漢籍由来の「点鬼簿」(「“点”はしるす, “鬼”は死者の意 過去帳のこと」/「死者の姓名を書きしるした帳面。過去帳。また、古人の名を多く用いた詩文をいう」, 初出・漢典=「羅山先生文集[1662]」「全唐詩話-卷一-駱賓王」)が日本に入ったが、中国での廃語化(『漢大』保存)と対照的に現役である。

似た「鬼滅語」(造語)も多い(「鬼簿」「霊簿」「冥帳」は和製)が、「異域之鬼」の対義語「別世之人」は日本語と無縁で、後に日本で「別世界」が作られた(「①この世と別の世界。②自分が

いるのとは全くかけはなれた環境や社会。別天地。“われわれとは一の出来事” / 「**㊦**人間の住んでいる世界とは違った別の世界。地球以外の世界。**㊱**自分の属している既知の地域・範囲とは異なった、未知の地域・範囲。また俗世間とはかけ離れた場所・環境。別天地。別乾坤 [べつけんこん]。**㊲**互いに独立した、別々の環境・境地」, **㊱** **㊲**の初出 = 「談義本・根無草 [1763-69]」「思出の記 [1900-01] (徳富蘆花)」。

尤も「異域」は「本国」や「本地」(当地)との対が普通で、「別世」は中国でも定着していない(『漢大』未収)。他方、「対」に拘る意識の濃淡で両言語の相関表現の対称性/非対称性の差も顕著である。対と関る多義字「偶」の『現漢』の単語群中の【偶然性】(「物事が発展・変化する中で現れ得たり現れ得なかつたりする、この様に起り得たりあの様に起り得たりする状況を指す。偶然性は物事の発展の過程の本質と直接的関係が無いが、その裏に常に必然性が隠れている[“必然性”に対して言う]」)は、『広辞苑』では【必然性】と対で並立する事が無い。

『広辞苑』の【必然】(「**㊦**戦国策秦策] 必ずそうなること。“一の結果” ↔ 偶然)の複合語の項中、【一的/命題】の前の【一性】(「**㊦**哲] [Notwendigkeit[㊦]・necessity[㊦]] 何かがある以外でありえないこと。論理的必然性は、一定の前提から論理法則に従って結論が導かれること。倫理的必然性は、道徳法則が個人に対して義務ないし当為であること。自然的必然性は自然的事象が因果関係に支配されること。“一欠ける” → 偶然)は、親項目で対語・反義語と為る「偶然」を参考項目とし、形似の「偶然性」と対比しないのは、「~必然性は」の後の読点の有無と共に妙な不整合である。

【偶然】(「**㊦**名] ①何の因果関係もなく、予期しない出来事が起こるさま。“一が重なる” “一の出会い” ② **㊦**哲] [Zufall[㊦]・contingency[㊦]] ⑦必然的な [補筆] 原因や理由がわからないこと。人間の認識の不完全さを示す。④歩行者の頭に瓦が落ちてくる場合のように、ある方向に進む因果系列に対して、別の因果系列が交錯して生ずる出来事。↔必然。→必然性。⑧ [論] 否定しても自己矛盾を起こさず、その反対を考へることが可能な命題。㊱ **㊱**副] ふと。たまたま。はからずも。〈日葡〉。“一聞いた話”)も、唯一の複合語項【一性の音楽】の「偶然性」を立項せず「必然性」への参照を指示する。

『日国』の【必然】(「**㊦**形動ナリ・タリ] 必ずそうなること。そのように帰着するに決まっていること。また、そのさま。必至。↔蓋然・偶然。**㊱** **㊱**副詞的に用いて] 必ず。きっと」, 初出 = 「菅家文章 [900 頃]」「布令必用新撰字引 [1869] (松田成己)」, **㊦**の漢典 = 「国語 - 鄭語」の複合語項(【一性/的 [初出 = 1887] / 的条件/的判断 [同 = 1916] / 論 [= 1905]」)として、【必然性】(「必ずそうなるはずの要素、性質。そのように帰着せざるを得ない性向。↔蓋然性・偶然性」, 同 = 「善の研究 [1911] (西田幾太郎)」)は、「蓋然性」に次ぐ「偶然性」を反対語に挙げる。

【偶然】(「**㊦**名] [形動ナリ・タリ] **㊦**他のものとの因果関係もつながりもはっきりせず、予期しないことが起こること。また、そのさま。思いがけないこと。↔必然。**㊱** **㊱**副詞的に用いて] ふと。たまたま」, 初出 = 「松山集 [1365 頃]」「日葡辞書 [1603-04]」, **㊦**の漢典 = 「列子 - 黄帝」は、出現が「必然」より 465 年も遅いが、【偶然性】(「**㊦**予期しないことが起こる要素、性質。↔必然性。**㊱** “ぐうせい [偶性] ②”に同じ」, **㊦**の初出 = 「普通術語字彙 [1905] (徳谷豊之助・松尾勇四郎)」)は、「必然性」より早

い(複合語・成句項は初出順で【一的/の虚偽/事】[1905/16/46~47],【一発生/変異/論】は用例無し)。

「偶然性」の部分同義語「偶性」(「偶有性に同じ」/「①ある事物の本質や本体的なものでなく、たまたまその時にその事物に生じている性質。偶有性。偶有的属性。②あるものが偶然に生じた状態。偶然性」, ①の初出=「哲学字彙 [1881]」)も、その類語「偶有性」(「ある事物を考える場合に、本質的ではなく偶然的な性質。[旧版の“例えば,”削除]人間一般における [←を考える場合, その]皮膚の色のようなもの。偶有的属性。偶性。付帯性。→本質的属性」/“ぐうせい [偶性] ①”)と同じ, 初出同上)は、偶然の発生→必然の形成の過程を表す様に「必然」関連・複合語に先んじた。

【偶有】(「ある性質や能力を偶然にそなえていること」/「偶然に持っていること。たまたま持っている」)も、同じ文献(『広辞苑』=「近代 [補筆] 日本最初の哲学辞書。井上哲次郎ら編。一八八一年 [明治一四] 初版, 八四年再版, 一九一二年 [大正一] 三版を刊行」)に出た。【偶有的】(「(形動) “ぐうぜんてき [偶然的] ”に同じ)は、【偶然性】①, 【偶然的】(「(形動) 起こった物事が偶然であるさま。偶有的。↔必然的)と同じ辞書に現れた。【偶有的属性】(“ぐうせい [偶性] ①”)と同じ, 来歴未詳)と合せて、「偶然性」は類語・関連語が多いが、選りに選って『広辞苑』で選に漏れた。

『現漢』の【偶然】(「①事理上に必ずしも起らず、実際に起る。一般的な法則を超える [“必然”に対して言う]。“偶然の事故”“偶然の要素”“この状況が現れたのは大変偶然だ”②副偶爾① [=副属性詞。偶然に起る]。“繁華街 [原文=鬧市] でも偶に何回か鳥の鳴き声が聞える”), 【必然】(「①副属性詞。事理上に確定し変わらない [“偶然”に対して言う]。“必然の趨勢”“勝利は必然的に意志の強い人に属する”②哲学で、人々の意志に由って移り変る事の無い客観的な発展の法則を指す。“新しい事物が古い事物を取って代えるのは歴史の発展の必然だ”)は、反義語に対して言うと言記し「初めに対有りき」を現す。

【必然性】(「物事が発展・変化する中で避けられず、定まって変らない趨勢を指す。必然性は物事の本質に由って規定され、物事の必然性を認識する事は即ち物事の本質を認識する事だ [“偶然性”に対して言う]」)も含めて、【必】bì の 15 項(【必備/定/然/然性/修/須/需/要】の 8 項が『広辞苑』と共有)の内 4 項に反対語か示される(両言語共通の【剰余労働】の対義語【必要労働】、関連の【剰余産品】[剰余生産に由る製品]に対する【必要産品】)。故に『広辞苑』の未収は些か訝れるが、規模・網羅度が『現漢』を遥かに凌ぐのは言うまでもない。

「步步高升・指日高陞」——「上昇・上進・昇進」——「昇晉/晉升」——
「一步登天/到位」——「一挙成名」——「平步青雲・青雲直上」

『広辞苑』の【茱萸】(「[植] 吳茱萸 𦵏 の略)は『現漢』で「山茱萸・吳茱萸・食茱萸等の総称」と為り、【茱萸節】(「昔中国で、この日、人々の髪に茱萸を挿んで邪気を払ったところから」九月九日の重陽 𦵏 の節句)は未収である。【登高】(「副①高い処に上がる。“高きに登り遠きを望む”“ [比喩的] 1 歩 1 歩高きに登るよう祈る” [原文=◇祝歩歩~] ②重陽の節句に山に登る事を登高と

呼ぶ。“重九登高”)], 【異郷】(「他郷。他所の地 [同=外郷; 外地] [客と為る人に就いて言う]。 “異郷に滞在する [=客居]”) に対して, 実用度の低い「異客」は不採録と為る。

「歩歩登高」と類義の祈願表現「歩歩高昇」は, 【高升】(「鬪昇進する [原文=職務昇高]) の用例と成る。『日国』の同項(「物の位置や物事の程度などがあがること。上昇」, 初出=「内地雑居未来之夢 [1886] 〈坪内逍遙〉) は, 日本語で最多(同書所収 107 項)の同音異義語に入るが, 『広辞苑』載録の 51 項(内【洪昇】は中国清代の劇作家)には無い(【高声/姓/尚/承/昌/商/唱/翔/蹤】が有る)。和製とされた 1 例目の 2 世紀前に, 中国では既に現れた(『漢大』の【高陞】①「昔, 官職昇進 [同=昇官晋級] 者に対し恭賀を表す儀礼的常套句 [=客套話]」の初出=「清李漁《意中縁・赴任》)。

【指日高陞】(「とても早い内に官職が昇進できる事を謂う。昔, 官界 [原文=官場] の前祝い [=預祝] の辞令。『現漢』未収) は, 初出(「清易本胤《常語搜》卷四」引用「明程登吉《幼学瓊林・文吉》) が更に古い。【高陞】(「亦“高升”に作る) ②(「賞賜を要請する時の儀礼的常套句) の例(「《二十年目睹之怪現狀》第五二回) は, 清末～民国初の同著(第 88 回)中の「歩歩高昇」(両書未立項)の早期用例に先じた。次世紀の中共党大会(2012)で中央委員会選挙の際に広東音楽『歩歩高』が流れた事から, 「歩歩登高」の「吉祥語」(造語)故の生命力が感じられる。

『日国』の【上昇・上升】(「[1 文目は【高昇】と同じ] 上騰。↔下降」, 初出=「本朝文粹 [1060 頃] 〈藤原春海作〉) は, 其々「升」(今の中国の簡体字)「昇」に作る漢典を示す(「論衡-龍虚」「楚辞-九思・憫上」)。和製熟語「上昇志向」(『広辞苑』=「地位や社会的階層の上昇を望む考えや性向。“一が強い”」, 『日国』には用例無し)は, 中国語で「上進心」(=和製漢語「向上心」)に近い。両言語通用の「上進」(『広辞苑』の「地位や程度があがること。向上すること。[論吉『旧藩情』出典略])は, 和製扱い(『日国』の③は「江戸繁昌記〈1832-36〉」等の用例のみ)が適切ではない。

『日国』の①(「目上の人に, 差し上げること」), ②(「上へすすむこと。都へのほること)も, 漢典が付いていない(初出/用例=「塵芥 [1510-50 頃]」「サントスの御作業 [1591]」)。『漢大』の【上₂進】(「君上に進呈する事を謂う」, 初出=「宋梅堯臣《碧雲駝》)も, 【上進】①②(「向上。進歩」「功名を追求する事を指す」, 同=「《儒林外史》第二一回」「明葉憲祖《鸞鏡記・詩激》)も, 日本語に影響を与えなかったらしい。『現漢』の 1 義(「鬪向上する。進歩する」)も, 用例(「〜心 | 發憤〜 [發憤して向上する] | 不求〜 [向上を求めない]」)と共に日本語と隔たりが有る。

「上昇(升)/上進」の 1 字を含み「高昇(陞)」と意も重なる「昇進・陞進」は, 『広辞苑』(「官等・位階・地位がのほりすすむこと。“中尉に一する”」)の通り常用である。『日国』(「[古くは“しょうじん”とも] 官職・位階・地位がのほり進むこと。昇晉)の 8 例の表記は, 初出(「江談抄 [1111 頃]」)等の「昇」と 7 点目(「広益熟字典 [1874] 〈湯浅忠良〉)の「陞」で分れ, 漢典(「後漢書-王符伝」)の「升」は見出し語と成らない(【上昇・上升】の「昇」は漢典と 8 例中の 6 点で使われ, 「升」は 3・4 点目の「史記抄 [1477]」「西国立志編 [1870-71] 〈中村正直訳〉)に見える。

『漢大』の【升進】(「官位が昇進する [原文=晋升]」, 初出=「論衡・非韓」), 【昇進】(「登って

行く。上へ行く」, 出典 = 「南唐劉崇遠《金華子雜篇》卷下」) に対して, 【陞】には日本流の「陞進」が無い。『現漢』の【升¹ (昇, 陞)】【升²】 shēng の内, 異体の「陞」は親字の 1 の両義の後者 (「[等級が] 高く成る [同=提高]。 “昇級”」) に適用する。28 項中 11 項 (【昇格/華/華熱/級/降/降舵/降機/平/任/騰/天】) が『広辞苑』と共通するが, 『広辞苑』で例文が付き『日国』で漢典を付す「昇進・陞進」は無い。

『日国』の【昇晉】(「[晋] “しょうしん [昇進] ”に同じ。②すすめること」, 初出/用例 = 「小右記-寛弘二年 [1005]」「本朝文粹 [1060 頃] (大江匡衡作)」) は, 日本で死語と化す (『広辞苑』未収) 前に中国へ入っていない。中国語でも「晋」は「進」と同音 (jìn) であるが, 『現漢』の【晋^{1,2} (晉) 晉】の 6 項 (『広辞苑』との共通は皆無) 中の【晉升】(「[晋] [職位・級別を] 上げる [原文=提高]。 “中将に昇進する” “1 級昇給する” [= ~ 一級工資]」) は, 使用歴が浅い (『漢大』の初出 = 「曹禺《王昭君》第一幕」) に関らず, 両言語に多い反転形・類/異義の 1 例と成る。

「昇」は「陞」と同じく「升」を字形に含み昇進の語義を持つが, 天国に赴く意で逝去を表す「昇天」(『日国』の③「死んで魂が天にのぼること。死ぬこと」の初出 = 「百鬼園隨筆 [1933] (内田百閒)」, 未記載の漢典は『漢大』の④「人の死去を称する婉曲表現 [原文=婉辞]」に「唐劉禹錫《德宗神武孝文皇帝挽歌》之一」と有る) から, 『日国』の【鬼録に登る】(「“きせき [鬼籍] に入 [い]る”に同じ」, 用例 = 「花柳春話 [1878-79] (織田純一郎訳)」) が連想される。「登高」→「高陞」→「昇天」の連環を繋ぐ首・尾の 2 字は, 両言語の「登天」の消長や用法の違いに気付かせる。

「歩歩登高/高陞」と二重の対 (相対・対照) を成す 4 字熟語に, 「一步登天」(『現漢』 = 「忽ち [原文=一下子] 最高の境地 [同=境界] 或いは程度に到達する事を譬える。又, 地位が忽ち非常に高く上がる事を形容する。『漢大』の初出 = 「《獅子吼》第二回」) が有る。一步で天に登り詰める勢いの特進出世を表す場合は諷刺の意が強いが, 【成名】(「[晋] ある種の成功 [= 某種成就] によって名声を有する」) の用例「一挙~」(一挙に名を成す) や, 2005 年版追加の【一步到位】(「1 回で予定の目標に到達する事を指す」) の様に, 日本語にも入った「登龍門」の故事の一躍成就是称賛される。

『日国』の【昇進・陞進】の漢典 (「符独耿介, 不_レ同_二於俗_一, 以此遂不_レ得_二升進_一」) 中の「耿介」は, 日本語に早く入った (「『形動』 堅く節操を守り, 俗世間にまじわらないさま」, 初出・漢典 = 「延喜式 [927]」「楚辞-九弁」)。『広辞苑』の用例付き (「“耿” はかたい意 節操を守ることが堅くて俗世間と交わらないさま。狷介。 “一の士”」) は, 『現漢』の【耿】 gěng の 4 項中【耿耿】と同じ両書共有の同項 (「[書] 正直。世俗の時流 [原文=流俗] と異なる。 “耿介な性情” “耿介の士”」) に重なる。古来盛んな漢語吸収の半面, 「名の文化」を映す「成名」等は入っていない。

「成名」「一挙成名」(『漢大』の初出 = 《易・繫辭下》「唐韓愈《国子監業竇公墓志銘》」) の他に, 「平歩青雲」(『現漢』 = 「忽ちとても高い地位に着く至る比喩」, 同 = 「宋袁文《鬻牖閑評》」) も, 「平歩」(平常の歩み, 軽易な様の譬え。同 = 「唐白居易《潯陽歲晚寄八郎中庚三十三員外》」) と共に中国語に留まっている。【青雲】(「高い地位の比喩」) の用例も「平歩~」で, 次の【青雲直上】

〔官職の昇進がとて速くとて高い様の形容〕、同 = 「南朝齊孔稚珪《北山移文》」も、中国人好みの雄飛・昇騰、大欲・野望、直行・速成を現す。

「青雲の志 / 士 / 交わり / 便り」 —— 「扶搖直上・直昇」 —— 「昇降」 ——
「降伏 / 服」 —— 「誘降 / 降順 / 降將 / 寧死不降」 —— 「逆順 / 序」

日本語の「青雲」(「①青みがかった雲。また、あおぞら。②高く超えたさまの形容」/「①青みがかったくも。あおぞら。一説に、晴れた空。青空。また、非常に高い所のたとえに用いる。②地位、学徳などの高いことのとえ。高位。高官。③世俗から離れて超然としていること。世塵〔せじん〕を離れていること。さとの境地。④略〕、初出 = 「万葉〔8C 後〕」「菅家文草〔900 頃〕」「性霊集 - 七〔835 頃〕」、漢典 = 「史記 - 司馬相如伝」「史記 - 范雎伝」「謝靈運 - 還田園作詩」)は、②の 5 例の最後(「社会百面相〔1902〕〈内田魯庵〉」中の「一足飛に青雲に攀ちて駟馬に鞭つ」)に、「青雲直上」の意が見える。

『日国』の「語詠」(1) (「漢籍において、雲の色は青・白・赤・黒・黄の五色に分類され、このうち青色の雲は非常に高い所に生ずる。その高さから②のように、学徳の高さを表わす語として用いられた。また、地位の高さに結びつけて用いられる場合は、挙例の『史記 - 范雎伝』のように高位高官を表わし、ひいては立身出世の希望をいう“青雲の志”という表現を生んだ)、(2) (「青雲の高さを世俗の人の精神から超越したものとしてとらえると、③のように隠逸、脱俗の象徴として用いられることになる」)の通り、「青雲」の高位・高徳は五行学説に根底が在る。

【一の志】(「①高位、高官の地位にのぼろうとする志。立身出世しようとする希望。青雲の心。②俗世間からのがれようとする志」, ①の初出・漢典 = 「俳諧・鶉衣〔1727-79〕」「王勃 - 滕王閣序」)と違って、【一の士】(「①学徳の高い人。また、高位、高官の人。②俗世をのがれ隠れた人。隠逸の士」, 漢典 = 「史記 - 伯夷伝」「魏志注 - 荀攸賈詡伝論」)、【一の交わり】(「高位、高官を志して同時に仕官した縁による交際」, 同 = 「書言故事 - 交情類・青雲交」)は、和文使用歴が無い(『広辞苑』と共有しない【一の便り】「立身出世するための手がかり。高位、高官にのぼるつて」は、用例が「読本・雨月物語〔1776〕」)。

【青雲】③の初出中の「忽飛 - 青雲之上 -」も「青雲直上」と重なるが、「直上」(「すぐうえ。まうえ。②まっすぐに上ること。ひたのほりに上ること」/「①すぐ上。②〔形動〕まっすぐなさま。③〔一する〕ぐんぐんのぼること。まっすぐに上昇すること」, ①②の初出 = 「軍隊内務令〔1943〕」「西国立志編〔1870-71〕〈中村正直訳〉」)は、③の漢典(「孔稚珪 - 北山移文“度 - 白雲 - 以方潔, 干 - 青雲 - 而直上”」)が「青雲直上」を含み、動詞の用法は和文例が無く中国語限定である(①②は中国語で「〔正〕上方」「筆直」と言い、①は『漢大』の【直上】①〔同義, 初出 = 「元無名氏《漁樵記》第二折」に当る)。

『現漢』の【扶搖直上】(「地位・名声・価値等が急速に上昇する様の形容」)は、『日国』の【扶搖】①(「〔“ 颯〔ひょう・へう〕”の音を二字にのぼしたもの〕つむじかぜ。旋風。暴風。あらし」, 初出 = 「菅家文草〔900 頃〕」)の漢典(「莊子 - 逍遙遊“鵬之徙 - 於南冥 - 也, 水擊三千里, 搏 - 扶搖 - 而上者九万里”」)

に由来する。『現漢』に有る同項(「(書) ①窓下から上への旋風。②動旋回して[原文=盤旋]上る。飛騰する [=騰飛。“扶搖九万里”])は、『日国』の【登天】(「天にのぼること。昇天」, 用例・漢典=「文明本節用集[室町中]」「春秋左伝-成公一〇年」)と共に、『広辞苑』から消えている。

「直上・昇天」の各1字を含む中国語の「直昇」(真っ直ぐ昇る)は、helicopterの漢訳「直昇機」に用いられる。この外来語に当て字が無い日本語はelevatorには付き、『広辞苑』の両義(「①電力などによって人や貨物を上下に運搬する装置。昇降機。リフト。[漱石「現代日本の開化」出典略] ②昇降舵)は、中国語の「電梯」「昇降舵」と対応する。【昇降機】(「エレベータと同じ」)の親項目【昇降】(「①のほりくだり。あがりおり。②ひきあげることとおろすこと。③盛んになることと衰えること」)は、『現漢』では1義(「(動)上昇することと下降すること」)である。

『日国』の【昇降・升降】(「[“しょうごう”とも] ①のぼることとくだること。のほりくだり。あがりおり。②乗物に乗ったり、乗物から降りたりすること。③陰陽の気ののほりくだり。④盛んになることと衰えること」, 初出=「菅家文章[900頃]」「俳諧師[1908]〈高浜虚子〉」「史記抄[1477]」「新聞雑誌-四〇号附録・明治五年[1872]」, ①④の漢典=「礼記-曲礼上」「書経-畢命」)に対して、『漢大』の【昇降】(—jiàng)の①以下は②(「前進と後退」, 出典=「北齊顏之推《顏氏家訓・雜芸》」), ③(「昇進と免職[原文=黜退]」, 同=「南朝齊張充《与尚書令王儉書》」)である。

「降」の発音表記は異読のxiángと区別し、『現漢』の当該親字の両義(「(動)①投降。②降服させる。飼い馴らす[原文=降伏:使馴服]」)は、【降服(fú)】(「(動)投降・屈服する」)と【降伏(fú)】(「(動)征服する[同=制伏]。屈服させる。手懐ける」, 同1例)に当る。『日国』の【降伏・降服】(「[古くは“ごうぶく”] 戦闘に負けたことを認めて、敵の意志に従うこと。降参」, 初出・漢典=「続日本紀-天平一二年[740]」「春秋繁露-五行相勝」[其々「服/伏」に作る])は、異形・異義が同居する(「凶党を降伏すべき」と有る2例目の「平家[13C前]」は、後に精選版増補の「②敵を従わせる」で用例と成った)。

『広辞苑』の2表記・1義(「降参り伏すること。敗戦を認め敵に服従すること。降参すること。“全面—”)の傍ら、【降伏】(「[呉音]〔仏〕法力を以て仏敵・怨敵・魔障などを降し伏せること」)も有る。『日国』の同項(「[“ごう”“ぶく”はそれぞれ“降”“伏”の呉音] ①神仏の力や、またはその法力によって、悪魔・煩惱・怨敵などをとりしずめること。調伏[ちようぶく]。折伏[しゃくぶく]。②“ごうぶく[降伏]”に同じ」, ①の初出・仏典=「天台大師和讃[10C後-11C前]」「金剛經」)は、『語誌』[1](「サンスクリット語 abhicāra の訳、害をもたらすものを打ち負かす意」)の様中国の同形語と通じる。

【降】^{xiáng}①の挙例「誘〜|〜順|〜将|寧死不〜」の1語目(「(動)敵の投降を誘う[原文=引誘]」)は、『日国』では2義合一(「降伏・帰順をさそうこと。また、教えの道などに導くこと」)と成るが、用例(「安土往還記[1968]〈辻邦夫〉」)の13年前に現れた『広辞苑』は採録していない。漢典(「後漢書-馮衍伝上」)は『漢大』(古来の1義)でも最初に出るが、【降伏・降服】の②に無い漢典は『漢大』の【降服】^{xiáng}で現代の例が有る(初出=「蕭三《祖国十年頌》」)。一方、【降服】^{jiàng}は3義を持つ古語(①は「上衣を脱いで謝罪を表す事を謂う」, 同=《左伝・昭公十三年》)である。

次の「降順」(「**圖** 降・服従する [原文=従順], 『漢大』の初出=「《三国演義》第十回」)は、**【降】**の5項中『**廣辞苑**』と共有の3項に入るが、日本語は意味が違う(「数の大から小に進む順序。↔昇順」/「“ぎやくじゅん [逆順]”②③に同じ)。『日国』の**【逆順】**(「**圖** 道理に反することと従うこと。順逆。②進行方向と同じであることと逆らっていること。③逆の順序」, 初出=「往生要集 [984-985]」「航米日録 [1860]」「閑耳目 [1908] (渋川玄耳)」, **圖**の漢典=「周礼-秋官・小行人」)の**【逆】**と似て、中国語で「逆序」(「通常と相反する排列の順序。[3例略] 倒序とも言う」, 副項目= **【倒序】**)と成る。

3例目の「降将」は『**現漢**』『**廣辞苑**』とも項が無いが、『**日国**』には有る(「投降した將軍」, 初出・漢典=「日本外史 [1827]」「漢書-蕭何伝」)。3例中の最後(「李陵 [1943] (中島敦)」)に出た「降将李陵」は「異域の鬼と為る」の語源を作ったが、返信の相手蘇武は4例目の「寧死不降」(死んでも投降しない)の模範である。**【宁 (寧、寧、寧)】** nìng の**圖**①(「寧可: ~死不屈 | ~為玉碎, 不為瓦全」)の2例中、後者は日本語に入った(『**廣辞苑**』の【玉碎・玉摧】の出典=「北齊書元景安伝“大丈夫は寧^きむ玉碎す可^きも, 瓦全する能^たはず”」)が、前者(立項)は無縁の儘である。

日本語の「昇/升降」の陰陽の気の昇り降りの意は「一陽来復」と繋がるが、『**三国志演義**』(羅貫中 [元末~明初の小説家] 著長篇) 第49回(『七星壇諸葛祭風 三江口周瑜縱火』[七星壇に諸葛風を祭り 三江口に周瑜火を縱つ])で、曹操が「冬至一陽生, 来復之時」を根拠に東南の風が吹くのも理に適うと語る件。「一陽嘉節」の初出が息子曹植の散文に見える事と妙な「史縁・語縁」を紡ぐが、連想遊戯で浮上した一連の言葉(線→ライン→ライフル→来復→一陽来復→一陽嘉節→嘉慶→嘉/佳偶→佳期→佳肴→佳賓……)は、観覧車の旋回の如く多彩な景色を見せて来る。

「**卡賓槍・加農砲**」——「**先礼後兵**」——「**歩歩為營**」——「**榴散弾・子母弾**」——「**集束・収束・終息/熄**」

『**現漢**』の**【佳賓】**は2語併記の**【嘉賓】**(佳賓)の副項目で、後者(「尊貴な客人。“佳賓雲集” [原文=~如雲] “佳賓滿座”」)は、『**廣辞苑**』の**【佳賓】**(「よい客。珍しい客。賓客」)と逆の表記である。『**日国**』の**【佳賓・嘉賓】** **圖**①(「よい客。珍しい客」)は、漢典(前掲)と6例(初出=「田氏家集 [892頃]」)中4点の「嘉賓」より、3・4例目(「色葉字類抄 [1177-81]」「翰林葫蘆集 [1518頃]」)の「佳賓」が第1(『**廣辞苑**』では唯一)の見出し語と成るが、中国語では後発(『**漢大**』の**【嘉賓・貴賓】**の初出は「宋沈遼《甲辰年五月十五日夜澧陽觀月》詩」)の為か順位が低い。

『**現漢**』の**【佳/嘉賓】**は2字目の発音(bīn)に因り親字の第1項目と成り、**【卡】** kǎ (14項)の最初も**【卡賓槍】**(「銃の一種。銃身が比較的短く、自動的^{からやっきよう}に空薬莖を排出し [原文=退壳] 連続して射撃する事が出来、有効射程が小銃より短い」)である。「来復槍」と関るこの小銃の漢訳名は、日本語の「カービン銃」(「[carbine] 軽量・短銃身の自動小銃。元来は騎銃の意」/「カービンは英carbine もと、騎兵銃の意」 米陸軍の短銃身の自動小銃」, 初出=「琉球物語 [1948-56] (火野葦平)」)

と別々に考案された(「馬槍」[騎銃]の由来と性能を紹介する『漢大』には用例が無い)。

「カ」は能く音訳に使う(『現漢』1996年版新設の【卡拉OK】^{1a} [カオケ]等)が、「賓」の簡体字「宾」は「兵」^{bing}を含み「卡賓槍/賓槍」の字面も二重性格を持つ。【先礼後兵】(「先ず礼儀を重んじる方式で相手と交渉し、通用しない時に強硬な手段を用いる」)、という熟語(初出=『三国志演義』第11回)は「礼・兵」の対が無い日本では馴染めない。2字の38・46項は戦が多い国柄を映すが、【佳/嘉】の1項目【一賓】に対して、【歩】(22)は【一兵】【歩歩為營】(「軍隊が1歩前進する毎に陣営を設ける[原文=設下一道營壘]。行動が慎重で、防備が厳密な様の形容」)で始まる。

両言語共通の兵器名訳「加農砲」(『広辞苑』=「→カノンほう」)は、日露戦争の初年に現れた和製漢語(「『日国』=「カノン砲」のあて字の読み“カノンほう[一砲]”に同じ)、初出は「東京朝日新聞-明治三七年[1904]」である、片仮名表記の「カノン砲」(「砲身が長く、砲弾の初速が大で、主に射角四五度以下の平射弾道による遠距離射撃に適した火砲。加農^カの砲」/「[“加農砲”とも書いた]艦砲、戦車砲、高射砲など口径の割に砲身が長く、長距離射撃に適する大砲。かのう砲。カノン」)は、明治末年・大正元年の初出(「舶来語便覧[1912]〈棚橋一郎・鈴木誠一〉」)が挙げられる。

『広辞苑』の「カノン【kanon^カ・加農】(①大砲のこと。キャンノン。〈改正増補蛮語箋〉②カノン砲に同じ)」に対し、『日国』の【カノン】は1義(「[^カkanon]“カノンほう[一砲]”に同じ)」で、2例の初出(「西洋紀聞[1725頃]」)は上記①の出典(森島中良著、箕作阮甫補、1848年刊)より遥かに早い。後者(「小学読本[1874]〈榊原・那珂・稲垣〉」)で「迦砲(カノン)」に作り、「迦」は『現漢』で同音の【加/夾[夾]/伽/茄/佳/伽/迦】の後に在り(「音訳[原文=訳音]に用いる。固有名詞か[同=専名]にも用いる」)、以下の【枷/痲/笱/袈/跏/嘉/麤】と共に「加」を含む。

『現漢』の【加农炮】jiānóngpào(「砲身が長く、砲弾の初速が大で、弾道が低く伸びる火砲。多く直接照準[原文=瞄准]射撃に用い、主に装甲の目標・垂直の目標・遠距離の目標を射撃する。[加农、英 canon]」)は、関連の【加农榴弹炮】(「加农炮と榴弹炮の弾道の特徴[=特点]を兼ね備えた火砲。主に比較的遠距離の目標を射撃し工事・施設を破壊するのに用いる。略称加榴炮」)、【加榴炮】(「加农榴弹炮の略称」)と合せて、【加^{1 2}】(²は「加拿大」Jiānádà [加奈陀]の略)の47項中3項をも占める(見出し語中の「农/弾」は「農/彈」の簡体字)。

【榴】liú(「石榴」)の【榴弹】(「①炸薬の爆発[原文=爆炸]後に出来た碎片・衝撃波に由り、目標を殺傷或いは破壊する[同=摧毁]砲弾。②広く手榴弹・銃榴弹と大砲で発射する榴弹等を指す)で始まり、【榴弹炮】(「砲身が比較的短く、砲弾の初速が大で、弾道が彎曲する火砲。各種の地形上の性質が異なる目標を射撃するのに用い得る」)は、【榴霰弹】(「砲弾の一種。外殻[=弹壁]が薄く、内に黒い炸薬と小さい鉄球・鉄筋・鉄矢[=鋼柱、鋼箭]等を装備し、弾頭に時限信管[=引信]が付き、所定の目標の上空及びその附近で爆発し、敵側の密集した人員を殺傷できる。子母弾とも呼ぶ」)は、6項の半分と成る。

『広辞苑』にも【榴弹】(「弾体内に炸薬^カを詰め、到達点で炸裂させる[旧版=して敵陣地を破壊し人馬を殺傷する]砲弾」)、【榴弹砲】(「火砲の一種。弾道はカノン砲と迫撃砲との中間に位置する。弾道に軽

い湾曲を与えることによって、掩護体の後方にある目標を射撃する)、【榴散弾・榴霰弾】(「弾体内に多数の散弾が詰めてあり、炸裂して人馬を殺傷する砲弾」)が揃う。『現漢』の【石榴】に無い性質(『広辞苑』の【石榴・柘榴・若榴】の「秋に熟すと裂けて多数の種子を一部露出する」、『日国』の【石榴・石榴】の「果実は球状で黄橙色に熟して不規則に裂け、[略] 種子を露出する」)が、由来と思われる。

『日国』の【石榴^{だま}弾】(「榴弾 [りゅうだん] 砲弾、榴霰弾の俗称。殺傷破壊用の砲弾で、弾体は比較的薄く、炸薬量が多い」)、【榴弾】(「弾丸の一種。人員、資材に対して、爆風、破壊および破片効果を与えるために使用される、比較的薄肉の外殻の中に大量の炸薬 [さくやく] を充填 [じゅうてん] してある弾丸」)は、同じ文献(「近世紀聞 [1875-81] 〈染崎延房〉七・三ノ一二・二」)に初出が見え、次に【榴散弾】(「砲弾の一種。内部に多数の散弾 [鉛の弾子] が詰めてあり、散弾と弾殻の破片の飛散により人馬を殺傷することを目的としたもの。ざくろだま、同 = 「五国対照兵語字書 [1881] 〈西周〉」)が現れた。

【榴弾砲】(「曲射砲の一種。カノン砲に対して、比較的初速が遅く、榴弾を空に打ち上げる型の火砲をいう。射程距離は近いが、遮蔽 [しゃへい] されて目視できない対象に間接射撃をするため、遮蔽物を越えて射撃できる」)初出 = 「東京朝日新聞 - 明治三十七年 [1904]」も、和製である(『漢大』の3語の初出は何れも建国後)が、『現漢』の【子母弾】(【榴霰弾】の副項目、『漢大』は語釈「榴霰弾の旧称」のみ)は日本語に入らず、【集束】(「^{ケープル} 属性詞。[多くの単独の物体が] 束と成って集まり、或いは集合して1つの全体を成す」)の用例(「集束電纜」[集束爆弾 [原文 = 炸彈]])に有る類語も採録されていない。

両言語共通の「電纜」(『広辞苑』 = 「絶縁物で被覆した電線またはそれを束にしたもの。ケーブル」)も、「榴弾砲」「加農砲」と同年に日本で創出された(『日国』の初出 = 「風俗画報 - 二八七号 [1904]」)が、中国語の常用と逆に片仮名語に譲った。『広辞苑』の【クラスター爆弾】(「投下された容器から、空中で多数の小型爆弾が散布され、広範囲に被害を与える爆弾。その製造・使用・保有を禁止する条約が二〇一〇年に発効。[補筆] 集束爆弾」)には、件の複合語が出るが、【集束】(「[focussing] 光線の束などが一点に集まること。収斂^{くわん}。↔発散」)と意味がずれ、又もや外来語が主流と成る。

「クラスター 【cluster】」(「[花や実などの房の意] ①同種のもものが集まってつくる一団・群れ。②複数個の原子または分子が集まり、それらの一部分または全体に結合をつかって形成される集団。③コンピューターのディスク上の記憶単位。④複数のコンピューターを相互に接続して、全体で一台のコンピューターのように運用するシステム。[補筆]」)は、『日国』未収の半面「2020 ユーキャン新語・流行語大賞」の30候補に推薦^{ノミネート}された。集団感染に由る5人超の患者群を表す準戦時状態下の頻用語は、厄病禍の広域・急速加害の集束爆弾の散布・殺傷と妙に暗合する。

『日国』の【集束】(「しゅうそく [収束]」④と同じ)の語義(「④光線などの束が一点に集中すること。またその状態。集束。収斂」)の他、【収束】は多義を持つ(「①集めてたばねること。また、その状態。②おさまりのつくこと。決着がつくこと。③数学で、関数、数列、級数に関して用いる語。[④⑤略]」[⑤将棋で、寄せのこと]、①②の用例 = 「野火 [1951] 〈大岡昇平〉」「道草 [1915] 〈夏目漱石〉」)が、『広辞苑』で2義に収斂した(「①おさまりをつけること。おさまりがつくこと。“事態の一をは

かる”②〔数〕〔convergence〕数列が、ある一つの有限確定の値にいくらかでも近づくこと。〔略〕〕。

『漢大』の【集束】（「^{たば}集めて束ねる状態」〔=聚集成捆的〕、用例＝「周立波《湘江一夜》」）は、日本語の「収束」に近い。『現漢』の【収束】（「^①〔荷物を〕片付ける。^②約束する。^③結末を付ける。終る／終らせる〔原文＝収尾；結末〕。〔各1例〕」）は、『漢大』（「^①束縛する。縄や紐で確り括る〔同＝捆扎〕。^②終る／終らせる。^③結末〔＝結尾〕」）と異同が有る。後者の①（初出＝「《詩・小雅・白華》漢鄭玄箋」）は民国まで生きた（「蘇曼殊《非夢記》」）が、和製語義由来の②③（例＝「魯迅《華蓋集統編の統編：〈阿Q正伝〉的成因》」「魯迅《且介亭雜文二集・中国新文学大系・小説二集》序」）と違って消えた。

『広辞苑』の【収束】と【集束】の間の【終息・終熄】（「事がおわって、おさまること。終止。「内戦が一する」」）は、『日国』（「おわること。やむこと。終止」、初出＝「東京朝日新聞－明治四年〔1908〕」）の通り和製漢語である（『漢大』未収）。中国語で発音が違う（「収／集／終」＝shōu/jí/zhōng、「束／息」＝shù/xī）^{クラスター}3語は、日本語の同音で集束発生の奇病感染の収束・終息を祈願する語呂合せに成る。初出と2・3点目（「パスカルに於ける人間の研究〔1926〕〈三木清〉」「美濃浪人〔1966〕〈司馬遼太郎〉」）の「熄／息／熄」は、初めの火偏の下火と再燃を見せて興味深い。

「火砲／炮」——「大砲／炮」——「発破・起爆」——「^{カウントーダウン}倒計時」——「火暴／爆」——「人馬・軍馬・戦馬・兵馬・戎馬・兵戎」

日本語の「火砲」（「口径の比較的大きい火器。大砲」／「大砲などの火器をいう」、初出・漢典＝「航海日録〔1860〕」「元史－張榮伝」）、「大砲」（「^①大きな弾丸を発射する兵器。カノン砲・榴弾^{りゅうだん}砲・迫撃砲に大別」／「^②大きな弾丸を発射する兵器の総称。ふつう、口径五〇～六〇ミリ^{ミリ}以上の火砲をいい、構造的には野砲、迫撃砲、ロケット砲、機関砲などに、また、機能的には牽引式砲、自走砲、戦車砲、高射砲などに分けられる」、初出＝「捕影問答〔1807-08〕」）は、「炮」の表記（【大砲】の4例中2・3点目の「報徳記〔1856〕」「西国立志編〔1870-71〕〈中村正直訳〉」）が見出し語から除いてある。

『現漢』の【大砲】（「^①」）の親語は、【炮（砲、礮）】pào（21項、【炮兵／車／弾／火／撃／艦／艦外交／手／塔／台／眼】が『広辞苑』と共通、【炮艦政策】が後者の新版増補【砲艦外交】の併記類語〔未立項〕の①（「口径が2耗^{ミリ}以上、砲弾を発射できる重火器。火力が強く、射程が遠い。種類がとても多く、迫撃砲・榴弾砲・加農砲・高射砲等有る。火砲とも呼ぶ。我国古代の砲は機械で石を発射したのが一番早い。火薬の発明後、火薬で鉄の弾丸を発射するのに改めた」）である。「炮」の正字は火薬の発明を誇る中国の情感に合致し、「砲」を主とする日本流は古代中国の遺風を尊ぶ気風が漂う。

②（「爆竹：鞭～|花～〔“爆竹”“花火・爆竹”〕」）は古代中国の4大発明中の紙・火薬の結合で、③（「土石・建築物等の爆破で穿孔〔原文＝鑿眼〕に炸薬を装填した後、“炮”と呼ぶ」）は、和製漢語「発破」（『広辞苑』＝「鉸山や土木工事で、爆薬をしかけて爆破すること。また、これに用いる火薬の類」、『日国』の①の初出＝「風俗画報－二三四号〔1901〕」②は「暴動をいう、盗人・やくざ仲間の隠語。〔隠語構成様式

并其語彙 (1935))」) の名詞に当る。行為を表す「放炮」は動詞を使う構造に於いて、「発破を掛ける」(『日国』の①「発破を用いて爆破する」, 初出=「下足番 [1955] (井伏鱒二)») と対応する。

①より早い②(「荒々しいことばで督励する。あらっばく注意して励ます。気合いをかける」, 初出=「山の鍛冶屋 [1926] (宮嶋資夫)») は、『広辞苑』の1義(「強いことばで励ましたり、煽動したりする。気合を入れる」)と成る。乱暴な言葉で注意や意欲を喚起する意の成句は「爆発/破」の字面と重なり、「起爆剤」(「起爆剤と同じ」[当該項=「爆発を誘起するのに用いる火薬。わずかな衝撃などで発火するので、爆破薬・炸薬などの点火に用いる。雷汞・アジ化鉛の類。点火薬」]/「①爆発を誘起させるのに用いる薬剤。②比喩的に、ある事が起こるきっかけとなるもの。“改革の起爆剤となる”」)の譬えと通底する。

同じ二言語共通の「起爆」は『広辞苑』(「火薬の爆発を起こさせること。“一装置”」)より、『現漢』(「勳信管に点火し [原文=点燃], 或いは電気回路開閉器の鈕を押して [同=按動電鈕], 爆発物を爆発させる。“起爆薬”“定刻通り起爆する” [= 准時~]) が1例多い。『日国』(「火薬の爆発を起こさせること。また、そのための火薬」)の用例(「水の葬列 [1967] (吉村昭)»)は、現実に遅行した小説の表現である。中国人はその前の原子爆弾初実験(1964.10.16)の記録映画で、将校が読み上げた指令(「10, 9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1, 起爆!」)に馴染の契機を得た。

日本語の「カウント・ダウン」(「旧版の“特定の時点までの残り時間を知るため、”削除」数を大きな方から小さな数へ [ゼロまで] 数えること」/「九, 八, 七, 六…〇のように、数を大きい方から逆に数えること。ロケットの発射直前の秒読みや順位の発表などに使われる。転じて、大事業の開会、完成直前の秒読み段階についてもいう」)は、寸陰を惜しむ意識が現れる中国語の「倒計時」に転義が有る(「勳未来のある時点から現在に向けて時間を計算し、以てある期限までどれぐらい時間が有るかを表す [時間が増々少なくなり、増々緊迫する意を多く含む]。カウント・ダウンディスプレイ・パネル “逆順時間表示板” “工程は已に秒読みの段階に入った”」)。

『漢大』の【火砲】(「亦“火砲”“火炮”に作る。①火力を利用して [火薬の発明後に火薬を用いて] 弾丸を発射する重火器 [原文=重武器]。②爆竹を指す」, 初出=「唐武元衡《出塞作》詩「沙汀《范老老師》」)に対して、【大炮】(「①口径の大きい火炮。②好く激烈な意見を発表し、或いは議論するのが好きな人の比喩」, 同=《清史稿・兵志十一》「周立波《諸葛亮会》»)は性格に譬える。爆竹の「爆」の字形を成す「火暴」と同音(huǒbào)・同義語「火爆」は、紙で火薬を包む爆竹の様な二面性が有る(共に「暴躁; 急躁」[怒りっぽい。性急]と「旺盛; 熱鬧 [賑やか]; 紅火 [熱烈]」の両義)。

『日国』の【榴弾/榴散弾】の殺傷対象の「人員/人馬」と違って、『広辞苑』は後者(「①人と馬。“一一體” [②略], 副項目=【人馬】)で統一される。『日国』の同①(「人と馬。また、人の乗る馬。にんば」)は漢典(「戦国策-趙策上・襄子」)に拠り、初出(「田氏家集 [892 頃]»)が同義副項目(「平家 [13C 前]»)より早い。両書の他の語義は上半身が人間で腰以下が馬の形をした架空の怪物だから、共通する榴散弾の標的は第2次世界大戦後に各国で廃れた騎兵等を含め、21世紀初頭の『日国』の時代遅れ気味の古意踏襲は愉快である。

『現漢』の同項(「①転じて軍隊を指す。“全部の人馬が無事に [原文=安然] 長江を渡った” ②広く

ある集団の人員を指す。“従来の陣容” [= 原班～]。“私たち編集部の人員は比較的揃っている [= 整齐”]”] も、古来の「兵馬 = 戦力」の認識に基づく。①の例の下地と成る解放軍渡江（長江中・下流強行突破）戦役（1949.4.21～6.2）で、実際に騎兵や大砲を曳く馬が軍の一部として居た。但し「飲馬長江」（長江の畔で軍馬に水を飲ませる。転じて、長江を渡って南下し征伐する事を指す）は、由緒有る熟語（『漢大』の初出 = 『南史・檀道濟伝』）ながら『現漢』には見当たらない。

「飲馬」（『漢大』 = 「①馬に水を飲ませる。②戦争をある地域に齎す、戦争を通じて疆土をある地域に拡大させる事を謂う」, 初出 = 《左伝・襄公十七年》《左伝・宣公十二年》）も、日本語には無いが、日本の両書には軍隊・戦争関連の【軍馬】（「軍用に供する馬。乗馬・輓馬^ば・駄馬などがある。[桜井忠温『肉弾』出典略] / 「軍用として使う馬。乗用や物資輸送などに使われる」, 初出・漢典 = 「玉塵抄 [1563]」「漢書 - 食貨志下」）, 【戦馬】（「戦闘に用いる馬。軍馬」 / 「戦争に用いる馬。軍用の馬。軍馬」。同 = 「五国対照兵語字書 [1881]〈西周〉」「庾信 - 見征客始還遇獵詩」）が有る。

『現漢』の【戦馬】（「特殊な訓練を経て、作戦に用いる馬」）に対して、【軍馬】（「①軍用の馬。“軍馬場”②〈書〉兵馬。広く軍隊を指す。“各方面 [原文 = 各路] の兵馬”」）は多義・常用であるが、語釈中の類語「兵馬」は【兵馬備】（『広辞苑』と共通）の前に出ない。日本の両書採録（「①兵器と軍馬。②戦いに用いる馬。軍馬。③軍隊。軍備。④いくさ。たたかい」 / 「①兵器と軍馬。兵士と軍馬。転じて、軍備。軍隊。また、戦争。②軍用に供する馬。軍馬」, 初出 = 「清原国賢書写本莊子抄 [1530]」「令義解 [718]」, ①の漢典 = 「夢溪筆談 - 弁証・一」）と照らせば、腑に落ちない欠落である。

和製熟語【兵馬^{こうそ}惚】（「戦争のために、いそがしく落ち着かないこと」 / 「“惚”は忙しいこと」戦争のために忙しいこと」, 用例 [精選版増補] = 「江戸から東京へ [1922]〈矢田挿雲〉」）は、【惚】（「いそがしいこと。“兵馬一の間^か」 / 「①忙しいこと。②苦しむこと」, ①の初出 = 「宝觉真空禅師録 [1346]」, 漢典 = 「孔稚珪 - 北山移文」「楚辞 - 九歎・思古」）の例に出る。中国でも難読（kǒngcǒng）のこの文章語は、『現漢』（「〈書〉^形① [事が] 急迫で慌しい [原文 = 匆忙]。“兵馬 [同 = 戎馬] 惚”②窮困」）が示す通り、日本語と1字異形の同義熟語を構成する。

【戎馬】（「〈書〉^名軍馬。転じて軍旅・軍務を指す。“戎馬生涯”“戎馬惚 [軍務繁忙の形容]”」）の4字熟語は、日本語（「いくさに使う馬。軍馬」 / 「戦争に用いる馬。軍馬。戦馬」, 初出・漢典 = 「経国集 [827]〈小野篁作〉」「春秋左伝 - 成公一六年」）には無い。『漢大』の【戎馬惚】（【戎馬惚】の主項目）の初出（「清高阜《書影》序」）は、「兵馬惚」より2世紀余り早く現れた。『現漢』の【戎¹】róng（「〈書〉①兵器。武器。“兵戎”②軍事。軍隊。“戎馬”“戎装”“筆を投じて戎に従う” [原文 = 投筆従～]」）の挙例に、両言語で「馬 / 惚」と複合する「兵・戎」の組み合わせが出る。

【兵戎】（「〈書〉^名武器・軍隊を指す。“兵戎 [を以て] 相見える” [武装衝突の婉曲表現]」）は、『漢大』の①「戦争、戦乱」（初出 = 《礼記・月令》）→②「兵士（原文 = 士兵）、軍隊」（同 = 「唐韓愈《祭竇司業文》」）の順で成立した。日本の両書（「①兵器。軍器。②兵士。軍人。③戦争」 / 「兵士。武器。転じて、戦争」, 初出・漢典 = 「三代格 - 五・貞観一一年 [869]」「礼記 - 月令」）では、逆に戦

争を転義とする。戦争を表す現代中国語の「兵戎相見」(前出例文)も日本では馴染が無いが、『漢大』の出典(「呉晗《朱元璋伝》第三章二」)は前出の嘉靖→海瑞→呉晗の史縁と繋がる。

「兵馬大権・軍権」——「縦走・銃槍」——「縦断・銃弾」——「湾 / 弯曲」
——「佳能」——「膛綫 / 腔線」「施条銃 / 砲」

『広辞苑』の【兵馬俑】(「始皇帝兵馬俑坑」参照)は、当該項目(「中国陝西省西安市」〔補筆〕の始皇帝陵〔驪山^{麗山}〕の陵園〔旧版=外城〕の東にある巨大な陪葬〔←土〕坑。三カ所あり、最大の一号坑は東西二三〇〔1991・98年版=二一〇〕^{メートル}、南北六二〔同=六〇〕^{メートル}。ほぼ等身大の士卒や軍馬などの陶俑〔兵馬俑〕を約八千点〔←多数〕埋納。一九七四〔同=一九七五〕年発見)で詳説される。『日国』第2版増補の【兵馬俑坑】(「中国陝西省の始皇帝陵の外城にある土坑。一九七五年に等身大の士卒や軍馬の陶俑が多数発見された。始皇帝兵馬俑坑〔未立項〕)は、直前の『広辞苑』20世紀末版と通じる。

『現漢』の【兵馬俑】(「古代に陪葬〔原文=殉葬〕に用いた、兵士・軍馬に象^{かたど}った〔同=軍馬形象的〕陶俑)と比べて、日本の両書は秦始皇陵と1組を成す世界文化遺産(1987年登録)への注目度が高い。一方、『広辞苑』の【兵馬】の派生語3項中の【兵馬の権】(「軍隊を編制・統帥する権能。統帥権。〔坂崎紫瀾『汗血千里の駒』出典略〕)は、『日国』(「軍事を統轄する権力。軍を編制および統帥する権力」, 初出=「神皇正統記〔1339-43〕)に、和製熟語【兵馬大権】も有る(「国軍を指揮運用するための編制大権と統帥大権。旧帝国陸海軍では天皇に属していた」, 来歴未詳)。

【兵権】(「軍事面を指揮する職権。兵馬の権」, 初出・漢典=「神皇正統記〔1339-43〕〔晉書-庾亮伝〕)は、『広辞苑』の未収に対して『現漢』では載録され、語釈の「軍権」(「軍隊を指揮し異動させる〔原文=調動〕権力。“軍の指揮権を掌握する”〔同=掌握~〕」, 『漢大』の初出=《三略・上略》)は日本語には無い。「兵・馬」を含む4字熟語の【兵荒馬乱】(「戦時の社会の激動〔=動蕩〕・不安の形容」, 同=「元無名氏〔『漢大』普及本(2000)→明李唐資〕《梧桐葉》四折), 【兵強馬壯】(「軍隊の実力が強く、戦闘力に富む形容」, 同=《新五代史・雜伝・安重栄》)も一緒である。

『漢大』の【人馬】①(「伝説上の水中の怪物」, 出典=「晋崔豹《古今注・魚虫》:“人馬, 有鱗甲, 如大鯉魚, 但手足耳目與人不同耳。見人良久乃入水中。”」, 「“馬人”に作る版本も有る」)は、日本の両書の②②(上/下半身が人/馬の形をした架空の怪物。来歴未詳)とは別物である。次の【人馬座】は日本語の「射手座」に当り、神話・形状の由来(『広辞苑』の【射手座】に無い『日国』の説明=「ギリシア神話で半人半馬のケイロンが弓に矢をつがえた姿に見たてる」)は、日本で余り知られない漢名(同=「ひしゃく形をした六個の星を中国では南斗六星という」)に反映してある。

『漢大』の【人馬】②(「人と馬。多く軍隊を指す」)は日本語に無い意味も含み、初出(《呉子・治兵》)も『日国』の漢典と異なる。③(「広くある目標を達する為に組織した衆人〔原文=人衆〕を指す」)は現代の語義で、初出(「郁達夫《西遊日録》)の作者(『広辞苑』の【郁達夫】=「〔Yu

Dafu] 中国の文学者。名は文。浙江の人。東大卒。郭沫若らと創造社を興す。北京・武昌師範・中山大に歴任。終戦直後スマトラで日本憲兵に殺害される。作『沈淪』『薄奠』『春風沈酔的晚上』など。二九〇六は、「兵戎相見」の末に縁が深い敵国の暴力で命を落とし、自国の内争で惨死した呉晗と対に成る。

「人馬」は人/馬力→勢力・陣容の意を生み出し、【人仰馬翻】(「①交戦中の大敗の狼狽振りの形容。“敵は人も馬も引っ繰り返る程に打ち負かされた”[原文= 敵人被打得~] ②混乱或いは忙殺で収拾が付かない様の形容。|| 馬翻人仰・馬仰人翻とも言う)、『漢大』の初出=《太平天国歌謡伝説集・打礼社》『花城』1981年第5期)の様に、軍勢や難局への対応に必要な実力等を表す。【人困馬乏】(「体力が持たず[同=不支]、疲れて堪らない様の形容[必ずしも馬が居るとは限らない]=[不一定有馬]、同=『三国演義』第四十回)は、但し書きの通り馬と分離した語義が現代の主流と成る。

『広辞苑』の【収束】の前の【縦走】(「①縦に貫くこと。南北に連なっていること。縦貫。②[登山用語] 尾根伝いに山を歩き、多くの山頂を踏む登山形式。“八ヶ岳を一する”)は、『日国』で示す成立順が②(「登山で、尾根づたいに歩き、多くの山頂を踏んでいくこと。縦断」、初出=「現代術語辞典[1931]」)→①(「縦に貫くこと。特に、山脈などが、縦に長く連なっていること」、用例=「野火[1951]〈大岡昇平〉」)である。後者は同じ頁の【収束】①の例と同一作品(「二三/八」)から採り、共に異邦の自然の所産(「レイテ島を縦走する脊梁山脈」「漏斗状の斜面の収束するところ」)である。

『野火』(『広辞苑』=「小説。大岡昇平作。一九五一年『展望』連載。作者のフィリピンでの戦争体験に基づき、落伍した一兵士を描き[旧版=の]人間生存の極限に[旧版の“まで”削除]迫る。戦後文学の代表作の一つ[補筆])は、著者(「作家。東京生れ。京大卒。[早←から]小林秀雄・[←に学び]」中原中也らを知り、スタンダールに傾倒。戦闘・俘虜体験に基づく『俘虜記』『野火』から大作『レイテ戦記』に至る戦記文学や『武蔵野夫人』『花影』などがある。二九〇六)の特異な経歴の結晶である。日本史上初の海外に於ける大規模敗戦・俘虜群発生は、李陵の「異域之鬼」の諦観への理解に役立つ。

『日国』の【縦走】②語釈中の類語「縦断」(「①たてにたちきること。②たて、または南北の方向に通り返ること。“本土を一した台風”。↔横断」/「①縦または南北の方向に断ち切ること。また、その方向に向かって通り抜けること。↔横断。②山脈の走っている方向に尾根を歩くこと。縦走」、①の初出=「思出の記[1900—01]〈徳富蘆花〉)は、『広辞苑』で「銃弾」(「銃の弾丸」/「[1文目同じ]鉄砲のたま」、[工学字彙[1886]〈野村龍太郎〉)の次に出る。中国語の「縦/銃」「断/弾」は発音が違う(zòng/chòng, duàn/dàn)が、日本の同音2語は「語縁」探究の縦走で「銃・弾」と繋がる。

両書の【縦走】の前の【銃槍】(「先に剣をつけた銃。銃剣」/「①銃と槍。鉄砲と槍。②鉄砲。特にその先端に剣をつけた銃」、初出=「西洋事情[1866—70]〈福沢諭吉〉」「万国新話[1868]〈柳川春三編〉)も、「縦走/断」と同じ和製漢語である。『現漢』の【銃(銃)】(「旧式の火器の一種。“火繩銃”[原文=火銃]“鳥銃”)は常用でなく、唯一の項【銃子】も同音の【冲子】(「金属製の、^{あな}孔を開ける道具[=打眼工具]の一種)の別称である。『漢大』の5項(【銃子/手/炮/槍】が『日国』に同形語有り)も廃れ、今や「枪(槍、鎗)」(『現漢』の24項は全て日本語と共通せず)に取って代えられた。

「銃」は字形に弾薬充填の「充」（中国語でも同音〔異声調〕）が有り、鉄砲（和製語義）を表す中国語の「槍」は弾倉の「倉」（異読の chāng）を含む。「銃／槍」の金／木偏と「炮／砲」の金／石偏は五行の金／木／火／土に対応し、「銃砲／炮（礮）」（「小銃と大砲。また、銃器」／「小銃と大砲」）初出＝「近世紀聞 [1875-81] 〈糸野有人〉」／『漢大』は「土炮 [旧式／自製の炮]；火炮」初出「清黄六鴻《福惠全書・莅任・親査閱》」は『日国』の2世紀前、中国語の「槍炮」（『漢大』は「銃と炮、広く武器を指す」、同＝「二十年目睹之怪現狀」二四回）は、金・石（土）、木＋火の属性を帯びる。

『広辞苑』の【榴弾砲】の語釈中の弾道の「湾曲」は、【湾曲・彎曲】（「弓形にまがること」／「〔名〕〔形動タリ〕弓なりにまがること。まがりくねっていること。円弧を描くようにまがること。また、そのさま」）の意である。4例の初出（「新聞雑誌-五号・明治四年 [1871] 六月“軍艦は河の彎曲 [わんキョク] の大砲台を弾射す”」）で、弓を字形に含む「弾」の砲撃でなく河の曲線を表す。3・4点目（「小学読本 [1884] 〈若林虎三郎〉」「暗夜行路 [1921-37] 〈志賀直哉〉」）も、川や海岸の描写である。【補注】（「湾曲」は「彎曲」の書き換え）には頷けるが、三水偏の例が1つも無い。

『漢大』の【湾曲】①②（「水の湾の曲折した処」「彎曲して真っ直ぐでない。“湾”は、“彎”に同じ）は、漢典（「前蜀李珣《漁歌子》詞之一」「老残游记續集遺稿 第一回」）が付く。【彎曲】①（「曲がって真っ直ぐでない」）も『日国』の和製扱いを否める様に、初出（「唐鄭榮《開天伝信記》」）が古い。『現漢』の【弯（彎）】の5項中【彎曲】が有り（「ㄟ真っ直ぐでない。[2例略]」）、同じ wāng の【湾（灣）】は4義の例と単語1項に「湾曲」が無い。Pail Harbor の和訳「真珠湾」（中国語は直訳の「珍珠港」）にも滲む日本人の水好みは、「炮」の火偏に対する敬遠と通底する。

日本の精密機器製造業社キヤノン（Canon）の漢訳「佳能」（Jiānnéng）の佳い性能の意は、「膛綫」（ライフル・ラインの正式名称）の語義に出る。『現漢』の táng の17字（【唐】系9〔“塘・糖”等〕、【堂】系5〔“螳”等〕）中の【膛】は、両義（「①胸腔。“胸腔”“腹を割く”②器物内の中空の部分。“炉の胴”“銃腔”“弾を銃腔に充填してある”）とも日本語の「腔」と通じ、唯一の単語項が【膛綫】（「銃身或いは砲身の内面の螺旋状の凹凸の線。尖ったのは陽線と呼び、凹んだのは陰線と呼ぶ。発射弾が旋回して飛行する様にし、射程・命中率と貫通力を増進するのが役割。来復線とも呼ぶ）である。

【膛】の数例（「胸～|開～」「炉～ㄟ|槍～|子彈上了～」）も日本語から意味を推測し難いが、「膛綫」の形似・類義語「腔綫」は同じ働きを持つ（『広辞苑』＝「銃砲身の内面に螺旋^{らせん}状に彫った溝。発射弾に回転運動を与え弾道を安定させる。腔綫。ライフル」）。『日国』の【腔綫・腔綫】（「発射弾に回転運動を与えるために、銃身・砲身の内面にらせん状につけた溝のこと」）の2表記併記は、【旋条痕】（「ライフルから発射された弾丸についた銃腔内の旋条 [らせん状の線条] のあと」）の単一表記と逆ながら、俱に『広辞苑』との差別化で日本語の多様性を現している。

『日国』の【ライフル】（「[英 rifle] “ライフルじゅう [一銃] ”に同じ）は、関連語群の源頭（「幕末外国関係文書-堀田正睦宛島津斉彬書簡・安政四年 [1857]」）を示す。【ライフル銃】の初出（「内外新報-慶応四年 [1868]」）は少し遅いが、語釈（「銃身の内部にらせん状のみぞがきつてある小銃。弾

とえ)は、**1**の初出の前世紀の用例(「太平記 [14C 後]」)で和製成句の長い歴史を示す。【籠鳥】(『広辞苑』=「かごの中に飼われている鳥。束縛されて自由にならない身のたとえ。かごのとおり」、『日国』の初出・漢典=「本朝無題詩 [1162-64]〈藤原茂明作〉」「中論-亡国」)との結合で、中国語の「籠中鳥」(「閉じ込められて [原文=受困] 自由を喪失した人の譬え」)にも無い比喩が生れた。

日本語の「彈弓」(『広辞苑』=「[ダングとも] 竹の弦で球形の弾丸をはじき飛ばして射る弓。古代の猟具・遊び道具。はじき弓」)は、「弾丸」の第1の語義と同じく古代の物事を指すが、『現漢』の【彈弓】dàngōng(「弾 [tán] 力で弾丸を発射する弓」)は今も子供愛用の自製玩具で、【彈丸】dàn wán(「**1**弾弓に用いる鉄丸或いは泥の丸。**2**銃弾 [原文=槍弾] の弾頭」)は**2**が日本語と違う。「彈弓」と「彈弓」は【弾】dàn (15 項, 258 頁)と【弾】tán (19 項, 1268~9 頁)と対応し、日本語の「弾丸・弾力」で同音の「弾」は【彈弓】項内の「弾 (tán)」の様に異読と為る。

【弾】dàn (**1**弾き玉 [原文=彈子]。**2**銃弾。砲弾。爆弾 [同=炸彈])の諸項中、【彈道/弓/痕/頭/丸/薬】は両言語共通で、【彈丸之地】(「とても小さい地域の形容」)は表記だけが違い(「之/の」)、【彈道式導彈】(略称「彈道導彈」)【彈着点】は日本語の「彈道誘導彈」「彈着」と異なる。【弾】tán (**1**弾く。弾き出す。**2**[綿・羊毛等を] 打つ。**3**[指で] 弾く。**4**[洋琴・琵琶等を] 弾く。**5**[涙を] 手で拭う。**6**弾性が有る。**7**糾弾する)も、同形・同義の【弾効/力/性/圧/指/奏】が有る。両言語の相互影響・受容を現す様に、共通2字語の4割強(「彈道/痕/頭/薬/性」)が和製である。

動/名詞中心の「弾/彈」の**1****2**は発射・射撃の意で通じ、後者の遊具・武器の両義は弾弓も持つ殺傷力(今も人を怪我させる事故・事件有り)で繋がる。日本語の「弾丸」の火器発射の意と「ライフル」は19世紀の第2・3四半期(中国語で「季度」と言う和製漢語の転用)に生れたが、『広辞苑』の【ライフル】は【一銃/砲】の複合語項が有り、両言語の「ライフル銃/来復槍」と「小銃/歩槍」の共通規定を超えて、【ライフル射撃】は小銃・拳銃(中国語=手枪)を含め、全米ライフル協会(銃製造業・愛銃家 [造語] の団体)の固有名詞も銃器全般を指す。

日本ライフル射撃協会(日本射撃協会 [1937 年前身創設, 戦後解散, 49 年再建] の改組に由り 53 年独立, 71 年社団法人化)と違って、中国射撃協会(56 年成立, 国家体育委員会 [中央官庁] 所轄)は名称に特定の銃器が無い。和製漢語「射撃」(「銃砲から弾丸を発射すること。的をねらいうつこと」/「銃砲から弾丸を発射すること。銃砲をうつこと。銃砲で標的をねらいうつこと」, 初出=「東潜夫論 [1844]」)は、『現漢』の**1**(「動銃砲等の火器を用い標的に向けて弾丸を発射する」)も同義であるが、「用槍炮等火器向目標發射彈頭」より「用槍炮等火器等向目標發射彈頭等」の方が良からう。

日本語の「火器」(「**1**火を入れる器具。火鉢の類。**2**火薬を用いて弾丸を発射する兵器の総称。銃砲。火兵」/「**1**火を入れる器具。火鉢の類。**2**火薬の爆発圧力を使って弾丸を発射する兵器。銃砲」, **2**の初出・漢典=「読本・近世説美少年録 [1829-32]」「福惠全書-刑名部・賊盜上・緝捕」[『漢大』の初出「明王世貞《鳳洲雜編・兵制》は同書 [黄六鴻, 1694] より1世紀早い」)の両義(和製の方は来歴不明)に対し、『現漢』は1義(「爆薬 [原文=炸薬] 等の爆発 [同=爆炸] 或いは燃焼の性能を利用して殺傷・

破壊の作用を起す武器。銃・砲・ロケット [=火箭筒]・手榴弾等 [“冷兵器”に対して言う] である。

【冷兵器】(「斬殺・撞着^{ぶつかり} [原文=砍殺、撞撃]・刺殺に用いる、爆発或いは燃焼の物質を持たない武器を指す。刀・剣・矛・槌^{ほこつち} [同=錘]・棍棒・銃剣・匕首^{あいくち}の類 [“火器”と区別する]) は、日本に無い「火器」の対義語である。【熱戦】(「武器を使用する実際の戦争を指す [“冷戦”に対して言う]) も、【冷戦】(「国際間で行われる戦争形式以外の敵対行動を指す」)の対義語と為るが、日本語の同項(「熱のこもった激しい勝負。主に競技にいう。“一を展開する”/「激しく戦うこと。特に、熱のこもった、激しい勝負、試合にいう。激戦」, 初出=「熱球三十年 [1934] (飛田穂洲)」)は、「冷戦」と対を成さない。

日本語の「冷戦」(「cold war」) 砲火は交えないが、戦争を思わせるような国際間の敵しい対立抗争の状況。第二次大戦後の米ソ関係を表す。W.[点は補筆]リップマンの著書で有名になった語。冷たい戦争」/「[英 cold war の訳語] 国際間における経済・思想・宣伝など、武力によらないはげしい対立抗争。第二次世界大戦後の造語で、米国とソ連の間の対立関係を称したことに始まる語。冷たい戦争。コールドウォー。また、人間関係などで、それに似た状態を比喩的にもいう」, 初出=「ボロ家の春秋 [1954] (梅崎春生)」は、譬えの意も持ちながら対立軸を設ける発想の不在で既成の「熱戦」と結び付かない。

両書の外来語の対義2項の並立(『広辞苑』の「コールド-ウォー【cold war】=「→冷戦。↔ホット-ウォー」,「ホット-ウォー【hot war】=「直接武力に訴える戦争をいう。熱い戦争。↔ホット-ウォー」)。「日国」の【コールドウォー】=「[英 cold war] 国際間における経済、思想、宣伝などの武力によらないはげしい対立抗争。第二次大戦後の米ソ間の対立関係を称したことに始まる語。冷たい戦争。冷戦」,【ホットウォー】=「[英 hot war] 直接武力行動をする戦争。熱い戦争」)は、「冷戦・熱戦」の非対応を浮彫にし、英語にも無い「冷兵器」の漢単語の不在の必然性を思わせる。

「冷・寒・涼」——「早晨・晨光 / 昏 / 星」——「晨昏 / 温清定省」——「晨鐘暮鼓」——「一日之計 於晨^{あした} / 朝に在り」 「一年之計在於春 / 元旦に在り」

『日国』の【冷たい戦争】(「[英 cold war の訳語] ①第二次世界大戦後、特に一九四七年以降、アメリカ・ソ連をそれぞれの代表とする東西両陣営の、実際には砲火を交えない対立抗争状態をさす。実際に戦火を交える戦争に対していう。マーシャル-プラン発表以降、両陣営の対立が激化し、NATOとワルシャワ条約機構の対立、朝鮮戦争、インドシナ戦争など一触即発の危機が続いたが、スターリンの死後、いくらか緩和され、ソ連の解体によって解消した。アメリカの評論家リップマンがはじめて使用した語。冷戦。②お互いが表にあらわさないので心の中でいがみ合うこと」)は、初出未詳で和製の証明が無い。

親項目【冷たい】の【語源】(「[1] 現代語では、“冷たい”は、話し手の身体の接触的な皮膚感覚に基づいて、対象としての事物の状態を表わす。それに対して、“寒い”は身体内部の生理感覚に基づいて、話し手または感覚主の状態を表わす。[2] “冷たし”は“寒し”よりも新しい語であるが、中古においては、①のように“寒い”と意味領域を接触しながら、ほぼ両義の語として存在していた。その後、中世から近

世にかけて、徐々に意味領域を分化させて、現代語と同様の区別が完成したものと思われる [略]) は、両言語の「寒冷」の語順 (中国語の声調順と日本語の 50 音順) に合う和語の形成と分化を示す。

『広辞苑』の【冷たい戦争】(「[cold war] 冷戦と同じ」)の前の【冷たい】は、両義(「〔形〕
図つめた・し [ク] ①温度が低い。[旧版=く,] ひややかに感ずる。[旧版の“ひややかである。”削除] つ
べたい。〔季冬〕。〔落窪一〕出典略“一・い飲み物”“手が一・い”[補筆] ②人情に薄い。冷淡である。
“一・い仕打ちを受ける”“一・い目で見える”)とも、『現漢』の【冷】に類義が見られる(「①[㊦]温度
度が低い。温度が低いと感じる[“熱”に対して言う。以下の⑥も同じ]」「③[㊦]不親切 [原文=不熱情]。
温和でない)が、後者の別の形容詞(「⑧[㊦]落胆 [同=灰心] 或いは失望の形容)の意は無い。

他の諸意(「②<方> 動冷やす [多く食べ物を指す]」「④静寂。賑やかでない [原文=“寂靜;不熱鬧”]
「⑥人気が無い。注目されない [同=不受欢迎的;没人過問的]」「⑦不意の [=乗人不備的]。暗中の。突然」「⑧
辺鄙。滅多に見掛けない [=生僻的;少見的]」「⑨ [Lěng] 図姓の一)の内に、日本語の動詞と同じ
字を使う②以外は「冷」の両言語共通の形・義が無い。①の3例(「〜水 | 現在還不算〜, 雪後
オ〜呢 | 你〜不〜?」)も「冷水」は日本語(「れいすい/ひやみず」と一緒であるが、次(「今は
未だ寒いと言えず [=不算, 雪の後こそ寒いよ]」「貴方は寒いですか」)は「寒い」に当る。

『広辞苑』の【冷素麵】(「索麵をゆ [旧版=茹[㊦]] でた後、冷水や氷で冷やしたもの。紫蘇[㊦]・生姜[㊦]
葱[㊦]などの薬味を添え、冷たい付け汁で食べる。冷素麵。〔季夏〕)には、「冷水・冷やす・冷
たい」が出揃い、水が氷点下の温度で固体状態と成った氷も現れる。【冷麵】(「朝鮮料理。そ
ば粉に[㊦]も澱粉か小麦粉を加えて製した麵をゆでてから冷やし、肉 [←焼豚]・キムチ・野菜などをのせ
てつ [←冷] めたい汁をかけたもの。ネンミョン [補筆])も内の2語を含むが、旧版の「冷めたい」
は該当項の見出し【冷素麵】中の仮名表記の違い、2項の「茹/ゆ」の不一致は興味深い。

『現漢』の【冷面】[㊦] 2 (「①朝鮮族の伝統的食品の一種。蕎麦粉或いは小麦粉等に澱粉・水を加えて
捏ね [原文=拌勻], 薄く伸ばして線状の麵にし [同=圧成円麵条見], 茹でた [=煮熟] 後冷水に浸し、搦
い [=撈] 出して牛肉の切れ・唐辛子・沈菜[㊦] [=泡菜] 等の薬味 [=作料] を混ぜ、牛肉汁を掛けて仕上げる。
②<方> 冷やし [=涼] 麵)は、少数民族を含めた①の解説で「冷水」を使う。②(「冷やして食
べる [=涼着吃的] 麵の一種。茹でた後冷水に浸し [=過凉水], 食べる時に薬味を付ける)は、「涼水」
(同じ「温度の低い水」「生水」の両義、但し意外な打撃や希望の頓挫に譬える意が無い)も出る。

『広辞苑』の【冷し中華】(「ゆでてから冷やした中華そばの上に、錦糸卵や、生野菜・焼豚など
の千切りをのせ、酢・醤油・砂糖・ゴマ油などを合わせたたれをかけたもの。涼拌麵[㊦] [旧版=スラ[㊦]]」)は和
製語(『日国』=「中華料理の一つ。ゆでた中華そばを冷やして、酢、しょうゆなどから作ったたれを
かけ、薄焼き卵、きゅうり、くらげなどの具をのせたもの)で、附記の中国語(未立項)は本国
では具付きの様々な「涼麵」(liángmiàn)を指す(「拌」bàn = 混ぜる)が、中国語の「涼」
はこうして日本語の「冷/冷たい/冷やす/冷やか」にも当る。

『広辞苑』の【寒い】(「〔形〕[㊦]さむ・し [ク] ①気温・温度 [補筆, 以下同] が低く [旧版=いために,]

皮膚に〔不快な〕刺激を感じる。寒気が強い。〈季冬〉〔万五〕『催馬楽、飛鳥井』『日葡』出典略“一・い朝”
 ②ある物事がひえびえとした感じである。〔万八、同〕“山の蒼ざめた一・い色”③心細く貧弱である。
 貧しい。〔淨、手習鑑〕、同“お一・い施設”④恐ろしさにぞっとする。身の毛がよだつばかりである。
 〔旧版の『源紅葉賀』出典削除〕“背すじが一・くなった”⑤場にふさわしくない言動に対して白けた感じ
 になる。“部長のギャグはなんとも一・い”)も、③以外は「冷/涼」の表現で対応できる。

①の例「寒い朝」は中国語で「寒冷的早晨」と言い、同義2字の形容詞「寒冷」は類義2
 字の名詞と釣り合う（「的」は2字以上の形容詞の連体形。『広辞苑』にも【早晨^{しん}】が有る（「朝は
 やいうち。早朝。早旦」）ものの、今や廃語に近く次の【争心】（同＝「人とあらそう心」）と共に同
 音の電^{コンピュータ}脳漢字変換候補に殆ど出ない。この輸入漢単語（『日国』＝「朝早いこと。早朝。早天。早
 旦」, 漢典＝「鮑照－舞鶴賦」）は、初出（「永平道元禪師清規 [13C中] 弁道法“坐禅法。早晨鳴^レ板。
 黄昏響^レ鐘”）に對が有るが、中国では「清晨（＝「清らかに晴れた朝」）・黄昏」の對が好まれる。

『現漢』の【晨】（①早朝。広く夜半から正午までの時間を指す場合も有る。“清晨”“明け方”〔原
 文＝凌～〕“晨光”②〔Chén〕〔^姓の一〕）の8項中、3項が『広辞苑』と共有する。両書の【晨光】
 （「清晨の陽光」/「あさひのひかり」）、【晨昏】（「〔書〕早晨と晩」/「あさとひぐれ。朝夕」）、【晨星】
 （「①清晨の^{まぼ}疎らな星。②我国の古代に、日の出の前に東の方に現れる金星或いは水星を指した」/「明
 け方の空に残る星。また、物事のまばらで、稀なさまのたとえ）は、中国固有の【晨星】①を除
 いて同義であるが、4字熟語の有無に異同が現れる。

【晨光】【晨星】①の例（「晨光が仄^は明るい」〔原文＝～^熹微〕/「疎らで晨星の^{まぼ}若し」〔同＝寥若～〕）は、
 4字熟語も構成要素の別語も『広辞苑』には無いが、【晨昏】の例（「昏定晨省〔朝と晩に両親
 に仕え安否を訊ねる〕」〔＝～定省（早晨和晩上服侍問候双親）〕の場合は、完全合致の【定省】が有
 り（「〔礼記曲礼上〕“凡そ人の子為たるの礼、冬は温かくして夏は清^きしく、昏^くは定めて晨^はは省^みる”〕
 〔晩には父母の寝具をととのえ、朝にはその安否をたずねる意〕子が日夜よく親に仕えて孝養をつくす
 こと。ていしょう。昏定晨省^{ひんていしんせい}。副項目＝【定省】）、同義・異形の熟語も掲げられる。

『日国』に有る【晨昏】（①朝と夕。朝夕。朝暮。旦夕〔たんせき〕。②朝夕に仕えること。常に大事
 にして奉仕すること、初出＝「家伝 [760頃]」「本朝文粹 [1060頃]〈大江匡衡作〕、①の漢典＝「張九
 齡－奉使南行詩」）、【定省】（「〔礼記－曲礼上〕の“凡爲^レ人子^レ之礼、冬温而夏清、昏定而晨省”の“昏
 定晨省”を略した語〕子が親に対して、夜はその寝具をととのえ、朝はその安否をたずねること。朝夕、
 親に孝養を尽くすこと、初出・漢典＝「令義解 [833]」「夏侯湛－東方朔画賛序」。副項目＝【定省^{しんせい}】）は、
 中国語（『漢大』の【晨昏定省】の初出＝「宋陸遊《上殿札子》）と違って成語に複合していない。

【昏定晨省】（「〔礼記曲礼上〕〔補筆〕夕べに父母の寝床を定め、朝に父母の安否を省みること。すなわ
 ち子が父母に対して日夜よく仕えること。温清^{ひんせい}定省」/「夜は父母の蒲団を敷き、朝は機嫌を伺って、
 子が親に孝行すること。晨省昏定」, 用例＝「山鹿語類 [1663]）は、【定省】と同じ漢典に拠る（「而」
 が欠落）。『日国』の【昏定】（「〔“昏”はくれ、日没などの意〕夜、床をのべること。また、子が孝行の

一つとして、父母の布団を敷くこと。→昏定晨省),【晨省】(「早朝に父母を見舞い、機嫌をうかがうこと」,例は【昏定晨省】と同一文献,漢典=「礼記-曲礼“昏定而晨省”」)は、他の3書とも項が無い。

『日国』の【晨省昏定】(「朝は父母の機嫌を伺い、夜は父母の蒲団を敷いて、子が親孝行すること。昏定晨省」,用例=「本朝文粹[1060頃]〈大江朝綱作〉」)は、同語未収の『漢大』の【昏定晨省】(初出=「晋葛洪《抱朴子・良規》」)と反転に成る。【温清】(「[礼記曲礼上]冬は温かく夏は涼しくすること。父母に孝行する心がけにいう」/「[礼記-曲礼上]の“凡爲二人子一之礼,冬温而夏清,昏定而晨省”から出た語。寒い冬には温かくし、暑い夏には清くすずしくするというところから)父母によく仕えて孝行する」,初出・漢典=「江都督納言願文集[平安後]」「顔氏家訓-序致」)は、単語に留まる。

『漢大』の【晨昏】②は「晨昏定省」(「昏定晨省」に同じ)の略語で、『日国』の②に無い漢典が有る(初出=「南朝梁任昉《啓蕭太傅固辞奪礼》」)。【定省温清】(「子女が朝夕、四時に父母の起居に仕え、安否を訊ねる事を謂う」,用例=「明吾邱瑞《運甓記・廬山会合》」),【温清定省】(「冬温夏清・昏定晨省の略称。[親に対して]冬に布団を自ら体温で温め[原文=温被],夏に枕元に扇で扇いで清め[同=扇席],夜に就眠[=睡定]に仕え、朝に外向いて安否を訊ねる事を謂う。父母に奉仕する事の至れり尽せり[=無微不至]を表す」,同=《元典章・戸部三・分析》)も、4字熟語化の慣習の所産である。

【晨鐘暮鼓】(「仏教の寺・道教の觀の朝夕の儀式。朝に鐘を撞き、晩に太鼓を敲く。今は多く人を警戒・悟りに導く話に譬える。暮鼓晨鐘とも言う」)。副項目=【暮】mùの10項中の【暮鼓晨鐘】)は、一層4字熟語の多さを示す。文語の【晨炊】(《書》①勳朝に火を焚いて食事を作る。②囿朝食)や【晨曦】(「晨光」)も、和製漢語「朝刊」に当る【晨报】(「毎朝出版する新聞」),学生や市民の「晨課」(「日課」に擬えた造語)と成る【晨練】(「勳朝に練習或いは鍛練を行う。“早朝の鍛練に参加する老人は、氣功をする人も居れば、太極拳をする人も居る”))も、日本語には無い。

漢・和混合の「日課」(「毎日きめてする仕事や物事[補筆]。“散歩を一とする”」/「[日]日々割り当ててする仕事。毎日のきまった仕事。②特に、毎日やると決めた読経や念仏のつとめ」,初出=「文明本節用集[室町中]」「和俗童子訓[1710]」,①の漢典=「陸游-閔極有作詩」)と違って、『漢大』(『現漢』未収)の多義(「①毎日の功課。②毎日督促する。③毎日所得を徴収する事を指す」,「唐元稹《叙事寄樂天書》《宋史・宦者伝一・張繼能》「宋周密《武林旧事・諸色酒名》」)は、動詞の働きや金銭絡みの事柄も有り仏教関係の義務が無い。

「功課」は日本語にも有る(「①仕事のでき具合。また、その評価。②学習すべき科目。習得すべき課業。③仕事・物品の提供を割り当てること」/「[日]職務達成の程度。成績。功勞。②職務達成の程度を評価すること。考課。功績。③役務,物質あるいは金銭などの提供を割り当てること。④誤って功過に通じ用いられる。⑤学ぶべき課目。修得する課業。学課」,初出=「令義解[718]」「將門記[940頃か]」「太平記[14C後]」「小右記-治安元年[1021]」「西国立志編[1870-71]〈中村正直訳〉」,①②の漢典=「漢書-薛宣傳」後漢書-百官志-一)が、使用歴が長く和製を含む語義が多い割には常用ではない。

『現漢』の【功】gōng(32項,【功臣/徳/夫/過/績/課/勞/利/利主義/名/能/効/勳/用/罪】

の15項が『広辞苑』と共有、【功成名就〔主項目〕/立/遂】【功虧一簣】が【功成り名を遂げる】【九
初きゅうの功を一簣いちがいに虧かく/一簣の功】と対応)の内の同項は、各1例付きの3義(「①学生が規
定に従って学習する知識・技能。②教師が学生に与える宿題〔原文=布置的作業〕を指す。③広くある事
をする前に行く必要な準備の仕事〔同=工作〕を指す)の次に、『日国』の【日課】②に当る④(「仏
教徒が毎日時間通り読経〔=誦経〕・念仏をする等の修練事項)も有る。

中国語の「一年之計在於春、一日之計在於晨」は日本語に類義が有る(『広辞苑』の【一年の
計は元旦にあり】「一年間の計画はその年の初めに決めておくのがいい」、【一日の計は晨あしたにあり】「[月令
広義“一日の計は晨にあり、一年の計は春にあり”]一日の計画はその日の早朝にきめておくがよい。計画
や準備は、早く整えるべきであること」。『日国』の【一日の計は晨あしたに在り】と親項目【一日の計いちじつは
朝あさにあり一年の計は元旦がんとん/春はるにあり】、関連項【一年の計/事ことは元日/元旦しょうがつ・正月しょうがつにあり】〔初出=「譬
喻尽(1786)〕〕が、「春」と「元旦/正月」、「晨」と「晨あした/朝」の時期・表記の違いが目立つ。

「清晨」は『現漢』語釈の即物性(「時間〔を表す名〕詞。日の出の前後の一区切りの〔原文=一段〕
時間)〕に対し、日本の両書では字面通り抒情的な色彩を帯びる(『日国』は前出の『広辞苑』と似
た「きよらかな朝。すがすがしい朝」、初出・漢典=「本朝麗藻〔1010か〕〔具平親王作〕」「張九齡-奉和
聖制早發三郷山行詩)。『広辞苑』の【清せい】(「旧版の“〔吳音はショウ、唐音はシン〕”削除)①澄あんでいる
こと。きよいこと。②清音の略。↔濁音。→しん〔清〕)は、「澄あ」(単独未立項)の類義語と「濁」
の対義語でしかないが、中国語の単一読みはこの字は品詞・意味の多様・重層を持つ。

「清〇」単語群の共有・分離——史上屈指の長寿王朝所縁の「清/明/宋朝 体」「宋体字・倣宋」

『日国』の【清】(「〔名〕〔形動〕①澄みきってきよいこと。けがれのないこと。さっぱりしていること。
また、そのさま。②“せいおん〔清音〕”の略。③酒のことをいう、人形浄瑠璃社会などの隠語。〔特殊
語百科辞典〔1931〕)〕は、①(初出=「正法眼蔵〔1231-53〕)に漢典2点(「*書經-舜典“夙夜惟
寅，直哉惟清” *楚辭-漁父辭“舉世皆濁，我獨清”)が付く。用例無しの②の基幹語(「②日本語
で、濁点・半濁点をつけないかなで表わされる音節。特に、カサタハ行について、濁音・半濁音に対し
ていう」、同=「漢字三音考〔1785〕)は、③(出典=「滑稽本・戯場粋言幕の外〔1806〕)より早い。

「せい『字音語素』8 青(青)の類」中の【清=清】(選)の例示(62語〔1語は重複〕)の内、
半分強(34語、同)が『現漢』所収語と共通する(「①すんで濁りが無い」の13語中の「清冽/
血清/清流、清音〔せいいん、せいおん〕、②俗悪な心がない」の28語中の「清逸、清純/清新、清寂、
清淡、清貧、清平、清明、清廉/清規、清唱、清談、清福」、③さっぱりして気分がいい。すがすがし
い」の17語中の「清潔、清淨〔“しょうじょう”とも〕、清雅、清閑、清秀、清純、清涼/清楚、清爽、
清亮、晴朗/清風、清香、清秋」、④さっぱりさせる。きよめる」の4語中の「肅清、清掃、清算)。

『現漢』の【清】¹ qīng (「①^凵 [液体或いは気体が] 純粹 [原文=純淨] で不純物 [同=混雑的東西] が混ざっていない [“濁”に対して言う]。②清潔 [=干浄]。純潔。③静寂。④公正廉潔。⑤^凵 はつきりしている [=清楚]。⑥単純。他の物を配しない。⑦^凵 少しも残らない。⑧不純の成分を取り除く [=清除]。組織を純化する。⑨^勹 [勘定を] 完済する。清算する。整理する。 [=〈帳目〉還清; 結清; 清理] ⑩^勹 点検する。 [=点験]」) の18例 (⑧⑩各1例, 他各2例) 中, 2字単語 (11)・4字熟語 (3) を含めて両言語の共通項は3つしか無い (②の「～潔」, ④の「～廉」, ⑥の「～唱」)。

『広辞苑』の同形・異読項【清】^{しん} (「中国の王朝の一つ。女真 [女直] [旧版=女直^{じく}] 族のヌルハチが, 一六一六年帝位 [旧版の〈太祖〉削除] について国号を後金と称し, 瀋陽に都した。その子ホンタイジ [←太宗] は三六年国号を清と改め, 孫の順治帝 [←世祖] の時に中国に入って北京を都とした。康熙・雍正・乾隆三帝の頃全盛。中国と内陸アジアを統合した大帝国を形成。一九世紀以降, 列強の侵略と内乱により衰退。[補筆] 辛亥革命によって一二世で滅亡。[漢語]」) と比べて, 『現漢』の同音別項【清】² Qīng の同義部分の説明は他の大王朝と同じく抑え気味である。

その両義 (「①王朝 [原文=朝代], 西暦1616—1911年。女真族の人愛新覚羅・努爾哈赤が建て, 当初の名は後金, 1636年清に改めた。1644年山海関を越えて華北に入り [同=入関], 北京に都を定めた。②姓の一) は, 年号が皇帝の姓氏とは別に王朝の姓氏に成った事を示唆する。歴代王朝の歴史が後金の後身で終止符を打った事は, 「清」の「綺麗さっぱり消え去る」「清算/御破算」の意と妙に合う。古来の文字の獄は盛清 (「盛唐」に擬えた造語) の繁栄の裏で狂気の極みに達したが, 皮肉にも漢族を征服した3帝は漢字文化の虜と為り今の満語の絶滅危惧の種を撒いた。

『広辞苑』の【清朝】 (「①中国の清の王朝。また, その時代。→清。②→せいちょう) の②は, 異読・異義語 (「清朝体の略」) の基幹語である。【清朝体】 (「木版または活字の書体の一つ。毛筆書きの字体に似た楷書。招待状・名刺などに用いる」) で参照を指示する【明朝体】【宋朝体】は同じ1文目の次に, 其々の特徴を記す (「縦線は太く, 横線の細いもの。もと宋朝に起こり, 明朝の時に日本に伝来した。現在, 新聞・書籍・雑誌などの大部分がこの書体を使用している」/「楷書体で風雅なもの」) が, 同じ王朝名の「明」 (≒原語の Míng) は書体名で「清朝」と違って「明朝」に成らない。

【明朝】 (「①中国, 明の朝廷。また, その国・時代。②明朝体の略」) は【清朝】との雷同を避け, ①の「朝廷/国」や②の漢字表現を用いるが, 両言語とも「朝廷」の「朝」の同音字 (中国語読み = cháo) を含む「明朝」の他に, 「明」又は「朝」の異読と為る同形語が有る (『広辞苑』の【明朝】 = 「明日の朝。明日。みょうあさ」, 『日国』の初出・漢典 = 「田氏家集 [892頃]」「杜甫 - 春宿左省詩」[両書所収の同義語【明朝】の初出は「洒落本・遊子方言 <1770>」]。『現漢』の【明朝】 míngzhāo は「〈方〉^囗明日 [原文=明天]」)。

『広辞苑』の【明】 (「中国の王朝の一つ。朱元璋 [太祖洪武帝 <補筆, 以下同じ>] が南京を国都とし [←他の群雄を倒し], 元を北方に追 [“い払”削除] って建国。永楽帝 [←成祖] の時, 北京に遷都, 勢力を内陸アジアや南海諸国に拡大 [←国都を南京から北京に遷し, 南海諸国を経略, その勢威はアフリカ東岸にまで

及んだ。中期以後、商工業や海外貿易が発展するが [←宦官の権力増大]、北虜南倭北虜に悩まされる。末期には、農民反乱が続発し、李自成に北京を占領され、一七世で滅亡。二一七の様に、明朝体が生れた時代は清と同じく国力隆盛の光と強権抑圧の影が混じり合った。

宋朝体と関る【宋】③ (「中国、後周の將軍趙匡胤趙匡胤が建てた王朝。首都は東京開封府汴京)。五代の武断政治を脱却し、科挙官僚による文治主義の統治を実現した。契丹〔遼〕・党項〔西夏〕と対峙したが、澶淵の盟などの外交により平和を得た。財政難は王安石の新法でしのいだが [←汴京〔開封〕に都し、文治主義による官僚政治を樹立したが、外は遼・西夏の侵入に悩まされ、内は財政の窮迫に苦しみ]、一一二七年金の侵入により九代で江南に逃げた。これまでは北宋といい、以後、臨安〔杭州〕に都して、九代で元に滅ぼされるまでを南宋という。一七〇〔一六〕は、明・清と通じる多難の宿命を示す。

『現漢』の【明】³ Míng の① (「王朝、西暦 1368—1644。朱元璋が建てた。先ず南京を都に定め、永楽年間に北京に遷都)、【宋】¹ Sòng の② (「王朝」) の b) (「西暦紀元 960—1279。趙匡胤が建てた) と、参照を指示する【北宋】 Běi Sòng (「王朝、西暦紀元 960—1127。太祖〔趙匡胤〕建隆元年に始まり、欽宗〔趙桓〕靖康 2 年に終焉 [原文=止]。汴京〔現河南開封〕に都を建てた)、【南宋】 Nán Sòng (「王朝、西暦紀元 1127—1279。高宗〔趙構〕建炎元年に始まり、帝昀〔趙昀〕祥興 2 年に終焉。臨安〔現浙江杭州〕に都を建てた) は、紙幅の制限からか他王朝の項と同じく栄枯盛衰の詳述が無い。

『日国』の【明朝】 (■中国、明〔みん〕の朝廷。又その国や時代。■【名】“みんちょうかつじ [明朝活字] に同じ。初出 = 「史記抄 [1477]」「或る女 [1919] 〈有島武郎〉) の次、【明朝活字】 (「和文活字の書体の一つ。縦線が太く、横線が細いもの。中国の明代に刊本に使われ始めたといわれる。現在日本の新聞・雑誌・書籍のほとんどがこの書体を本文に用いている。[略]、用例 = 「学生と読書 [1938] 〈河合栄治郎編〉読書の生理 〈杉田直樹〉)」、【明朝体】 (「□ [明朝] ■に同じ) ②花押の一つ。中国の明の太祖が始めたところからとも。[略]、□の同 = 「新しい言葉の字引 [1918] 〈服部嘉香・植原路郎〉) と有る。

【清朝】 (「■□朝はやいこと。早朝。早天。早旦。②清明な朝廷。また、時の朝廷を尊んでいうことは。聖朝。③“せいちょうかつじ [清朝活字] ”の略。“■しんちょう [清朝] ”●に同じ [同項 = “中国、清代の朝廷。また、清の時代”]、■□②の漢典 = 「商子—禁使」「方干—途中寄劉沆詩」、■③■の初出 = 「風俗画報—五三号 [1893]」「開化問答 [1874—75] 〈小川為治〉) に、【清朝活字】 (「活字の書体の一種。毛筆書きの字体に似た楷書で、名刺、招待状などの活字として多く用いる。清朝体。清朝)」、【清朝体】 (「“せいちょうかつじ [清朝活字] ”に同じ) 初出 = 「最新百科社会語辞典 [1932]」) の概念の古さが窺える。

【宋朝】 (「■中国、宋代の朝廷。また、その時代。趙匡胤が、五代の後周のあとをうけて王位にのぼった九六〇年から、元のために滅ぼされる一二七九年までの約三二〇年間。→宋③。■【名】“そうちょうかつじ [宋朝活字] ”の略) の■、即ち【宋朝活字】 (「活字体の一つ。中国、宋代の木版印刷 [宋版] の書体をうつしたもので、楷書 [かいしょ] をいっそう直線化した、肉の細い字体。宋朝) 用例 = 「新語新知識 [1934]」、【宋朝体】 (「宋朝活字に使われる書体、同 = 「壺中庵異聞 [1974] 〈富岡多恵子〉) は、全て【清朝】■即ち【清朝活字】、【明朝体】の後に現れた。

『現漢』では明朝体に当る【宋体字】（「一般通用 [原文=通行] の漢字印刷の書体。正方形、横の筆画が細く、縦 [同=豎] の筆画が太い。この書体は明朝の中葉に起り、宋体と言うのは誤解 [=誤会] である。他に有る横・縦の筆画とも比較的細い書体は“倣宋体”と言い、宋朝の刊本 [=刻書] の書体に比較的近い。倣宋体と区別する為に、元 [=原来] の宋体字は“老宋体”とも言う）しか無く、関連の【倣宋】（「印刷書体の一種。宋版書に刻写された書体に倣い、筆画の太さが均等 [=均匀] で、長・方・扁の3体が有る。倣宋体・倣宋字とも呼ぶ）は日本語に入っていない。

『現漢』の活字（中国語＝鉛字）は宋体と倣宋（用例、本稿引用の書体）が主・副と為るが、日本語には後者の漢単語が無く FangSong（原語読みの fāngsòng）で表記される。時代誤認を承知した通称「宋体字」は「倣宋」の意の通り、宋の絢爛たる文明・文化に肖る憧れも見て取れる。同じ印刷書体を規範とする「明朝体」は「宋/清朝体」と共に中国語には無いが、『日国』の【宋朝活字】等も宋への特別視を窺わせる。興味深い事に、中国の4大長寿王朝（宋・唐・明・清 [317・290・277・276年]）の3朝が、日本では常用印刷書体の名を冠する。

「澄清 / 澈 / 明」 「澄碧 / 淨 / 莹」 「澄心 / 水 / 深 / 江」 —— 「明澄 / 澈 / 徹」 ——
「善意 / 美言語」 —— 「清 / 靜聽」 「恭 / 傾聽」 「謹 / 拝 / 諦聽」

『広辞苑』の【清朝／一体】の次の【清澄】（「①空気・水・声が [] は補筆] きよくすんでいること。 “一で美しい鳥の声” “高原の一な空気” [旧版の“一な心” 削除] ②はっきりしていること。 “一だった意識がぼんやりする”」）は、『日国』（「[名] [形動] 清く澄んでいること。きれいに澄みきっていること。また、そのさま、初出＝「花柳春話 [1878-79] 〈織田純一郎訳〉」）で和製とされる。『漢大』所載の典籍が有る（「①清明；清澈。②審察；省察」の同＝《楚辞・遠遊》《楚辞・九章・惜往日》）が、現代日本語の常用度と対照的に『現漢』の【清】（124項、内43項が『広辞苑』と共通）には無い。

『広辞苑』増補の1例目と【清朝】（「清朝体の略」）に無い『日国』の■②の意と関る様に、【鳥声】【朝政】【超世】の次に【澄清】（「空がくもりなく晴れわたっていること。また、世の中が清らかで治まっていること」）が出る。『日国』（「[] すんできよいこと。濁りのないこと。くもりもなく晴れわたっていること。また、すみきよめること。②世の中がきよらかで安穩に治まること。乱世を治め清めること」、同＝「懷風藻 [751] 〈天津皇子作〉」「權記－長保二年 [1000]」）は、又して純和製と誤認する。中国でも古い歴史を持ち且つ現代に頻用され、『現漢』では別の語義も有る。

『日国』の「ちょう『字音語素』12 その他」中の【澄】（漢の意・例（「水がすむ。すます。/ 清澄、明澄、澄瑩、澄高、澄清、澄澈、澄碧、澄明 / 澄空、澄心、澄水、澄潭」 [] は立項）は、『現漢』の【澄（澈）】chéng（「① [水が] とても清い。“澄澈” ②澄んで明るい様にする。はっきりさせる [原文＝使清明；使清楚。“澄清”]）と重なる。12語中『広辞苑』所収の【澄清】【澄澈】【澄明】（他に2字目と為る【清澄】【明澄】）は、『現漢』の5項（【澄碧】【澄澈】【澄徹】【澄淨】【澄清】【澄瑩】）

より少なく、第7版付録『漢字小事典』の【澄】の例も3語（「澄徹・清澄・明澄」）である。

『日国』載録の【澄心】（「静かに心を澄ますこと」、用例・漢典＝「童子問 [1707] [文字-上義]」）、【澄水】（「すみきった水」、同＝「日本風景論 [1894] 〈志賀重昂〉」「淮南子-説山訓」）、字音語素の項に無い【澄深】（「〔形動ナリ・タリ〕水が澄んで深いさま」、同＝「同前」「古文真宝」）、【澄江】（「すみきった川」、同＝「屏風土代 [928] 〈大江朝綱作〉」「謝朓-晚登三山還望京邑」）、【澄淨】（「〔名〕〔形動〕澄んできよいこと。きよらかなこと」、初出＝「性靈集-四 [835 頃]」、未記載の漢典は『漢大』に「南朝梁陶弘景《冥通記》」等有り）は、日本人の「清・澄」好みから外れて『広辞苑』から消えた。

『現漢』の【澄碧】（「〔形〕明るく澄み切っている [原文＝明淨]。“澄み切った湖水”）、【澄瑩】（「〔形〕澄み切っている [同＝清亮]。“雨の後、月が一層澄み切って白く輝く様に映る [=月亮更顯得～皎潔]”）より、【澄淨】（「〔形〕清徹で清潔。“澄んで清い溪水”“空が澄んで清く雲が無い”」）は1例多い。【澄澈】（澄徹）chéngchè の同音・異字と意味・用法（「〔形〕清徹・透明。“澄澈して底が見える溪水”」）は、『広辞苑』の【澄澈・澄徹】（「すんですきとおること。“一した冬の夜空”」）と一緒に、『日国』の【澄澈】（「〔1 文目同前〕くもりなくすきとおること」、漢典＝「王献之-鏡湖帖」）の二重表記と合う。

同項の2例（初出＝「病問録 [1901-05] 〈綱島梁川〉」）も、最古の出典（「本朝文粹 [1060 頃] 八・映池秋月明詩序〈三善清行作〉」）も「澄徹」に作る。「澄澈」の漢典（『漢大』の同項「澄徹とも」の「唐修睦《僧院泉》」等）にも拠らぬ見出しの単一表記は、『広辞苑』の【清澈】（「清くすきとおっていること。清く澄んでいること」と同工異曲である。『日国』の【清徹・清澈】（「清く明らかなこと。清くすきとおること。すこしの濁りもないこと」、初出＝「長門本平家 [13C 前]」、漢典＝「孔叢子-記義」「南齊書-張融伝」）は、『広辞苑』の【澄澈・澄徹】と櫻（斜めの交錯・反転）に為る。

『現漢』の【清澈】（清徹）qīngchè（「〔形〕清くて透明。“湖水は清澈で底が見える」）は「澈・徹」の順で併記し、『漢大』の【清澈】（「①明察に同じ。②清淨・透明。③清明。多く人の表情を指す。④略」）も、古い典籍（《楚辞・九章・惜往日》「晋陸雲《寒蟬賦》」《南齊書・張融伝》）が有る（【清徹】3義中現代と同義の②の初出＝「北魏酈道元《水経注・湍水》」）。『日国』の【清澄】と反転・類義の【澄清】の両義も漢典が付く（「淮南子-俶真訓」/①「蘇軾-六月二十日夜渡海詩」/②「後漢書-范滂伝」）が、中国語の後者は「清徹」の精神面の意の消失と逆に現役の自国独自の語義が有る。

『現漢』の【澄清】（「①〔形〕〔水・空が〕澄み切っている。“湖水が^{エメラルド}翠綠色 [原文＝碧綠] に澄み切っている”②〔動〕混濁を清明に変える。混乱の局面を一掃する [同＝肅清] 警え。“天下を清らかにする”③〔動〕〔認識・問題等を〕はっきりさせる。“事実を明らかにする”」）と、異読（「澄」は「橙」と同じ chéng でなく「登」dēng と同音・異声調 [第4] 項（〔動〕物質の不純成分 [= 雜質] を沈澱させ、液体を清める。“この水は濁り過ぎて、浄化してから始めて使える”））は、混濁・混乱・無実が多い国柄と清明・安定・潔白の理想を思わせ、③（『漢大』の初出＝「晋袁弘《後漢紀・漢帝紀上》」）が日本語と違う。

日本語の「明澄」（「くもりなく澄みわたること。“一な響き”」/「〔名〕〔形動〕明るくすみわたっていること。また、そのさま」）は、「澄江/淨/深」を外す『広辞苑』初版の翌年に現れた（初出・

漢典 = 「金閣寺 [1956] 〈三島由紀夫〉」「雲笈七籤」が、『漢大』は採録していない。『現漢』の【明】(94 項) 中の音・形近似の類義語【明澈】(「明明るく [原文=明亮] 清澈) は、日本の両書にも入る(「水が澄んで [『日国』に読点有り] 底まですきとおること) が、未収の「明徹」は『漢大』に有る(明晰/明澈を表す①②の初出 = 「唐玄奘《大唐西域記・婆羅痾斯国》」「沙汀《記賀龍》)。

日本語の「明徹」(「物事が明らかで、はっきりと見通せること。また、物がすきとおっていること」/「名」[形動ナリ・タリ] 物がすきとおるように、あきらかではっきりすること。物事や論理などに、あいまいなところがないこと。また、そのさま、初出 = 「皇字沙汰文 [1296-97]」) は、「行」等と同じ部首の字で水に言う「明澈」と峻別されるから、両書の【澄澈・澄徹】/【清徹・清澈】の混同との整合性に引っ掛る。「清/澄/澈」を構成する三水偏(中国語 = 三点水)は不穏な「争」を綺麗な「浄」にし、「青+争」の「静」と共に漢字の部首・字形の魔法を味わわせる。

「せい [『音韻語素』8 青 [青] の類] の 10 字 (【青=青】【清=清】【晴=晴】【精=請】【静=静】【請=請】【圀】【菁】【晴】【靖】【靚】) は、中国でも大半が「善意/美言語」に属し「悪意・醜言(造語, “美言”と対義) 語」が無い。【澄】を含む群の 12 字 (【𠂔】【重】【鬯】【掉】【釣=釣】【鳥】【肇】【趙】【鉦】【澄】【聽=聽】【寵】) は、前の「11 徵(徵)」(【徵=徵】【懲=懲】), 「10 朝(朝)」(【朝=朝】【潮=潮】【嘲】) と同じく暗い意の字も有るが、隣接の【澄/聽】は「清・澄」の親類から「清聽」を連想させて面白い。

「清聽」(「他人が自分の話などを聴いてくれることを敬っていう語。“御一を感謝します”」/「清く聞こえること。②他人が自分の話などを聞くことを敬っていう語」, 初出 = 「花柳春話 [1878-79] 〈織田純一郎訳〉」「吾輩は猫である [1905-06] 〈夏目漱石〉」, 清の漢典 = 「孟浩然 - 宿業師山房詩」) は、戦後には②(『漢大』の同義の②の初出 = 「晋陸機《吳趨行》) だけ生きている。未収の『現漢』の qīng の 9 親字の単語・熟語項 (多い順で 【清¹】 124, 【青】 69, 【輕】 67, 【傾】 28, 【氫】 7, 【卿】 【圀】 【靖】 各 1, 【鯖】 0) の内、両言語の交錯を現す様に同音・関連の【傾聽】 qīngtīng が有る。

その中身(「細心に聴き取る [多く上から下への場合に用いる]。“大衆の意見を傾聴する”) は、上から目線の点で日本語(「耳を傾けてきくこと。熱心にきくこと。“一に値する意見”」/「耳を傾けて一心にきくこと。熱心にきくこと」, 初出・漢典 = 「日本外史 [1827]」「礼記 - 曲礼) と違う。両書の「きく」は【清聽】の語釈中の「聴いて/聞く」の不一致に考えを向かせるが、見出し語の字を用いる『広辞苑』の方は、【聞く・聴く】の説明(「◇広く一般には“聞”を使い、注意深く耳を傾ける場合に“聴”を使う) と照らして、例文の感謝に値する細心・熱心な聴き方に相応しい。

『日国』の同項の同訓異字(「聞」[ブン・モン] 音を耳で感じ取る。自然に耳にはいつてくる。聞いて知る。“伝聞”“見聞”においをかぐ。味や香りをためし味わう。“聞香”“聞き酒”/【聴】[チヨウ] 聞こうとして聞く。注意してよく聞く。“聴聞”“傾聴” 聞き入れる。聞き届ける。“聴許”) は、『広辞苑』の②(「“利く”とも書く) 物事をためし調べる。①かぎ試みる。かぐ。[[浄, 浦島記] 出典略] “香³を一・く”②味わい試みる。[[狂, 伯母が酒], 同] ③あてて試みる。なぞらえる。準じる。“広さ

を柱に一・いて戸を作る”)を含むが、中国語の「聞/聴/利」(wén/tīng/lì)は混同できない。

『日国』の「清聴」は傾聴や敬聴(「つつしんできくこと」/「[1文目同じ] 謹聴」, 初出・漢典=「公議所日誌—一〇・明治二年 [1869]」[蔡邕—考城県頌]), 謹聴(「①つつしんでよく聞くこと。“法話を一する”」/「[1] [一する] 相手の話をつつしんで聞くこと。注意深く耳をかたむけること。拝聴。諦聴」, 同=「改正増補和英語林集成 [1886]」[管子—山権数])に限らず、自分の話を普通に聞く人にも敬意を払うと解せる。『現漢』には「敬/謹/拜/諦聴」は無く、【洗耳恭聴】(「専心して聴く[人に話をして貰う時の謙辞(原文=客気話)]」)は、「敬聴」と対に成る「恭聴」は用法が違う。

「謹聴」の和製語義(「②演説などで、“よく聞け”という意味で、聴衆の中から発することは」/「演説などで、傾聴にあたいする」という意味で、聴衆が発する語。また、その際に、注意をうながす語」, 用例無し)は、「静聴」(「しずかにきくこと。“御一願います”」/「静かに聞くこと。静かにしてよく聞くこと」, 初出・漢典=「経国美談 [1883-84]」[矢野龍溪]「劉伶—酒徳頌」)と合せて、昨今の国会の様な野次も無い常識的な静聴でも感謝す当き清聴に成る事を思わせる。日本語の「清聴・静聴」と中国語の「静聴・敬聴」(jìngtīng)の同音は、「聴・聞」の「清=静=敬」の等式を示唆する。

「清浄/涼/冽/冷」——「五逆四重・六根清浄」——「冷清/靜」——「鎮靜/定」——「清冷」——「清君側」——「奸佞邪智/専權」

『日国』の字音語素の【清】の62例中10語が2字とも三水偏で、①(澄んで濁りが無い)の13語中6語(「清濁, 清澄, 清深/清流, 清漢, 清酒」), ②(俗悪な心が無い)の28語中1語(「清淡」), ③(さっぱりして気分が好い。清^{すがすが}しい)の17語中3語(「清潔, 清浄, 清涼」)の分布は、同じ『現漢』未収(下線部分)の「清水」と合せた①の高い比重に日本人好みが見える。「澄」(水が澄む。澄ます)の同12例中3.5語(「清澄, 澄清, 澄澈/澄潭+澄水」), 挙例外の所載3語(「澄江, 澄浄, 澄深」)も、中国語以上の「清・澄」と三水偏への偏愛を現す。

『現漢』の【清】の2字単語109項中13項(【清澈/清淡/清潔/清涼/清流/清浄/清漆/清湯/清汚/清洗/清油/清淤/清湛】[は『広辞苑』未収]), 【澄】の5項中3項(【澄澈/澄浄/澄清】)が三水偏字の複合である。【浄(淨)】jìngも【涼(涼)】liángも繁体字の三水偏が二水偏に簡素化されたが、「两点水」付きの正字と複合する【清】の2字語は【清浄/清涼】の他3項が有る(【清冽/清滅/清冷】)。『日国』の【清】にも三/二水偏の字の組み合う【清冽/清冷】が見えるが、中国語の筆画減に由る「浄(淨)」は【清】【澄】の項に出るから目を引く。

字音語素の【清】で異読が特記された「清浄」(「しょうじょう」とも)は、漢語系(「清らかで汚れないこと。しょうじょう。“一な空気”」/「[1] [形動] 清らかでけがれないこと。また、そのさま。しょうじょう。②数詞の一つ。極めて小さい数の単位で、10⁻²¹にあたる」, [1]の初出=「集義和書 [1676 頃]」)と、仏語系(「①清くてけがれないこと。“一潔白”②[仏] 悪業の過失や煩惱のけがれを離れ

ていること。“六根一”/【名】[形動] ① [語釈同上] せいじょう。② 仏語。煩惱や悪行がなく、心身の清らかなこと。また、そのさま、初出=「続日本紀-神龜二年 [725]」「観智院本三宝絵 [984]」が有る。

後者の両初出中の「敬_レ神尊_レ仏/五逆四重」は、神仏への尊敬と「四重五逆」(『日国』=「仏語。四重罪と五逆罪」,初出=「靈異記 [810-824]」への忌避を示す。「四重禁」(『広辞苑』=「[シジウゴンとも] [仏] 殺人戒・盜戒・淫戒・大妄語戒の四つの禁戒律。比丘_?が犯すと教団を追放される最も重い罪で、四重罪 [略]」,「五逆」(①「[仏] 五種の罪惡。父・母・阿羅漢_?を殺すこと、僧団を分裂させる [旧版=の和合をこわす] こと、仏の身体を傷つけること。[略] これを犯せば無間_?地獄に墮ちるといふ。五逆罪」)は、中国・儒教・中共の「五湖四海/五書四経/五講四美」と構造が重なる。

『広辞苑』の「清浄」複合語項【清浄野菜】に対して、【清浄】は複合語2項(【清浄石】【清浄心】)の他に、両義とも4字熟語の例が有る。②の「六根一」(「①六根が福德によって清らかになること。『今昔一三』出典略 ②天台でいう六根清浄位。菩薩の位。六根互用。③登山の行者、寒参りする者などの唱える語」,『日国』の①③の初出=「采花 [1028-92 頃]」「伊勢講并参宮儀式 [1686]」)は、『現漢』の【六根】(「仏教で眼・耳・鼻・舌・身・意を指し、この6つを罪障 [原文=罪孽]の根源と考える」)の例「~清浄」に出ている(『漢大』の【六根清浄】の初出=「隋煬帝《宝台経蔵願文》」)。

【清浄】(「㊦①邪魔 [原文=打擾]の物事が無い。②清澈」,各1例。『日国』欠落の漢典として『漢大』に「戦国策-斉策」《素問-四気調神大論》各4点付き [他3義有り])は、日本語の漢風読みの方と通じるが、次の【清静】(「㊦ [環境が] 静か。騒がしくない [同=安静;不嘈雜]」,1例)は日本語には無い。日本語の「閑静」(「ものしずかなこと。ひっそりしたさま。問静。“一な住宅街”/【名】[形動] 土地、または住居などが、ざわめきが聞こえずもの静かなさま。また、そのような場所。かんじょう」)は、漢典(「荀子-玉覇」由来(「日蓮遺文-聖愚問答鈔 [1265]」)なのに『現漢』には出ない。

三+二文字偏字の「清」語中の「清冷」(「冷たく澄んでいる [旧版=きよひややかな] こと。清らかである [+けがれない] こと」/【名】[形動] 清くひややかなこと。また、清らかで、汚れのないこと。また、そのさま、初出・漢典=「菅家文草 [900 頃]」「王褒-洞簫賦」)は、『現漢』(「㊦①心地好く涼しく、又少し寒い感じを帯びる [原文=涼爽而略帶寒意]。“清冷な秋夜”②ひっそりして物寂しい [同=冷清]。“旅客たちは皆去った。歩廊^{プラットホーム}は大変 [=十分] ひっそりしている”)と半分異なり、②(『漢大』の初出=「明来集之《銑氏女花院全貞》」)は語釈の「冷清」も含めて中国に止まった。

【冷清】(「㊦ひっそりして物寂しい[原文=冷静而淒涼]。“生氣が無く寂^{さび}れている”[同=冷冷清清]“ひっそりとした深夜”“裏の山 [=後山]は観光客が少なく、とても物寂しそうに見える [=顕得]”)は、近代以降の漢典(『漢大』に「《紅樓夢》第九回」等)が有るが、日本語には「清澄/澄清」の対と違って「清冷」の反転・類義が無い。語釈中の「冷静」(「㊦①人が少なく静かだ。賑やかでない。“夜が深^ふけ、街頭はひっそりしている様に映る”②沈着で、一時の感情で事に当たらない [=不感情用事]。“冷静な頭脳”“冷静になって、好く好く考えてくれ”)は、日本語でも常用ながら半分の意が消えた。

『日国』の両義(「㊦ [形動] 感情に動かされることなく落ち着いて物事に動じないこと。心静か

なこと。また、そのさま。沈着。② [中国の近世語から] さびしいこと。ひっそりしていること, 初出=「思出の記 [1900-01]〈徳富蘆花〉」「俚言集覧 [増補] [1899]」, 〔補注〕に②の「唐話纂要一」の例は、半分の中国語発 (『漢大』の両義の同=「魏巍《東方》」「元関漢卿《金線池》) で19世紀末に日本で現れたが、『広辞苑』の1義 (「感情に動かされることなく、落ち着いていて物事に動じないこと。“一な態度”“一に判断する”“沈着一”) は、半世紀後の「脱漢断・捨・離」の加速の結果と言える。

『現漢』の【沈着】語釈中の「鎮静」の類語「鎮定」(「① 緊急の状況に遇っても慌てず焦らない [原文=不慌不忙]。“表情は落ち着き払っている”“泰然自若としている” [同=神色~|~自若] ② 鎮静させる。“極力 [=竭力] 自分を落ち着かせる”)。『漢大』の「安定/沈着」の意は初出「《東周列国志》第六一回」[「国語・晋語七」] は、日本語「[乱をしずめさだめること。また、乱がしずまりさだまること。平定。“反乱軍を一する”] / [力でさわぎをおさえしずめること。また、しずまりおさまること。ちんじょう]、初出・漢典=「読史余論 [1712]」[「国語-晋語七」] [「漢大」の同義では《三国志・魏志・鄧艾伝》]) と違う。

【冷清】の語釈中の類義語「凄凉」(「① 活気が無く物寂しい [原文=寂寞冷落] [多く環境或いは景物を形容する]。“荒廢した垣^{かき}や崩れた壁で、一面に寒々としている” [同=残垣断壁、一片~] ② 凄惨。“悲惨な境遇 [=身世]”“悲惨な歲月”) も、『日国』(「《名》[形動ナリ・タリ] 心の中や情景などがぞっとするほどものさびしいこと。悲しいこと。また、そのさま、初出・漢典=「菅家文草 [900頃]」[「李白-留別曹南羣官之江南詩」]) と通じるが、『広辞苑』(「ぞっとするほどものさびしいこと。ものすごいこと) で和語「凄い」と混同されている。

「冷清」の和文初出 (「二・予作詩情怨之後、再得菅著作長句二篇“頼_レ君清冷肅_二浮埃_一、遮莫呵々甚_二口猜_一”) は、「清」と前/後の「君/肅」との複合を連想させるが、両言語共通の「肅清」は『日国』で古今の多義が展示してある (「① きびしく取り締まって乱れや不正を取り除き、世の中を清らかにすること。② 政治団体や秘密結社の内部で、政策や組織の一体性を確保するために、反対者を追放や処刑などにより排除して純化をはかること。③ [形動] 世の中がよくおさまり、平穏であること。よく整って濁りのないこと。また、そのさま。④ [形動] 冷たく清らかなさま。静寂なさま)。

① ③ ④に漢典が付き (「後漢書-党錮伝・岑晷」「漢書-韋賢伝」「嵇康-琴賦」), 和文の成立順は① (「続日本紀-和銅五年 [712]」) →③ (「星巖集-丙集 [1837]」) →② (「ふだん着のソ連 [1955]〈渡辺善一郎〉) と為る。②は中共の使用歴がより長いが、『広辞苑』(「不正者・反対者などを厳しく取り締まること。独裁政党などで、方針に反する者を排除すること。“対立分子を一する”) と違って、『現漢』(「① [悪者・悪事・悪い思想を] 徹底的に排除する [原文=清除]。“盜賊 [同=盜匪] を肅清する”“悪影響 [=流毒] を肅清する”) は、古来の意 (『漢大』の④、初出=「宋曾鞏《襄州到任表》) である。

「君・清・肅」の字・義を含む「清君側」(「《公羊伝・定公十三年》:“晋孰取晋陽之甲、以逐荀寅与士吉射。荀寅与士吉射者曷為者也? 君側之惡人也。”“君側を清む”は君主の身邊^{かた}の奸佞を肅清する [原文=清除] 事を指す) は、日本語で「君側」(「君主のそば。主君のそば [旧版=おそば]。君辺。“一に侍る”) / 「君主のそば。君辺 [くんべん]」、初出・漢典=「広益熟字典 [1874]〈湯浅忠良〉」「春秋左伝-成公一

六年)の成句「一を清む」(「君主のそばにいる奸臣_レを除く」/「君側に仕える悪臣を追いはらう」, 漢典「李商隱-有感詩“古有_レ清_二君側_一, 今非_レ乏_二老成_一”は『漢大』の【清君側】に同じ)が当る。

『現漢』未取の「君側」の他『漢大』にも無い【君辺】(「君側に同じ」[旧版=主君の側。君側]/「主君のそば。主君のかたわら。君側」, 初出=「平家 [13C 前]」), 「君側の奸」(「[後漢書楊秉伝“春秋の趙鞅は, 晋陽の甲を以て君側の悪を逐_レう”] 主君のそばにいて主君に取り入り, よくないことを考える家臣。君側の悪」/「君主のそばに仕える悪臣」, 同=「穩健なる自由思想家 [1910]〈魚住折蘆〉)も有るが, 用例の無い「君側を清む」と同じ追放・放逐は, 【肅清】【清君側】の語釈中の「清除」の徹底・峻烈の比ではない。

「清除」(「_レ鬪綺麗に払い除き尽す [原文=掃除淨尽]。全部除去する [同=去掉]。 “積雪を清掃する” “積弊を完全に取り除く” “敵の回し者 [=内奸] を肅清する”」, 『漢大』の初出=《三国志・司馬朗伝》)は, 日本の「清」語群には無い。最も当て嵌る日本語の「一掃」(「①一度に払い去ること。 “滞貨一” “在庫一” ②残らず払いのけること。 “敵を一した” / 「_レすっきり払い除くこと。一度にきれいに片付けてしまうこと。 [略]」, 初出・漢典=「空華集 [1359-68 頃]」「李白-永王東巡歌》)は, 中国で4字熟語の「一掃而空」(『漢大』のみ, 「一挙掃除淨尽」, 同=「鄭觀應《盛世危言-吏治上》)が有る。

日本語の「奸佞・姦佞」(「心がねじけて人にへつらうこと。また, その人。 “一性質” / 「_レ名」 [形動] 心がねじけていること。悪賢く, 人にこびへつらうこと。また, そのさまや, その人」, 初出・漢典=「空華日用工夫略集-応安五年 [1372]」「管子-霸言》)と違って, 【奸佞】(「_レ書 ①_レ佞奸邪で人に媚_レび諂_レう [原文=諂媚]。 ②_レ奸邪で人に媚_レび諂_レう者」, 各1例)は, 【奸¹】jiān (「①_レ奸詐。 ②_レ国家或いは君主に忠実でない。 ③_レ国家・民族・階級或いは団体の利益を売る人。 ④_レ利己的。巧く立ち回る [=自私; 取巧]」, 各3・1・3・2例)に属し, 【奸² (姦)】(「姦淫」)の様な表記の混同が無い。

「奸佞邪智」(「ゆがんだ心で悪知恵をはたらかせ, 人に取り入ろうとすること。邪智奸佞」/「_レ名」 [形動] 悪知恵が働き, 人にこびへつらうこと。また, そのさま」, 用例=「戦国史記 [1957]〈中山義秀〉)は, 中国語の「奸佞専権」(②の用例)と同じく両言語共有ではないが, 「奸邪・姦邪」(「よこしまなこと」/「_レ名」 [形動] 道理にそむき, 偽りの多いこと。行為が正しくないこと。よこしまなこと。また, その人」, 初出・漢典=「平治 [1220 頃か]」「韓非子-有度》)は, 『現漢』の【奸¹】【奸² (姦)】jiān (18項)の『広辞苑』と共通する10項(【奸臣/計/佞/商/徒/邪/雄/淫/賊/詐】)に有る。

『現漢』の【奸邪】の両義(「_レ書 ①_レ佞奸詐・邪惡。 ②_レ奸詐・邪惡の人或いは事」, ②に1例)は, 『漢大』の②①(初出=「宋蘇軾《司馬温公神道碑》」「管子・形勢解》)に対応する。「邪知・邪智」(「よこしまな知恵。わるぢえ」/「悪知恵。正しくない知恵」, 同=「日蓮遺文-開目抄 [1272]》)は中国語には無く, 「専権」(「現漢」=「_レ動大権を独攬する。 [1例]」, 『漢大』の初出=「韓非子-孤憤》)『広辞苑』=「権力をほしいままにすること。思うままに権力をふるうこと」, 『日国』の同義の①の初出・漢典=「読史余論 [1712]」「史記-斉太公世家》)は, 日本では「奸佞」の4字熟語を構成しない。

「清玩 / 帳 / 整 / 心 / 楚」——「了 / 諒 / 領解」——「原諒」——「領承 / 状 / 掌 / 握 / 知 / 会 / 略」——「承知」——「了 / 諒承」

「君辺」の「辺」の中国語 (biān) に近い濁音は清む必要性に似合い、「清む・浄む」の親項目【清める・浄める】(『広辞苑』 = 「『他下一』 冏きよ・む [下二] ① 清らかにする。けがれを除く。万二〇“掃き一・め仕へ奉りて”。“身を一・める”② 恥や罪をすすぐ。はらす。雄略紀“子の罪を雪^{きよ}むること得たり”)は、①の出典中の「掃き清め」の例が字音語素の【清】④(さっぱりさせる。清める)の4語(「肅清、清掃、清算、清書」)中の二言語共通の3語の相関を思わせ、②の同「罪を雪^{きよ}むる」が中国語の「澄清」の疑惑否定を図る釈明の用法と繋がる。

【清】④の例示語数は俗悪な心が無い意の②の28語、さっぱりして気分が好い、清しい意の③の17語、澄んで濁りが無い意の13語より遥かに少ない。一方、『現漢』所収語の比率(75%)は③(14語、82.4%)に次ぐ高さで、②(13語、46.4%)と①(4語、30.8%)を大きく上回る。載録分以外の単語を入れれば諸義の「数拠」(「データ」[『広辞苑』の①「立論・計算の基礎となる、既知のあるいは容認された事実・数値。資料。与件。“実験一”]に当る中国語)も変わるが、この範疇・範囲の集約は中国人の道徳的・生理的な潔癖が少ない傾向を示唆する。

『現漢』の【清】の2字単語108項の品詞は当然ながら形容詞が最も多い(45項、41.7%)が、以下2・3位は動詞(35項、32.7%)と名詞(28項、25.8%)である。複合品詞の5項(【清楚】は①冏②冏③冏、【清玩】は①冏②冏、【清心】は①冏②冏③冏、【清帳】は①冏②冏、【清整】は①冏②冏)は全て動詞を含み、其々3・2語が形容詞・名詞を兼ねる。『広辞苑』と違って品詞を明記する『日国』では、2字「清」語は動詞に分類された例が皆無だから、両国の国語辞典の有り形と両言語の特徴の相異が浮び上がる。

【清玩】(「①冏賞玩に供する雅致の物。盆栽・金石・書画等の類。②冏賞玩する。“清玩の物”“以て清玩に供する”)は、日本語(「①清らかな鑑賞に供すべきもの。②他人の鑑賞の尊敬語」/「①清らかな鑑賞の対象となる物。②他人を敬って、その人の鑑賞をいう語」, ①の初出 = 「随筆・玉洲画趣[1790]」は、「清帳」(「①江戸幕府で、租米蔵納の諸入費を記載した勘定簿。[②③略]」/「①江戸時代、清書された帳簿をいう。調製者より上司に提出され、公簿作成上の基本となる書類。[②~⑤略]」, 同 = 「咄本・正直咄大鑑[1687]」)と同じく、動詞の意味が全く無い。

『現漢』の【清帳】(「①冏勘定を清算する [原文 = 結清帳目]。②冏整理された詳細な勘定書。“整理済みの詳細な勘定書を出す” [同 = 開一篇~]」)は、同じ国産の両詞兼有語(造語)に入る(『漢大』の名/動詞の初出 = 「『儒林外史』第二一回」/無記載, 名詞のみの【清玩】の同 = 「宋高宗《翰墨志》」)。日本語に無い【清整】(「①冏整理 [= 清理] 整頓。“街道の環境を整理整頓する” ②冏明瞭にきちんとしている。流麗できちんとしている [= 清楚工整: 清秀整齐]。“筆跡がきちんとしている”)も、『漢大』の典拠(①「身形が綺麗に整って端正な様」[南史・袁粲伝])が示す様に、古い歴史の重層を持つ。

【清心】は日本語（「①けがれの無い心。②心のけがれを去ってきれいにすること」/「心のけがれを去って清めること。また、けがれを去った清い心」, 初出 = 「日葡辞書 [1603-04]」, 漢典欠落）と違って、品詞・意味別で示される（「①[㊦]心境界が恬静で、懸念 [原文=懸慮] が無い。“清心で修行する” “清い心で苦学する [同=苦読]” ②[㊦]心を清める。“心を清めて欲を寡くする” [=～寡欲] ③[㊦]漢方医学で心火を除去する [=清除] 事を指す。“心を清め目を明らかにする” “心を清め精神を安んじる” [=～明目 |～安神]。①②に当る『漢大』の両義の初出 = 《後漢書・西域伝論》《晋書・列女伝・王凝之妻謝氏》）。

【清楚】（「①[㊦]物事が容易に人に理解・弁別される [原文=了解、辨認]。“筆跡がはっきりしている” “話ははっきりしない” “仕事を明確に引き継がせる [同=交代]” ②[㊦]物事に対する理解がとて透徹だ。“頭脳明晰” ③[㊦]理解する。“彼は何故そうしたのか、私には本当に分らない” “この問題は貴方には分りますか”）は、日本語（「清らかでさっぱりしたさま。飾りけのないさま。“一な身なり”」/「〔名〕[形動ナリ・タリ] 清らかでさっぱりしていること。飾りけがなくさっぱりしていること。また、そのさま」, 初出・漢典 = 「舍密開宗 [1837-47]」 「韋建-河中晚齋詩」）と異質で、知力にも関って複雑である。

①③の語釈中の「了解」（「①[㊦]物はっきり分っている [原文=知道得清楚]。②[㊦]訊ねる。調査する」, 各1・2例。『漢大』の「①明白に分る。理解する。②調査する。はっきりさせる」の初出 = 「宋洪邁《容齋続筆・資治通鑑》」 「周立波《暴風驟雨》第一部三」）は、日本語（『広辞苑』 = 「①さとること。会得^とすること。また、理解して認めること。諒解。“一を求める” “暗黙の一” ②〔哲〕[Verstehen^{ドイツ}] デイルタイでは、文化的産物を心的生活の表現と見て、その内的意味を感情移入や追体験によってとらえること。精神科学・解釈学の根本方法とした。[略] 理解」, 『日国』の①の初出 = 「蘭学階梯 [1783]」）と異なる。

和製漢語「諒解」（「事情を汲んで承知すること。諒承。了解」/「①[㊦]会得すること。事柄・内容をはっきり悟ること。また、理解があること。了解。領解。②[㊦]事情をくみ取って承知すること。納得して認めること。領解」, 初出 = 「杏の落ちる音 [1913] 〈高浜虚子〉」 「混血児ジョオヂ [1931] 〈浅原六朗〉」）は、後発の中国語（『漢大』の1例目 = 「徐特立《我的生活》」）では「了解」（liǎojiě）と読みが違い（liàngjiě）で、意味も全く異なる（「[㊦]実情が分った [原文=了解] 後に許す [同=原諒] 或いは不満を解消する [=消除意見]」, 2例後述）が、語釈中の類義・関連語も両言語の異同を見せる処が多い。

「領解」（「①[㊦]さとること。理解すること。②[㊦]唐の制度で、郷試^とに及第すること」/「①[㊦]“りょうかい” [諒解]” ①に同じ。②[㊦] [解額を領するの意] 中国の唐代の制度で、郷試 [きょうし] の合格者の数の中にはいること。また、その人」, ①の初出・漢典 = 「園太暦-貞和四年 [1348]」 「元史-達礼麻識理伝」）は、同音・類義の「領会」（「領解し会得すること。合点」/「①[㊦]“りょうかい” [了解]” ①に同じ。②[㊦]衣の領 [えり] が合ったり離れたりすること。転じて、ものごとのなりゆき。運命。さだめ」, ①の初出 = 「明極楚俊遺稿 [14C 中か]」, ②の漢典 = 「向秀-思旧賦」）と共に、中国でも廃れた語義を持ち合わせる。

「諒解」②の類語「領承」（「うけたまわること。心得ること。承知。〔[㊦]歎異抄 出典略〕」/『日国』の【領承・諒承・了承】「[“りょうじょう”とも] 事情をくんで納得すること。事情をくんで承知すること。のみこむこと。承諾。領掌。領状」, 初出 = 「御伽草子・花みつ [有朋堂文庫所収] [室町末]」）も、「領

状) (「承諾すること。また、その旨を記した書状。〔平家八、同〕 / 「**目上**の人の命令を承諾して受け入れること。伏して従うこと。承知すること。②特に、書状で承諾の返事をする。また、その書状。返書。また、受け取り書」, 同 = 「平家 [13C 前]」「小右記-寛仁元年 [1017]」) の2義も和製である。

『漢大』にも【領状】が有る (「昔、官府に財物を領収する時に提出する証文 [原文=字拠]」, 初出 = 「《水滸伝》第十六回」) が、和製漢語「領掌」 (「**リョウジョウ**とも) ①領有して支配すること。領知。②きき入れること。承諾すること。承知。領状。〔天草本伊曾保〕〔日葡〕出典略) / 「**リョウジョウ**とも) ①領有して支配すること。領知。②“**リョウジョウ** [領状] ” ①と同じ。③受け取ること。領収すること」, 初出 = 「権記-長保二年 [1000]」「金刀比羅本保元 [1200 頃か]」「将門記 [940 頃か]」は無く、逆に【領握】 (「領をし掌握する」, 出典 = 「晋王該《日燭》」) は日本語に入っていない。

「領知」 (「①領有して支配すること。②受け持つてつかさどること。〔保元〕出典略) / 「**目上**領有して支配すること。知行所として支配すること。また、その土地。②受け持つてつかさどること。担当。③仏語。実際に理解すること」) は、③ (初出 = 「法華義疏 [7C 前]」) が①② (「小右記-寛仁三年 [1019]」「保元 [1220 頃か]」) より早い。『漢大』にも無いこの和製漢語の仏典 (「天台四教義」) 付きの③が、同音単語 (一部) の【了解/領会/梁楷/領海/領解/諒解】【了承/良匠/良相/良宵/良将/料峭/領承/領掌/諒承/糧餉/梁上/領状】 (は『現漢』と共有) の中の関連数語の先を行った。

鍵詞の「承知」 (「**目上**旨をうけたまわって知ること。知っていること。〔浄, 神靈矢口渡〕出典略) 「既にご一の通り」②聞き入れること。承諾。〔黄, 見徳一炊夢^{みろがとくいぬ}〕, 同) “はい、一しました” ③ [打消の意を伴って] とがめず見逃すこと。許すこと。“嘘をついたら一しないぞ” / 「**目上**の人の命令などをうけたまわること。拝承。領命。②相手の願い, 要求などを聞き入れること。納得すること。許すこと。同意。承諾。承引。③知ること。わかること。また、わかっていること。存知) も、初出 (「江談抄 [1111 頃]」「上井覚兼日記-天正一三年 [1585]」「洒落本・通言総籙 [1787]」) は「領知」③より大分遅い。

漢典 (①「蜀志-費詩伝」^{ゆかり}縁語の字・義を含む類語は、【了承】 (「広辞苑」 = 「承知すること。事情を理解し、それでよしとすること。諒承。“一を得る” “快く一する”」, 『日国』の初出 = 「諷誠京わらんべ [1886] 〈坪内逍遙〉」, 「諒承」 (「事情をくんで承知すること」, 同 = 「日本文学史骨 [1893] 〈北村透谷〉」, 「了知」 (「さとり知ること。知了。〔太平記二七〕出典略) / 「物事の内容を知ること。さとり知ること。会得すること。了承」, 初出・漢典 = 「菅家文章 [900 頃]」「朱熹-廓然亭詩」, 「知了」 (「しりつくすこと」 / 「知り悟ること。知りつくすこと。通曉。精通」, 初出 = 「正法眼蔵 [1231-53]」) も有る。

『漢大』の【領】の123項の内に未収の「領知/掌/状」と同じ和製漢語【領承】が有り (「受け取る [原文=接受]、用例 = 「郭沫若《牧羊哀歌》」), 所収の【領會】 (「**際遇**。境遇 [同=遭際]。②了 [=領] 悟・理解。③古代の衣の領^{えり}の交叉する処、即ち襟」) は、①の出典 (「《文選・向秀〈思旧賦〉》: “託運遇於會兮, 寄餘命於寸陰。” 李善注引司馬彪曰: “領會, 言人運命, 如人之相交會, 或合或開。”」) が『日国』の②の語義・漢典に当るが、②の初出 (《宋書・謝弘微伝》) は同①で欠落し、③ (出典 = 「《左伝・昭公十一年》“衣有襟, 帶有結” 晋杜預注: “襟, 領會。結, 帶結也。”」) は日本語に無い。

③の参照項【領衿】（「古代の衣の領は交叉し、其の交叉の処を“領衿”と称する」、出典＝「唐劉禹錫《代賜謝春衣表》、瞿蛻園箋証」）は、日本語では「衿」も無い。古語網羅度が高い『漢大』は同じ国産の【領解】も入れる（「⊖ [—jiě] ① 弁難する、是非を正す事を謂う [原文＝謂辨難：辨正]。② 情況を理解し分析を行う事を謂う。③ 了悟・理解。⊖ [—jiè] ④ 郷試及第 [同＝中舉] を謂う。⑤ [犯人や俘虜を] 護送する [=押解]、初出＝「南朝宋慧通《駁顧道士夷夏論》《南史・賊臣伝・候景》《隋書・李德林伝》「明唐寅《絶句八首奉寄孫思和》」「明湯顯祖《牡丹亭・硬拷》」）が、『現漢』には見当たらない。

『現漢』の【領（領）】ling の54項に入る【領會】（「勳物事を領略して会得する所が有る [原文＝“有所体会”]。“真劍に文書の主旨を領會する”“貴方は彼の意思を誤って理解した” [同＝認真～文件的精神 | 你把他的意思～錯了]」）は、類義の【領略】（「勳物事の情況を理解し、更にその意義を認識し、或いはその味わいを識別する [=辨別它的滋味]。“江南の風景を領略する”」）も、日本語にも有る（「意味をさとること。領會^{ㄉㄩㄥˋ ㄏㄨㄟˊ} / 「意義をさとること。納得すること」、初出＝「狂雲集 [15C 後]」「梁昭明太子-与何胤書」）が、2語とも『広辞苑』の語釈のみの様に非常用である。

『漢大』の【領承/解】の語釈中の「領悟」（「領會・曉悟」、初出＝「明李贄《復焦弱侯書》」）は、『現漢』も載録している（「勳領會：理解。“私が言った此等の話は、彼には未だ理解していない様だ」）が、日本語には同じ漢典縁の【了悟】しか無い（「真理をよくさとること」/「真理を明らかに語ること。会得・理解すること。了覚」、初出・漢典＝「運歩色葉 [1548]」「吳澄-次韻玉清避暑詩」）。『現漢』の同項（「〈書〉勳領悟。はっきり解る [原文＝明白]」）は、用例（「其の中の妙味は、未だはっきり分らない」 [同＝其中奥妙、尚未～]）の様に能く使われる。

「良匠 / 将・良師益友」——「師匠・老師」——「老師費財 / 勞民傷財」——
「勞師 / 興師動衆」——「勞軍」——「娘子軍・從軍慰安婦」——「勞苦功高」

【了¹】【了²（瞭）】liǎo (16項)の内、【了悟】の前の頁(820)に在る【了解】（「勳はっきり知っている [原文＝知道得清楚]。“目を下に向けてこそ、大衆の願望と要求を本当に把握できる” ② 訊く [同＝打聽]。調査する。“先ず狀況を把握しに行く”“それは一体どういう事だ [= 這究竟是怎样回事]？貴方は一寸調べて来てくれ”」）は、【諒（諒）】liàng (818頁)の2項中の【諒解】（前出）の1義・2例（「彼は貴方の苦衷をととも理解している」「皆は互いに理解し、関係を好くす当きだ」 [= 大家应当互相～、搞好關係]）と比べれば、日本語の混用と対照的な違いが窺い知れる。

【諒】①（「体察。原諒：～解 | 体～」 [体験・観察する。許す。“実情を理解して許す”“事情を理解する”]）は、【体察】（「勳体験・観察する。“民情を体験・観察する”」）が『日国』に有り（「身にひきあてて考察すること。身をもって細かく調べ考えること」、初出＝「翁問答 [1650]」、『漢大』の「宋羅大経《鶴林玉露》卷十三」等の漢典は未録）、【原諒】（「勳人の粗忽・過失或いは誤りに対し、寛恕・諒解を以て譴責或いは懲罰を加えない」）は、【所犯】（「罪を犯した事。また、その犯した罪。犯罪」、同＝「吾妻鏡-養和

元年 [1181]) の例 (「刑法 [明治一三年] [1880] 八九条 “所犯情状原諒す当き者 [略]”) にしか無い。

「体諒」(「**○**設身处地為人着想, 給以諒解: 她心腸好, 很能~人」**○**親身を以て人の為に考え, 思い遣りて理解を示す。“彼女は心根がよく, とても人を思い遣りて理解する事が出来る”) は、『日国』の他項目の例にも見当たらない。**【諒】** ② (「**○**料想: ~不見怪 | ~他不能来 **○**推測する。“咎めが無いと推察する” “彼は来られないと見る”) の「料想」(「**○**猜测 [未来的事]; 預料: ~不到 | 他~事情一定成功 **○**〈未来の事を〉推測する。予見する。“予測が付かない” “事は必ず成功すると彼は予想している”) も, 「猜测」(前出) と共に日本語に入った痕跡が無い。

【預料】 (「**①**動事前に推測する。“この地域は秋の収穫が去年より10%増えると予測される” **②**名事前の推測。“案の定 [原文=果然]” 彼の予測から外れていない) は、『日国』にも有る (「先取りすること。予想すること。あらかじめ考えられること。予測。予知。予見。カント哲学で, 経験的認識に属するものを, 先天的に認識すること」, 初出 = 「東洋学芸雑誌 - 四七号 [1885] 唯物論一斑 (中川重麗訳)」) が, 和製漢語ながら『広辞苑』には残っていない。西洋の哲学に由来した抽象的な名詞は中国語で「唯物」色に染まって, 即物・即時的な動・名両詞兼用の単語と為った。

【了¹² (瞭)】と『広辞苑』の共通項は 4/16 (【了解/了/然/悟】) で, 2 頁目の**【料¹² liào** の 2/10 は更に比率が低い。**【料理】** と並ぶ**【料峭】** (「**○**書) 微かな寒さ [原文=微寒] の形容 [多く春寒を指す。“春寒料峭”) は, 日本語 (「**○** 峭” はきびしい意で, “料峭” はきびしさを肌ではかる意) 春風が肌に寒く感じられるさま。〈春〉。“春寒一” / 「**○**形動タリ) “料” はなでる, “峭” はきびしい, の意) 春風が皮膚に寒く感じられるさま。《季・春》, 初出・漢典 = 「不二遺稿 [1424]」**【蘇軾 - 送范德孺詩】** として, 『広辞苑』の**【了承/良匠/良相/良宵/良将/料峭/領承/領掌/諒承/糧餉】** に有る。

「良匠」(「すぐれた学者・大工・細工人など。『天草本金句集』出典略) / 「**○**腕のよい工匠。すぐれた大工や工芸家。名工。②すぐれた学者」, 初出 = 「万葉 [8C 後]」**【靈異記 [810-824]】**, **【**腕**】**の漢典 = 「淮南子 - 泰族訓」, 「良相」(「よい宰相。すぐれた大臣。賢相」 / 「すぐれた宰相。賢相」, 初出・漢典 = 「文明本節用集 [室町中]」**【史記 - 魏世家】**), 「良将」(「よい大将。すぐれた將軍」 / 「よい大将。知勇にすぐれた立派な大将。名将」, 同 = 「性靈集 - 三 [835 頃]」**【三略 - 上】**) は, 『現漢』の**【良 liáng (23 項)】**の『広辞苑』と共有する 14 項 (**【良策/辰/好/家/民/人/田/宵/心/性/薬/縁/知/種】**) には無い。

『現漢』の**【良田 liángtián】**と**【良心 xīn xīng/性】**の間の**【良宵 liángxiāo】** (「美好的夜晚: 大家歡聚一堂, 共度~」**【素敵な夜。“皆楽しく一堂に集まって, 共に良宵を過す”】**) は, 日本語 (「よい宵^よ。良夜」 / 「よい晩。気持のよい夜。晴れた, ながめのよい夜。また, めでたい晩。《季・秋》, 初出・漢典 = 「文華秀麗集 [818] 〈仲科善雄作〉」**【李白 - 友人会宿詩】**) より常用である。**【良田】**の前の**【良師益友 liángshī yìyǒu】** (「使人得到教益和幫助的好老師、好朋友」**【人に教示と助けを与える好い教師・好い友人】**) は, 『広辞苑』で**【良師/益友】** (「よい師匠。すぐれた教師」 / 「まじわってためになる友人。↔ 損友) が対応と為る。

『日国』の前者 (「よい師匠。すぐれた師」, 初出・漢典 = 「三教指帰 [797 頃]」**【史記 - 梁孝王世家】**) は, 中国語の「老師」(「教師に対する尊称。広く文化・技術を伝授する人, 或いはある方面で学ぶに値

する人を指す)と違って、「師匠」(「①学問・技芸などを教授する人。先生。[『平家一〇』出典略] ②芸人に対する敬称」/「①学問、芸術または武芸などを教える人。先生。②近世以降、歌舞音曲などの遊芸の教授をする人。お師匠さん。③芸人をいう語。多く、格のある芸人に対して対称代名詞として用いる」, ①②の初出=「明衡往来 [11C 中か]」「浮世草子・世間母親容気 [1752]」, ①の漢典=「世説」)を使う。

同じ漢和混合の「老師」(「①年とった僧または先生。また単に、先生。②長く戦地にあつて軍隊を疲れさせること」/「①年老いた僧。また、年老いた師匠。年をとった先生。②禅宗で、師家を敬つていう語。③戦争を長びかせて兵隊を疲れさせること」, ①②の初出=「靈異記 [810-824]」「門 [1910]〈夏目漱石〉」, ①③の漢典=「史記-荀卿伝」「春秋左伝-僖公三三年」)の内に、漢語由来の③は中国で死語と化した。『現漢』の【老】lǎo (193 項) の①~⑱には当該の動詞の意が無く、同音(第2声)の【勞(勞)] (53 項) の7 義中の④(「使勞苦; 使疲勞」[苦勞させる。疲勞させる])が該当する。

2 例中の「～神」(「勸耗費精神 [常用作請托時的客套話]: 你身体不好, 不要多~|~代為照顧一下」[勸精神を費やす〈能く依頼する時の型通りの挨拶に用いる〉「貴方は体が好くないから、余り気を煩わさないでくれ」「御心勞をお掛けしますが、代つて一寸面倒を見て戴きます」])は、日本語にも有る(「心を勞すること。心を苦しめること。心配。心勞」/「精神を勞すること。心をいためること。心配。欠落の漢典は『漢大』の同義の②に《漢書・叙伝下》等と有る)が、「～民傷財」(「既使人民勞苦, 又浪費錢財」[人民に苦勞させ, 又金錢を浪費する]、『漢大』の初出=「《西遊記》第九二回」)は日本語には無い。

【勞民傷財】の次の4 字熟語項【勞師動衆】(「元は大勢の[原文=大批]軍隊を出動させる事を指し、今は多く大勢の人力を使用する[同=動用]事を指す[小さい問題を大袈裟に扱う〈=小題大作〉意を含む]」, 『漢大』の初出=《醒世恒言・李汧公窮邸遇俠客》)は、【興(興)] xīng (25 項) 中の【興師動衆】(「とても多くの人を動員して [=発動] ある事をする [多く価値が無い〈=不值得〉意を含む]」, 同=《呉子・勵士》)と共に日本語には無い。【勞神】と【勞師動衆】の間の【勞師】(「《書》勸軍隊を慰勞する」)も同様であるが、「動衆」の対置語とも軍隊を疲勞させる「老師」とも違う。

【老師】は『日国』に無い語義(「②広く文化・技芸を伝授する人を称す」, 初出=《新五代史・雜伝十七・崔暹》。③略)・漢典(「④僧侶に対する尊称」の「唐王建《尋李山人不遇》」等)の半面、最後の⑤(「軍隊が長引く出征で疲勞困憊になる [原文=出征日久而疲憊] 事を指す」, 初出=「《左伝・僖公三十三年》: “老師費財, 亦無益也。”」)は一緒である。関連の【勞民費財/動衆】も有る(同=《新唐書・南詔伝贊》《旧五代史・晋書・高祖紀三》)が、「勞民」「費財」(同=《晏子春秋・諫下二》《漢書・翼奉伝》)は揃って日本語に無い。

『日国』の【老師】③の漢典(「老師費財, 亦無益也」)は魯の僖公末年(前627)の記事で、『春秋左氏伝』の前年の篇に同義「勞師」が出る(「蹇叔曰: “勞師以襲遠, 非所聞也。師勞力竭, 遠主備之, 無乃不可乎。”」[蹇叔曰く、「師を勞して以て遠きを襲うは、聞く所に非ざる也。師勞し力竭き、遠主之に備えれば、乃ち不可なること無からん」])。『漢大』の【勞₂師】(「勞軍に同じ」, 勞₂=【勞₁】②「疲勞; 勞苦」)の前の【勞師】(「軍隊を疲勞させる」)は、出典(「《左伝・僖公三十二年》[上記下

線部分]、《後漢書・袁安伝》、「《東周列国志》第四十四回」)に示すが、日本語は「老師」を入れた。

同義の非文語【^{じゅう}勞軍】(例=「各界の代表が前線に行って軍隊を慰勞する」)は、「勞師」と一緒に日本語に入っていない(『漢大』の初出=《史記・楽毅列伝》《史記・司馬穰苴列伝》)が、『日国』の【老師】の次の頁(第13巻、1133)の【^{ろう}娘子軍】は変な軍人慰安の意味を兼ねる(「[“じょうしぐん”の慣用読み] ①婦人だけで組織した軍隊。また、婦人の一団を比喩的にいう。②軍人を肉体的に慰安するために、軍隊に付属して同行する一団の娼妓。転じて、海外に出稼ぎする娼妓のグループをいった」, 初出=「不如帰 [1898-99]〈徳富蘆花〉」「訂正増補新しい言葉の字引 [1919]〈服部嘉香・植原路郎〉)。

漢語に由来し使用歴が長い【^{じょう}娘子軍】(「① [中国, 唐の平陽公主の率いた女性だけの軍隊の名から] 女性の率いる軍隊。また、女性だけで組織した軍隊。②女性の一団。また、娼婦の群れ」, 初出=「徂徠集 [1735-40]」「何処へ [1908]〈正宗白鳥〉」, ①の漢典=「新唐書-平陽公主」)は、『広辞苑』では【^{ろう}娘子軍】(「ジョウシグンの慣用読み」)の主項目(「①唐の平陽公主が女性だけで組織した軍隊。父の高祖を助けて天下を平定した。②転じて、俗に女性の集団」)と為るが、従軍慰安娼妓や海外出稼ぎ売春婦の集団の意味合いが消えている。

「従軍慰安婦」(「日中戦争・太平洋戦争期, 日本軍管理下に戦地の慰安所で [旧版=によって] 将兵の性的対象とされ [←なることを強いられ] た女性。植民地・占領地出身の女性も多く含まれており, 徴募・服務にあたって強制があった [←いた]」/「日中戦争及び太平洋戦争中に集められ, 戦地で, 将兵の性的欲求に応ずることに従事した女性。軍隊慰安婦ともいう」), 「慰安婦」(「“従軍慰安婦”参照」/「第二次世界大戦中, 戦地で, 将兵の慰安を名目に, 売春をさせられた女性。強制的に連れて行かれた者もいた。従軍慰安婦」, 初出=「夢声戦争日記 [徳川夢声] 昭和一七年 [1942]」)より, 「娘子軍」②の方が早い。

『現漢』の【娘(嬢)】(11項)中の【娘子軍】niáng·zǐjūn (「隋末の李淵の娘 [原文=女兒] が率いた軍隊は娘子軍と称し, 後に広く女性で組織された軍隊や集団 [同=隊伍] を指す)は, 【娘子】(「①〈方〉妻。②中青年の女性に対する尊称 [多く早期の白話に見える]」)と共に悪い意が無い(『広辞苑』の「①むすめ。少女。処女。②婦人。女。③他人の妻」)に対し、『日国』の【娘子・嬢子】は「①女の子。むすめ。おとめご。②一般に女をいう。婦人。また, 他人の妻。細君。③母。④娼妓。売春婦」, ①②の初出・漢典=「万葉 [8C 後]」「長沢本俗語解 [18C]」/「北斎書-祖斑伝」[「輟耕録-卷十四・婦女曰娘」)。

「文革」中の8つの「样板戲」(模範劇)に舞台舞踊劇『紅色娘子軍』が有り, 第1次国共内戦(1927~37)期の海南島の紅(赤)軍娘子軍連(中隊)の事績に拠る作品は, 和訳題『赤い女性中隊』から日本で馴染みの無い「娘子軍」が消された結果, 「紅色」(「①囹赤い色。②厠属性詞。革命或いは政治的自覚 [原文=覚悟] が高い様の象徴。“紅の政権”“紅の根拠地”“紅の商人”」)と逆の, 和製語義から連想し易い「黄色」(「①囹黄色い色。②厠属性詞。内容が煽情的 [同=色情] のを指す。“色情小説”“色情録画」)に染まらずに済んだ。

【娘(嬢)】(「①〈口〉囹母親。②上の世代 [原文=長一輩] 或いは年長の既婚女性の呼称。③若い女性」, 各2例)は, 日本語の「娘」(「産女」の意)の「我が子である女 / 若い未婚女性」, 「嬢

の「未婚女性（の氏名に添える敬称）」意と異なる。【労民傷財】の語積中の「浪費錢財」も「老師」の漢典（「老師費財，亦無益也」）に2字が出るが、『現漢』の【錢財】の1義（「金錢」）に対して日本語で多義が有る（「①ぜにや宝物。②ぜに。かね。金錢」/「ぜにや宝もの。また、ぜに。金錢。財貨」，初出・漢典・仏典＝「靈異記 [810-824]」「莊子-徐無鬼」「大比丘三千威儀-下」）。

「老師費財/労民傷財/労師動衆/興師動衆」（「興師」＝「〈書〉鬪兵を興す。兵を起す。“師を興して罪を問う”」）の様に、中国の4字熟語は随処有る。【労軍】の次の【労苦】（「遼過勞で疲勞 [原文=勞累]・辛苦。“労苦大衆”“労苦を辞さない”」）は、日本語でも常用する（「ほねおり。心身を苦しめること。苦勞。“長年の一に報いる”“一をいとわず働く”」/「からだや心が、疲れたり苦しい思いをしたりすること。骨折ったり心配したりすること。苦勞」，初出・漢典＝「田氏家集 [892]」「詩経-邶風」）が、【労苦功高】（「勤勉・刻苦に事を為し [同=做事動苦]，功勞がとても大きい」）は日本語には無い。

「狼視豺睨」——「事倍功半・事半功倍」——「治療・療治」——「知了・了知」——「一目瞭/了然」

日本語の「労多くして功少なし」（「苦勞が多い割には報われない」/「苦勞ばかり多くて効果が少ない。苦勞の多いわりには得るものが少ない。*続日本紀-天平九年 [737] 四月戊午“若不許其請。凌圧直進者，俘等懼怨遁走山野。労多功少。恐非上策。”）は、出典中の漢文4字が熟語化せず、『日国』の【娘子軍】に次ぐ【狼視豺睨】（「“豺”は山犬] 狼 [おおかみ] や山犬のように、恐ろしくするどい目付きでにらむこと。*将来之日本 [1886] 〈徳富蘆花〉一三“果して然らば彼封建武士等が〈略〉軍歌を謡ふて相互に狼視豺睨したるも亦故なきに非ざるなり”」）も、後の用例が続かない。

「功勞」「労働」（=国字 [和製漢字] を用いる「労働」）を含む「労苦功高」「労師動衆」以上に、均整な対から成る「労多功少」は見事な成句なのに和製熟語に成れなかった。類義の中国語の「事倍功半」（倍の勞力を掛けて半分の成果しか上がらない）は、『現漢』の【事】（36項）の2番に在る（「形容花費の氣力大，収到的成效小」 [費やす精力が大きく，収める成果が小さい事の形容]）。前の【事半功倍】shìbàngōngbèi（「形容花費の氣力小，収到的成效大」）と反転の対を成し，2語（『漢大』の語源は「明呉本泰《帝京篇》詩」と《孟子・公孫丑上》《六韜・軍勢》）とも対置・対立の上に立つ。

『日国』の【娘子・嬢子】のIの漢典（「北齊書-祖珽伝“一妻耳順，尚称娘子。”」）は、『北齊書』（「中国の正史。五〇卷。唐の太宗の時，李百葍奉勅撰。六三六年 [貞觀一〇] 成立。現存本は後人の補ったもの。南北朝時代の北齊の歴史で本紀八卷，列伝四二卷からなる。二十五史の一つ）の誤植が有る。【北齊】（「中国，南北朝時代の北朝の一つ [五五〇~五七七]。東魏の実権者高洋 [文宣帝] が帝位を奪って建てた鮮卑族の国。北は契丹・突厥を討ち，西の北周，南の陳に対抗したが，四代で北周の武帝に滅ぼされた。高齊。齊」）の通り，『広辞苑』と共有する2項は「齋」の表記が無い。

【治療】（「“ぢりょう”とも] 病氣やけがをなおすこと。療治」，初出＝「靈異記 [810-824]」）では，

漢典(「北齊書-清河王岳伝“時岳遇_レ患,高祖令_二還_レ并治療_一”)の書名を正しく記している。皇族で清河郡王に封じられた高岳(512~55)は列伝第五,祖斑^{てい}(宰相,生歿年不詳)は同三十一の各2名の主人公に挙げられるが,第12巻55頁の【北齊書】と51頁の【北齊派/漫画/流】との混線なら,不可解ならぬ半可解(造語)に為る(『広辞苑』の【北齊】は「→かつしかほくさい[葛飾北齊],当該人名項[記述対象=江戸後期の浮世絵師,1760~1849]は複合語項が無い)。

【治療】の語誌[1](「治療」と“療治”はともに古くから用いられてきたが,近世中期後半頃から“治療”が多用されるようになる。これは中国近世に『傷寒論』など医学書に“治療”が多用されていることと関連している),[2](「杉田玄白『蘭東事始-上』や渡辺崋山『外国事情書』に“療治”が使われており,儒医が好んで“治療”を用いたのに対し,西洋医学を学んだ人は“療治”を用いる傾向が指摘される。[略])は,【療治^じ】(「^レ病氣やけがをなおすこと。治療。②わるいところをなおすこと」,初出=「日本後紀-弘仁二年[811]」[雑俳・机の塵[1843]],^レの漢典=「北魏書-裴延儁伝」との交錯を示す。

『日国』『広辞苑』の【治療】は【知了】の直前/後に在り,『現漢』の【治療】zhiliáo(「^レ薬物・手術等を用いて疾病を消除する。“長期治療”“入院治療”“彼の病氣は入院治療が必須だ”)も,【知了】zhīliǎo(「^レ蟬[原文=蚱蟬]の通称。鳴き声が“知了”に似ているから名を得た」と同音である(声調の違いに由り其々1690,1678頁と離れている)。日本語では「知了」は知的な意味で蟬と関係が無いが,「蟬」の由来(『広辞苑』=「“蟬”の漢音が和音化したものという説と,鳴き声によるという説とがある])は,同じく漢語が鳴き声に帰する(中国語の「蟬」は「禪」と同じchán)。

『広辞苑』の【治療】(「病氣やけがをなおすこと。また,そのために施す種々のためだて。療治。“一を受ける”“一に専念する”),【療治】(「病氣をなおすこと。治療。“もみ一”“荒一”)は同じ2例が付く。『現漢』の後者(「^レ治療する。“火傷[原文=燒傷]を療治する”)は例が前者の1/3例であるが,『広辞苑』と共通する【疗(療)】の項(7項中の【療法/養/治】)に入る。liáoの19親字(21項)の内1・2番目の【辽¹²(遼)】とこの字の簡体は,次のliǎoの5親字(6項)の1・2番の【了¹²(瞭)】【釘(釘)】(白金族元素の^{ルテニウム}釘,記号Ru)の「了」を含む。

『広辞苑』の後者の同音語(【令旨】「皇太子,また三宮・親王および王・女院の命令を伝える文書。れいし)/【兩次】「二回。二度。“一の大戦”)/【聊爾】「①[旧版の“かりそめなこと。”削除]思慮が足りないこと。②粗相^{そそう}。失礼。粗忽^{そご}。[[無名抄]出典略]“一ながら”)/【領事】「[consul]外国にあって,自国の通商を促進し自国人の必要とする援助および保護に当たる公務員。[略])は,『現漢』所収が最後(「一国の政府の派遣で外国のある都市或いは地域の領事館に駐在する官員。主な任務は本国とその在外国民[原文=僑民]の当該領事区内の法的権利と経済的利益を保護し,在外国民事務を管理する等)である。

『日国』の【令旨】(初出=「続日本紀-宝亀元年[770]」。副項目【令旨^{れいし}】の初出・漢典=「延慶本平家[1309-10]」「金史-章宗紀・一」[[金史]は1344年成立で後出]),【兩次】(初出=「空華日用工夫略集-永徳二年[1382]」),【領事】(「^レりようじかん[領事館]」に同じ。②総領事の監督を受け,その管轄区域内の一地方にあって領事官の職務を行なうもの,初出=「明六雜誌-八号[1874]〈津田真道作〉」

「外交官及領事官官制 [明治三二年] [1899]」は和製，【聊爾】（両義の初出＝「勸修寺家本永昌記裏文書－[年月日未詳] [鎌倉]」「無名抄 [1211 頃]」，②の漢典＝「蘇軾－戯書詩」）は漢和混合と為る。

『漢大』の【令旨】①（「帝王の命令を指す」，初出＝《梁書・王僧辯伝》）は和文の出現より早く（二十四史中の南朝梁の正史『梁書』は636年撰進，六国史中の『統日本紀』は同799年），②（「宋・元の時代に太子の命令を指した」，同＝「宋岳珂《愧郊録・聖旨教令之別》」）に次ぐ③は，『日国』と同じ出典を引くが意味（「曾て金の時代に皇太后の命を以て“令旨”と為した」）が違ふ。【領事】も和製語義の③（初出＝「二十年目睹之怪現象」第四七回）の前に，国産の①（「所管の事」，同＝《漢書・百官公卿表上》），②（「その事を統領する事を謂う」，「唐薛用弱《集異記・蔡少霞》」）が有る。

【聊爾】（「姑且；暫且」^{ひと}「先ず。暫く」，初出＝《宋書・王景文伝》）は和製漢語と意味が異なり，「兩次」（不立項）を含む【兩次三番】（「多次；屢次」[複数回。屢々]，同＝「元関漢卿《緋衣夢》第三折」），同義の【三番兩次】（同＝「元張可久《天淨沙・春情》曲」），【三番五次】（『現漢』＝「屢次」，『漢大』の初出＝「儒林外史」第三八回）は，日本語では「三番」の複合語に入らない（「五次」は元々無い）。両言語の此等の違いの半面「令旨/領事」に「令/領」の字形・発音の親縁性は，中国語の同音（ling, 「令」は第4声為主で2・3声の異読有り，領は3声）にも見える。

『現漢』のliáoの単語・熟語項を設けた12の親字（項目数順＝【聊¹²】8，【療[療]】7，【撩】5，【僚】【寥】4，【辽[遼¹²]】【潦】【繚】【燎】2，【瞭】【寮】【寮】1）に，上位2字が『広辞苑』の【聊爾】【療治】の近隣と通じる。0項の7字中3字が「寮」を含み（【僚/僚/寮】），liáoの2字（【撩/瞭】），liàoの5字中3字（【了¹²（瞭）/僚/寮】），liàoの9字中3字（【撩/瞭/僚】）も同じ要素で成る。「療治」と「瞭知」（「はっきりと知ること。はっきりとわかること」，用例＝「花柳春話 [1878-79]（織田純一郎訳）」）の様に，中国語で同音（2字目＝zhì/zhī）と為る親縁組も有る。

『漢大』は『広辞苑』と共に「瞭知」が無く，【了知】（「明らかに知る。領悟」，初出の《宋書・殷琰伝》[二十四史中の南朝宋の正史，488年成立]は『日国』の漢典の朱熹 [南宋の大儒，1130~1200]の詩より7世紀早い）も普及版で外れた。日本語での発達（両書に法律用語の【了知主義】と有り，『日国』の例＝「袖珍新聞語辞典 [1919]（野村猷郎）」）と逆に，『現漢』は採らないが，【了¹²（瞭）】中の【了然】は『広辞苑』と共通する（「明らかな様。はっきりしている。“一目了然”“真相は如何なる物か，私も余り了然としない”/「はっきりとよきさとるさま。あきらかなさま」[新版増の鏡花『義血俠血』出典略]）。

『日国』には同項（「形動タリ」ははっきりとよきわかるさま。判然」，初出・漢典＝「授業編 [1783]」「白居易－睡起晏坐詩」）と，【瞭然】（「形動タリ」ははっきりとしているさま。あきらかなさま。明白。歴然」，同＝「信長記 [1622]」「白孔六帖」）が並ぶ。後者の項が無い『広辞苑』の【一目瞭然】（「ひと目見てよきわかること」）は，『日国』にも有り（「形動」ものごとの有様が，一目見ただけでははっきりとわかるさま。明瞭 [めいりょう]」，初出＝「語彙 [1871-74]」。欠落の漢典は『漢大』載「《朱子語類》卷一三七」）等が有る，『現漢』で【一目了然】（「一目ではっきり見える」）と為る。

日本語の複雑は「了/瞭」の分化の他に「治療/療治」の「治」の読みの相違も挙げられ

るが、『現漢』の【治】(21項,【治安/療/水/外法権/罪】と【治国理政】の前半が『広辞苑』と共有)はzhìでしかない。『日国』の【娘子・嬢子】①の漢典題の誤植は中国語では音・意とも混同が有り得ないが、正・誤の2字は両言語の乖離を現す様に、『現漢』の【齊¹²(齊)】qíの18項中『広辞苑』と共通するのが1/6弱(【斉唱/整/奏】の2項目は『広辞苑』の【整齐・齊整】の見出しの後半),【齋¹²(齋)】zhāiの5項にも1項(【齋戒】)しか無い。

「斉唱奏声」——「異口同声/音」——「唱/称える」——「提唱/倡」——「倡導・唱導・唱導」——「唱導師・導師」——「既成/出」

日本語の「斉唱」(「①一斉にとなえること。②〔音〕[unison] 同一旋律を二人以上でうたうこと。“校歌—”/「①大勢でいっせいにとなえること。②声をそろえて歌うこと。特に現代では多人数の歌い手が同じ旋律を同じ高さ、またはオクターブ高低させた声で歌うこと。和声をもたない点で合唱と区別される。ユニゾン」, 初出=「白い壁 [本庄陸男] <1934>」「北里歌 [1786 か]」, ①の漢典=「無名氏-青驄白馬曲」)は、『現漢』(「② 2人又は2人以上の歌い手 [原文=歌唱者] が同じ旋律を以て同時に歌う [同=演唱]」)と同義の方も、漢語に由来した(『漢大』の初出=《楽府詩集・清商曲辞六・青白驄馬曲》)。

【斉奏】(「① 兩個或兩個以上の演奏者同時演奏同一曲調」)も行為者が主語で、原産国の両書(「多数の楽器類で同じ旋律をいっしょに奏すること」/「[英 unison の訳語] 多数の同種または異種の楽器で、同じ旋律をいっしょに演奏すること。ユニゾン」, 用例=「モダン語辞典 [1930] <鶴沼直>」)と比べて、「以上」の基準の相異を窺わせる(『現漢』の同項の「方位詞。①位置・順番或いは数量 [原文=数日] 等がある一点の上にいる事を表す」と違って、『広辞苑』の【以上・已上】①は「程度・数量などについて、それより多い、または優れていること。法律・数学などでは、基準の数量を含みそれより上」)。

『広辞苑』の例(「一八歳—“中級—” 予想—のでき”)は中国語で基準への「超出」(～を超える)の意と為り、『現漢』の例(「半山～石階更陡 | 県級～幹部」[「山の中腹からの石段は更に急だ」| 県級以上の幹部])は基準を含まない。【含】の②(「藏在里面; 包括在内; 容纳: ~着眼淚 | 這種梨～水分很多 | 工齡滿三十年以上 [～三十年] 者均可申請」[中に隠れる。内包する。収容する。「涙を浮かべて」| この種の梨は沢山の水分を含んでいる」| 職歴が満30年以上 <30年を含む>の者は全て申請可能])の3例目の特筆の様に、誤解や紛糾を防ぐ為の峻別や明確化が用心深い国民性らしい。

日本語に無い【斉声】(「① [大勢の <原文=許多> 人が] 一斉に同じ声を出す。“一斉に歌う” “一斉にスローガン標語 [同=口号] を高く叫ぶ”」, 『漢大』の②「異口同声」の初出=「唐常非月《詠談容娘》」)は、『現漢』の2人を含む複数より多い『日国』の【斉唱】の「大勢/多人数」と通じる。『三国志演義』第1回の例(「玄德、雲長斉声応曰」)の2人から、「異口同声」(『現漢』=「沢山の人が同じ話をする形容」)の「很多」に膨らんだ。『広辞苑』の【異口同音】(「多くの人が口をそろえて同じことをいうこと。多くの人の説が一致すること。“一に反対を唱えた”)は、集団的な同調も加わる。

後者（『日国』の初出・漢典＝「本朝文粹 [1060 頃]〈大江匡衡作〉」「宋書－庾炳之伝」と1字の差ながら、類語の前者（『漢大』の初出＝「晋葛洪《抱朴子・道意》」）は日本語の圏外に在る。『漢大』未収の和製漢語「斉読」（「みんなで声を合わせて読むこと」、初出＝「小学読本 [1884]〈若林虎三郎〉」）は、同じ一斉発声の「斉唱」と違って『広辞苑』には残っていない。他方、「一斉の^{せい}声」（複数人数が一斉に動作する際に^{タイミング}時機を合わせる為の掛け声。両書未収）は「斉・声」を含み、中国語の「予備～起！」（用意、始め）の「起」も「斉」と同音（声調が違う qǐ）である。

【斉唱】①①の語釈中の「となえる」は、『広辞苑』の【唱える・称える】（「〔他下一〕[㊦]となふ、〔下二〕〔室町時代よりヤ行にも活用〕①〔あるきまった文句を〕声をたててよむ。〔蜻記巻末歌〕『日葡』出典略“お経を一・える”②高く叫ぶ。“万歳を一・える”③人に先立って主張する。首唱する。“新説を一・える”“異を一・える”④〔“称える”と書く〕名づけていう。呼ぶ。称する。“名を某と一・える”）の①に当る。前の3義の「唱」と④の「称」は「歌唱/仮称」の様に音読でも一緒であるが、中国語では意味以前に発音（chang と cheng）が異なる。

『日国』（「[㊦]声を立てて読む。誦す。うたう。うたいます。②高く叫ぶ。叫ぶ。③人に先立って言う。首唱する。唱導する。④主張する。いはる。⑤名づけていう。呼ぶ。称する。⑥略」、初出＝「書紀 [720]」「名語記 [1275]」「制度通 [1724]」「死霊－二章 [1946-48]〈埴谷雄高〉」「交隣須知 [18C 中か]」）に、又「首唱」（『広辞苑』＝「まっさきに唱えだすこと。“機構改革を一する”“一者”））が出る。『日国』【首唱・首倡】（「一番さきに言い出すこと。まっさきに唱えること。また、その人」、初出・漢典＝「真愚稿 [1422 頃か]」「南史－傅亮伝」）は、中国語では同音の「唱/倡」の並立は文語を除いて無い。

『現漢』の【首倡】（「[㊦]先んじて提唱する〔原文＝首先提倡〕」）は、「提倡」「動物事の利点〔同＝優点〕を提示して皆に使用或いは実行を奨励する。“標準語を話すよう提唱する”“勤儉節約を提唱する”）」を使うが、日本語は「提唱」（「①ある事を提示して主張すること。“一者”②〔仏〕禅宗で、語録などを取り上げ〔旧版＝教えの根本を提示し〕て説法すること。提要。提綱」/「[㊦]禅宗で、大衆に宗旨の大綱を説き示すこと。提綱。②事に先立って意義を説き示すこと。主義・主張を説いて呼びかけること」、初出＝「門 [1910]〈夏目漱石〉」「宗教哲学骸骨 [1892]〈清沢満之〉」、[㊦]の漢典＝「禅苑清規－二・小参」と為る。

『現漢』の chàng の7親字（8項）は【唱】の単語・熟語項が最多（33）で、以下【暢（暢）】（14）、【倡】（6）、【悵（悵）】（5）と続き（他は0項）、4字合計の58項は【提】 tí（63項）と【首¹² shǒu（47項）の間に在る。『広辞苑』と共通する項は【唱】に2しか無く（【唱酬/和】）、【倡】は皆無である。【倡】（「①先頭に立って動員する。“唱導”“提議”〔原文＝帶頭發動：～導 |～議〕。②〈書〉“唱”①②と同じ）」は、日本語と同じく【唱】の一部（①「[㊦]口の中から楽音を発する。音律〔同＝楽律〕に従って声を発する。②[㊦]大声で叫ぶ）」と重なる。

【倡導】（「[㊦]率先して提唱する。“新しい風尚を唱導する”）」は、『日国』の【唱道・唱導】の①（「〔唱導〕仏語。④〔一する〕教えを説いて、人を導くこと。説教・法談などを行なうこと。⑤“しようどうし〔唱導師”の略、初出＝「伝光録 [1299-1302 頃]」「円照上人行状 [1302]」）に次ぐ②（「〔一

する] さきだちとなつてとなえること。率先して言い出すこと。また、となえ導くこと。称道) の初出(『西国立志編 [1870-71] (中村正直訳) 一・一〇“善人君子の言行録、最も他人を補助し、倡導〔注〕ミチビキ] し、勸励することなればその教訓となり、裨益となること甚多し”)に見える。

②の漢典(『*後漢書-荀爽伝“獸則牡為_レ唱導_一、牝乃相從” *黄庭堅-書王荊公贈俞秀老詩後“秀老作_レ唱道歌十篇_一、欲_下把手牽_レ一切人_一、同入_中涅槃場_上”)の2語は、『広辞苑』では【唱導】(「①唱道に同じ。②〔仏〕⑦法を説いて仏道に導き入れること。④他人に先立って経文などを唱え始めること。⑤一定の法式によって説法を行うこと。[略]④唱導師の略。[『申楽談儀』出典略]」、【唱道】(「[“道”は言う意]自ら先に立ってとなえること。唱導。〔補筆〕“先師の—”“平和主義を一する”)と為る(『日国』の后者の初出は②の2例目「政治小説を作るべき好時機 [1898] (内田魯庵)」)。

『漢大』にも無い「唱導師」(「①法会の首席の僧。導師。②説法をする者」)/「仏語。①説経をする人。中古、一種の世襲として技術化し、表白、儀軌、賛嘆文、経論の要句、因縁、回向 [えこう] などの佳言麗句を集めた唱導集も行なわれた。②唱導を行ない、法会の首席をつとめる僧。導師」, ②の初出=「庭訓往来 [1394-1428 頃]」)は、「導師」(『広辞苑』=「〔仏〕①仏道を説いて衆生を悟りに導く者の意で、仏・菩薩の敬称。②法会の時、中心となる僧。また、[旧版の“唱導師で、”削除] 願文・表白を述べて一座の人々を導く者。唱導師。③葬儀の主となって引導をする僧)の両言語の異同に目を向かせる。

『日国』(「仏語。①仏の教を説いて衆生を悟りの道に導く者。特に、仏・菩薩をさしている。②法会・供養などの時、衆僧の首座となって儀式をとり行なう僧。また、葬儀の首座となり、引導をわたす僧。③一般に、人生や信仰の指導者)の内、①は仏典(「持心梵天所問経-四“則便轉_レ於、正法之輪-斯則導師”)に拠り(初出=「法華義疏 [7C 前] 一・序品“導師謂仏”)、②は和製(同=「三代実録-貞観三年 [861] 正月二日“近來奉_レ修理-東大寺大毗盧遮那佛像。功夫既成(略)令_上導師_一具演_中事由”)、③は基督教縁(同=「引照新約全書 [1880] 馬太伝福音書・二三“導師 [ダウシ] の称を受ること勿れ”)である。

②の初出中の「既成」(「すでにでき上がっていること)は、漢典(「詩経-小雅・六月)由来の明治所産(初出=「経国美談 [1883-84] (矢野龍溪)」)とされる。『広辞苑』(「すでにできあがっていること。すでに成り立っていること。“一概念”↔未成)の用例と複合語群(【一作家/事実/政党/道德】)の様に、構語(単/複合語を構成する意の造語)力が強く汎用性・常用度が高い。『現漢』の【既】jì の4義中の①(「副已に [原文=已経]。“既成事実”“既得利益”“既往は咎めず”)に出るが、『広辞苑』と共通する項(7項中の【既定/往/望】と【既往不咎】 [= 【既往は咎めず】])には無い。

【既成事実】(「すでに起きてしまっていて、今更変えられない事実。“一として認めざるを得ない”)以外の【一作家】(「新進作家に対して、すでに名を成した作家)、【一政党】(「[旧版の“現状打破を主張する”削除] 新興の政党・政治勢力に対して、従来からある政党、特に、すでに議席を持っている政党 [←在来の政党。特に、大正末期から昭和初年頃の議会政党を指すことが多い]」、【一道德】(「[positive morals]-現実社会一般に通用している道徳的判断や習慣など)は、揃って『漢大』に入らない。国・共の一脈相通ずる1党独裁の下で新興政党は許されない故、対義概念も抑々成立しない。

『日国』は【既成概念】も取め（「事物に関して、すでにでき上がり動かしがたいものと一般的に考えられている性質」）、初出（「ニュース映画と新聞記事 [1933] 〈寺田寅彦〉」）は【既成作家】（「若き読者に訴ふ [1924] 〈片岡鉄兵〉」）、【既成政党】（「新しい言葉の泉 [1928] 〈高谷隆〉」）と【既成道徳】（『現代新語小辞典 [1936]』）、【既成事実】（「国籍 [1949] 〈竹山道雄〉」）の間に在る。『漢大』の【既成】の初出（『詩・小雅・六月』：“維此六月，既成我服。”）『日国』＝「維此六月，既成_二我服_一，我服既成」の次に、和文より早い「既成事実」の例（『毛沢東《統一戦線中的独立自主問題》』）と有る。

六国史中の『（日本）三代実録』（清和・陽成・光孝3天皇の時代の約30年の事を記した史書、901年撰進）に見える「既成」は、『日国』の初出（「後・二“乱民の猖獗も既成の法律に因て之を防制するは甚だ易し”」）より千年近く前の既出と思えるが、「既出」（『広辞苑』＝「すでに言及されていること。すでに出現したことがある。“一の項目”」）は『日国』には無い。他方、「未成」は両書に有り（「まだできあがらないこと。[旧版の“一品”は削除・立項] / 「まだできあがらないこと。未完成」、漢典＝「史記－蘇秦伝」）、初出（「米欧回覧実記 [1877] 〈久米邦武〉」）は【既成】より6～7年早い。

「運動」——「鑽營」——「鑽研 / 研鑽」——「鑽仰・贊仰」——「鑽堅研微」——「博聞強記」——「博覧・博識」

『現漢』の【導（導）】dǎoの32項中『広辞苑』と同形・同義の5項（【導火線 / 体 / 線 / 因 / 引】）の他に、【導管】は【導管・道管】、【導彈】は【誘導彈】（^{ミサイル}missileの和訳）と同義・部分同形である。【導師】（「①高等教育機関 [原文＝高等学校] 或いは研究機構で人の学習・研修 [同＝進修]・論文執筆 [= 写作] を指導する教師或いは研究者 [= 人員]。“博士課程指導教員” [= 博士生～] ②大きな事業・大きな運動の中で方向を指示し、政策を仕切る [= 掌握] 人。“革命の指導者”」）は、人生や信仰の指導者を指す和製語義（『日国』の③）を消した『広辞苑』の同項とは、意味上の接点すら無い。

『漢大』の①（「仏教語。衆生を導いて仏道に入らせる者の通称」）は仏典（『佛報恩經・対治品』）が初出（次が『唐王維《西方变画賛》』）で、②（「道の案内人」[原文＝帶路人]）の2例（『百喻經・殺商主祀天喻』「清袁枚《随園詩話》卷十四」）も、古代印度の仏典（『百句譬喻經』、5世紀末に南齊の求那毘地が漢訳）が先行する。③（「政治・思想・学術或いはある種の知識に於ける指導者」）、初出＝「羅惇廬《文学源流》」、④（「学校で学生の思想と学習を指導する教師を指す。周尊攘《桂林尋夢》[引用略]。亦高等教育機関或いは研究機構で院生 [同＝研究生] を指導する教師を指す」）は、共に20世紀に現れた。

『現漢』の②の中の「運動」は中国的な意味で、当該多義・常用語（yùndòng、①動物体の位置が絶えず変化する現象。通常はある物体と他の物体との間の互いの位置の変化を指し、ある物体の変化とは常に別の物体に対して言う。②動宇宙で起きる全ての変化を指し、簡単な位置の変動から複雑な人類の思惟まで、皆物質運動の現れた。③^{スポーツ}体育活動。“^{スポーツ}体育運動名將”“陸上運動”[原文＝～健將 | 田徑～] ④動体育活動に従事する。“私たちは外に出て運動してみよう” ⑤^{スポーツ}政治・文化・生産等の方面の、組織・

目的が有り気勢 [同=声勢] が比較的大きい大衆的活動。“五四運動”“技術革新運動”)の最後に当る。

『広辞苑』の同項(「①物体が時間の経過につれて、その空間的位置を変えること。②〔哲〕1のほか広く化学変化・生物進化・社会発展・精神的展開などをも含めて、形態・性状・機能・意味などの変化一般をいう。〔略〕③体育・保健や楽しみのために身体を動かすこと。スポーツ。“適度に―する”“―選手”④目的を達するために活動すること。“選挙―”“市民―”“―資金”⑤〔生〕生物体の能動的な動き。個体内の局所的運動と個体の移動運動、また成長運動・筋運動・細胞運動などのように分類する。〔略〕」)は、『現漢』と違って①⑤とも自他の対比が無い単独運動で、③より例が多い④の汎用も特徴である。

『日国』の漢典(「董仲舒-雨雹対)付きは①(「物があちこち巡り動くこと。物体が時間の経過とともにその位置を変えること」, 初出=「禅竹伝書-六輪一露之記注 [1456]」)で、以下は③(「健康保持などの目的で、体を動かすこと」)④(「手足など身体を動かすこと。“運動する”の形で他動詞としても用いた」, 同=「養生訓 [1713]」)の次に、②(「物事の状態が、時とともに変わって行くこと」, 「文明論之概略 [1875]〈福沢諭吉〉」)→③⊕(「散歩すること。ぶらぶら歩くこと」, 「歌舞伎・川中島東都錦絵 [川中島] [1876]」)→⑥(「機械などを動かす」, 「米欧回覧実記 [1877]〈久米邦武〉」)と現れた。

明治初期の雨後の筍じみた量産の勢いを示す3年連続の新出の再演の様に、数年後の⑤(「地形、敵の陣地、敵の動きに応じ、我が有利になるよう、軍隊や平が移動すること」, 初出=「五国対照兵語字書 [1881]〈西周〉」)→④(「ある目的を達するために、いろいろな方面に働きかけること。“政治運動”“学生運動”“就職運動”」, 同=「経国美談 [1883-84]〈矢野龍溪〉」)→③⊖(「体操や競技などで、継続的に手足を動かすこと。運動競技。スポーツ」, 「当代書生気質 [1885-86]〈坪内逍遙〉」)の派生で、両言語共通の諸意が出揃った。

語誌(「[1]③の意味は『博物新編補遺』に“故に精神を挑撥し身体を運動するは健康を保持する所以の要事なり”とあるように、衛生思想の普及とともに一般的にも用いられるようになったものと考えられる。[2]④については、『明治東京逸聞史 [森銑三]』に、明治二七年 [一八九四] 三月一七日の『東京経済新聞』の記事として“運動という言葉は、体を動かすこととして、明治七、八年から行なわれ始めたが、近ごろでは一変して運動費だの示威運動だの、猛運動だのと用いられる”が引かれている)の通り、18世紀初頭から身体活動を表す「運動」は19世紀末に政治的・社会的な意味が加わった。

『現漢』の【运(運)】の42項中19項が『広辞苑』に同形が有る(【運筆/動 [2項]/動場/動会/動量/動神経/動員/河/気 [2項]/輸/送/算/行/営/用/載/転)が、後者の【運氣】(「自然のめぐりあわせ。運命。天地・人体を貫いて存在するとされた五運六気で、漢方医は、これが人間の脈にあらわれるとして重視した」, 『日国』の初出・漢典=「日葡辞書 [1603-04]」)「蜀志-郤正伝)に対して、yùnqìの項(「動力を体のある部位に注ぐ [原文=把力气贯注到身体某一部位]」, 1例)と、yùn·qì(中黒の後の発音は無声調の軽声)の項(「①^{ㄉㄨㄥˋ}運命 [同=命運]。②^{ㄉㄨㄥˋ}幸運」, 各1例)と分れる。

同じ2字目が第4/軽声と為る【運動】の後者(「^{ㄉㄨㄥˋ}ある目的の達成を求める為に奔走し、権勢に取り入る [原文=鑽營]。 “官府に^{ㄉㄨㄥˋ}詔って巧く立ち回る”)は、日本語の第4義と違って専ら悪い

意味である。【鑽營】（「**圃**私利を追求する為に、方法を講じて権勢の有る人の機嫌を取る。“おべっかを使い胡麻を摺る”[同=設法巴結有権勢の人以謀求私利。“拍馬〜”“おべっか”]）を含めて、【钻（鑽、鑽）】
zuān（「**圃**①尖った物体を使って別の物体の上で回転させ、穴を作る。②突き通る[同=穿過]。入る。
③研鑽する[=鑽研]。④鑽營を指す」, ①〜③に3・2・3例）の9項は、『広辞苑』には1つも無い。

『日国』の「さん『字音語素』7 贊（贊）の類」の【鑽】（「①きり。きりもみする。/鑽燧, 鑽灼 / ②道理をきわめる。深く研究する。/鑽仰/研鑽, 鑽研, 鑽摩, 鑽鑿」）は、7語中5語も死語と化した（ は『広辞苑』未収, □は『日国』も未収）。退役・残留の【鑽研】（「切ったりみがいたりすること。転じて、物事の道理を深く考えきわめること。研鑽」, 初出・漢典=「童子問 [1707]」「後漢書-鄭玄伝」）は、『現漢』の項（「**圃**深く[原文=深入]研究する。“理論を研鑽する”“業務を研鑽する”“刻苦研鑽”）と共通するが、日本で廃れないのは『漢大』にも無い反転形の「研鑽」である。

【研鑽】（「学問などを深くきわめること。研究。“一を積む”/「学問などを深くきわめること。研究」, 初出・漢典=「本朝麗藻 [1010か]〈藤原公任作〉」）と共に、【鑽仰】も両書に採ってある（「[サンゴウとも] [論語子罕 “之を仰げば弥_い高く、之を鑽_きれば弥_い堅し”] 徳を仰ぎたつとぶこと。ほめたたえてあおぐこと。転じて、全力を尽くして深く研究すること。誤って“讚仰”とも書く」/『日国』は【鑽仰・贊仰】「[[論語-子罕]の“顔淵喟然嘆曰、仰_レ之彌高、鑽_レ之彌堅”による語] 聖人の道やその徳を深く研究し、とうとぶこと。あおぎしたうこと。さんごう」, 初出=「菅家文草 [900頃]」）。

「贊仰」は5例中の4点目（「屋代本平家 [13C前]」）で使われ、【一^{みね}の嶺^よに攀す】（「仏道を修行してその至極に到達するたとえ」）の用例（「太平記 [14C後]」）も金偏が抜くが、『広辞苑』の【鑽仰・贊仰】（「さんぎょう [鑽仰]に同じ」）は通読項の単一表記を基とする（『日国』の2表記併記の同項の語釈も然り。「幸若・満仲 [寛永版] [室町末-近世初]」の用例は51字が全て平仮名）。「鑽仰」→「研鑽」→「鑽研」の成立は漢典由来→和製→漢和混合の回転を呈したが、『現漢』の「鑽仰」未収と『広辞苑』の「鑽研」除外も興味深い反転である。

「鑽仰」と同じ文献に出た「鑽堅」（「学問に励むこと」）は前に並ぶ【鑽研】と共に今や消え、漢典（「晉書-儒林・虞喜伝“博聞強識、鑽堅研微、有_二弗_レ及_二之勤_一”」）の冒頭4字の熟語（「『名』“はくぶんきょうき [博聞強記]”に同じ、同=「礼記-曲礼“博聞強識而讓、敦_二善行_一而不_レ怠、謂_二之君子_一”」）も『広辞苑』には無く、代りに【博聞強記】（「『名』[形動] ひろく物事を聞き知って、しかもそれをよくおぼえていること。また、そのさま。はくぶんごうき。はくぶんきょうし」, 初出=「史記抄 [1477]」, 副項目【博聞強記^{ごう}】の用例は「評判記・戯作評判花折紙 [1802]」）が定着している。

【博聞】（「ひろく物事を聞いて知ること」/「ひろく物事を聞いて、よく知っていること。知識の範囲がひろいこと。はくもん」, 初出=「色葉字類抄 [1177-81]」）は、『日国』の和製認定と違って、【博聞強識】【鑽堅】の漢典が示す様に原産漢語である（『漢大』の同=「漢書-東方朔伝」）。和文例の無い4字熟語と読みが不整合の【強識^{じき}】（「記憶力が強く、よく物事を知っていること」/「記憶力がつよく、物事をよく知っていること。物覚えのよいこと。強記」）も、「礼記-曲礼上“博聞強識”」

が語源と成る(同=「国歌八論 [1742] 古学“抑々近世及び当時の人にも偶々博覧強識なるありて”)。

『現漢』の【博聞強識】(「見聞が広博で、記憶力が強い。博聞強記とも言う)、【博聞強記】(博聞強識に同じ) に対して、『広辞苑』は【博聞強記】(「ひろく物事を聞き知って、それをよく記憶していること) だけ録るが、『日国』で和製としたこの4字にも漢典が有る(『漢大』所載「『韓詩外伝』卷八)。「強記」(「記憶力のよいこと。“博覧一”)の例は、和製熟語(「ひろく古今・東西の書物を見て、物事をよく覚えていること。“一の人”/「『名』[形動] 書物をひろく読み、見聞を深めたりなどして豊かな知識をもっていること。また、そのさま、初出=「王陽明 [1893] 〈三宅雪嶺〉)である。

『日国』の【強記・彊記】(「記憶力のすぐれていること。よく記憶すること)の初出(「東海一瀕集 [1375 頃] 師古説“顔師古、博覧多聞而強記。[略]」)に、【博覧】①①(「ひろく書物を見て物事を知ること。[[平家三] 出典略]/「[形動] ひろく書物を読んだり、見聞したりして物事をよく知っていること。また、そのさま、初出・漢典=「江談抄 [1111 頃] [漢書-成帝紀賛]」、[多聞] (「多く物事を聞き知っていること)/「①多くの物事を聞いて知っていること。博識。物知り。②多くの人にもれきこえること」、初出=「私用抄 [1471]」「小右記-万寿二年 [1025]」、漢典=「孟子-万章下)の合成が有る。

【博覧】の②②(「ひろく一般の人々が見ること。“一に供する”/「[一する] [語釈前同]」、初出=「新聞雑誌-三二号・明治五年 [1872]」)は、『現漢』の項(「[勳] 広汎に閲覽する。“群書を博覧する”)には出ない。日本の両書は【群書】(「さまざまな多くの書籍。群籍。“一難題”/「いろいろの書物。多くの書物。群籍。群典」、初出・漢典=「統日本記-延暦四年 [785]」「漢書-司馬遷伝賛」。同義副項目=【群典】)、同じ『現漢』未収の【群籍】(「多くの書籍」/「“ぐんしょ [群書]”に同じ)、同=「朝野群載-九・天承二年 [1132]」「晉書-阮籍伝)を載せているが、「博覧群書」の熟語・成句は無い。

『現漢』の【博識】(「[詠] 学識豊富)の例に「~多聞」(「多聞」は『漢大』も未収)が出るが、日本語(「ひろく物事を知っていること。ものしり。博学。“一な作家”“一の士”/「『名』[形動] 知識が広い分野に及んでいること。また、そのさま、漢典=「晉書-東晉伝)の初出(「集義和書 [1676 頃] 九“しからは、天下の事々物々の理を窮[きわめ]、博識[ハクシキ] 多聞なりと云とも、何の益かあらむ”)に、両国の4書とも不立項の4字半熟語(造語)が見える。400年前に書かれた「博覧多聞」も和製熟語に成り損ない中国への輸出も無く、何れも惜しまれる先人の独創の逸失である。

【強記・彊記】の5例中の2点目(「春鑑抄 [1629] 智“智者は〈原書略〉”博学・強記にして、[略]」)にも「博学」が見えるが、この原産漢単語(「ひろく学問に通じていること。博識。“一人”“一多識”/「『名』[形動] ひろく学ぶこと。ひろく種々の学問に通じていること。また、そのさまや人。博識」、初出・漢典=「懷風藻 [751]」「論語-子罕)は、和製熟語「博学多才」(「幅広い知識を持ち、多くの才能に恵まれていること。“一を誇る”/「ひろく諸学に通じ、才能の多いこと」、初出同前)を生み、『現漢』の同項(「[詠] 学問が広博・精深な様)の例(「~多才)と為る。

「博学多識 / 多聞」——「博文約礼」——「博弈・博弈学」——「博得・博

取] —— 「博古通今」 —— 「博洽」 —— 「該博」 —— 「該当・当該」

『日国』には【博学多識】(「〔名〕〔形動〕ひろく諸学に通じて、知識が豊富であること。また、そのさま」, 初出=「花柳春話 [1878-79] <織田純一郎訳>」), 【博学多聞】(「〔名〕〔形動〕広くいろいろの学問に通じ、多くのことを知っていること。また、そのさま」, 用例=「信仰之道 [1894] <松村介石>」), 【博学多聞】(「はくがくたぶん [博学多聞]」に同じ。同=「仮名草子-伽婢子 [1666]」) も有る。【多聞】①(「仏語。仏の教を多く聞き、心にとどめおくこと。仏法を多く聞き知っていること。また一般に、知識や見聞の多いこと」, 初出=「勝鬘經義疏 [611]」由来の方は、主項目より2世紀早い。

『広辞苑』の【多門・(補筆)多聞】(「①城の石垣上の長屋。城壁を兼ね、兵器庫などに用いる。多く、江戸時代には“多門”、近代には“多聞”と書く。松永久秀が大和多聞城で始めたからいう。多聞櫓。②大名屋敷など [→本宅] の外周に建造した長屋」) は、改訂の2語併記で『日国』(①②の初出「信長公記 [1598]」「大和事始 [1683]」)と一致したが、「多聞」と部分類義の仏語由来の「多聞」は最初から無い。『日国』の【博聞】(「はくぶん [博聞]」に同じ)も『広辞苑』に入らず、用例(「読本・唐錦 [1780]」)の中の「強記博聞」は『現漢』収録の熟語に成れなかった。

中国語の「聞」(wén)は「門」(mén)と混用できず、字形に含まぬ「文」と同音である。日本の両書の【博文】(「ひろく学問を修めて、これに通ずること」, 『日国』の初出・漢典=「山鹿語類 [1665]」「史記-韓非子伝」), 【博文約礼】(「〔論語雍也〕ひろく学問して事の理をきわめた上、礼を以てこれをしめくり実行すること」/「〔論語-雍也〕の“博ニ学於約文ニ、約レ之以レ礼、亦可ニ以弗ニ畔矣”や『論語-子罕』の“博ニ我以レ文、約ニ我以レ礼”から)ひろく教養を積み、それを礼によって集約して物事の本質を知ること」, 用例=「童子問 [1707]」)も、其々【博聞】の前と【博聞強記】の次に在る。

『現漢』の【博】の¹(①-④博) bó (「① [量が] 多い。豊富。② 通曉。③ <書> 大きい。④ [Bó] 罔姓の一」), ²(②博) bó (「① 博する [原文=博取]。取得。② 古代の盤上遊戯 [同=棋戯] の一種、後に広く賭博を指す」), ³ bó (「博客①を指す」)。「博客」①=「^{インターネット} 電脳網 [= 互聯網] 上で発表する文章・画像 [= 図片]」。[2例後述] 網絡日誌とも呼ぶ。[英 blog]」)の全30項の内、『広辞苑』と同形・同義の項は13有り(【博愛/大/覧/覧会/洽/識/士/聞強記/物/物館/学/雅/引」), 『日国』と共通の【博古】【博取】【博聞強識】を含めれば形・意合致組が半数を超える。

同形・部分類義の【博奕】(「^① ① 古代に囲碁を打つ [原文=下圍棋] 事を指し、又賭博を指した。② 利益を謀り求める為に競争する事の比喩」)は、①が日本語の「博奕」(「ばくち」/「囲碁・樗蒲^{ちよほ}・双六^{すごろく}など勝負を争う遊戯の総称。また、金品をかけて行なうもの。後世は、もっぱら采・花札などを用いるものをいう。ばくよう。ばくち。はくぎ」, 初出・漢典=「三教指帰 [797 頃]」「論語-陽貨」, 「博^{よう}奕」(「ヤウは呉音ヤクの音便」ばくち。[『大和』出典略], 『日国』の初出=「大和 [947-957 頃]」)の由来で、②は現代の派生(「漢大」所収は古来の語義のみ)である。

【博戯】(「博奕^{はくち}の遊戯。ばくち」/「^① “ばくぎ”とも」樗蒲 [ちよほ], 双六 [すごろく] などの

賭 [かけ] を伴う勝負事。博打 [ばくち]。博奕 [ばくえき]。はくげ。②刑法上の概念で、偶然性のからむ勝負のうち当事者の行為によって勝敗が決まるものに金品をかけて争うこと。単に予想の適中を争う賭事[とじ]と区別される。わが国の刑法は博戯と賭事の両方を賭博罪としている、初出=「書紀[720]」[刑法[明治四〇年][1907]、①の漢典=「史記-平準書」]は、関連語の中で和文使用歴が最も古い。『現漢』に無いこの単語は又、日本で一番新しい意味を法律の分野で生み出した。

「博打・博奕」(「[バクウチの約] ①財物を賭け、骰 [旧版の“子”削除] 骰・花札・トランプなどを用いて勝負をあらそうこと。ばくえき。かりうち。とばく。②一か八かのまぐれ当りをねらう行為。“大一を打つ”③“ばくちうち”に同じ。[「宇津保忠乞」出典略]/「[略] ①金銭、財物を賭 [か] け、賽 [さい]、花札、トランプなどを用いて勝負を争うこと。ばくえき。賭博。てなぐさみ。②①を職業のようにする人。賭博を常習とする者。賭徒。ばくちうち。③結果を運にまかせて取立てする行為。万一をたのみとする所為。成功する可能性の少ない危険な行為) は、両言語共通の「賭博/賭徒/冒険」の意を持つ。

初出(「色葉字類抄[1177-81]」「宇津保[970-999頃]」「草茅危言[1789]」)の成立順は、行為より専門業者や常習者が最も古い、[「博打打・奕打打」(「博打を打つことを職業のようにしている人。賭徒。博打こき、同=「発心集[1216か]」。『広辞苑』の【博打打】=「博打を専門とする者。やくざ。賭徒」)は、漢典(「史記-魏公子伝」)由来の「賭徒」(「ばくちをうつ人。ばくちうち」/「賭博をもっぱらにする者。博打打ち」、初出=「蔭涼軒日録-長享二年[1488]」)より早い。『現漢』の類語「賭棍」(「賭博が常習と成りこれで生計を立てる人を指す」)は、輕蔑の意が字面に表れる。

【棍】gùn (「① 𠄎棍棒。[3例略] ② 成らず者。悪い人。“悪党”“賭徒”“人を唆して訴訟を起させ私利を貪る輩”[原文=無頼。壞人:悪~|賭~|訟~]、2項)の内に、不名誉な後者の例に賭徒が入る。

【賭(賭)】dǔ (「① 賭博。② 広く勝負 [同=輸贏] を争う事を指す、各2例)の16項は、【賭呪】(「①ある事に対して承諾し、若し出来なかったら因果応報に遭う事に甘んじると誓いを立てる)を除いて、危険や邪悪の意に満ちる。他方、勝負・賭け好きの国民性から賭博絡みの「博奕」は利益追求の為の競争の意も生れ、中性的を超えて肯定的・学術的な使い方も多い。

【博奕学】(「異なる利益を有する意思決定 [原文=決策] 者が利益の相互制約の状況下で如何に意思を決定する事、及び意思決定の全体的効果を研究する理論。将棋・西洋骨牌 [同=象棋、扑克] 等の室内遊戯の各側の得失に対する研究が起源で、已に経済学等の領域に広汎に応用している。対策論とも呼ぶ) は、[「ゲームの理論」(『広辞苑』=「[theory of games] 利害対立を含む複数主体のあいだの行動原理をゲームの形で一般化した理論。フォン=ノイマンとモルゲンシュテルン [O.Morgenstern^{二九四}] が創始。初め経済・軍事の分野で有効性が認められ、行動生態学にも応用される)』)と比べて名の源に賭博も有る。

【博得】(「① [好感・同情等を] 博する、得る。“大衆の信任を得る”“この映画は観客の好評を博した”) は、来歴未詳の日本語(『広辞苑』=「大きな利得。〈日葡〉」、『日国』未収)と異なる。古今通用のこの語(「漢大」=「引き換えに得る [原文=换来]。取得」、初出=「宋陸遊《春雨》詩之一)は、【博取】(「① 言語・行動で [信任・重視等を] 獲得する。“歓心を買う”“人々の同情を博する”)と通じる。

「博+取/得」の2語中『日国』はこれを残し（「ひろく獲得すること。また、人から取ること」、初出・漢典＝「修辭及華文 [1879]〈菊池大麓訳〉」「易林-蒙卦・井」,『広辞苑』には無い。

【博古】（①[㊦] 古代の事に通暎する。“博古多識”“古の事に該博で今の事に通暎する”[原文＝博古通今] ②[㊦] 古の器物を指し、又古の器物を題材とする中国画 [同＝国画] をも指す）も、古い意（②の『漢大』初出＝「姚華《論文後編・目錄中》：“如宋人《考古》《博古》《古玉》三圖”）」が片方の『日国』に留まる（【博古】「昔の事に広く通じること」、初出・漢典＝「懷風藻 [751] [張衡-西京賦]」/【博古】「はっこ [博古]」に同じ）。対語複合の【博古通今】（「古今の事に通暎する。知識の該博 [同＝淵博] の形容」）は、古い漢典が有る（『漢大』の初出＝《晋書・石崇伝》）のに日本語への輸出が無い。

日本語の「博洽」（「ひろく行きわたること。また、ひろくいろいろの学問に通ずること」/「【名】[形動] あまねくゆきわたること。ひろく種々の学問に通じていること。また、そのさま。博学。博識。はくごう」, 初出・漢典＝「古学先生文集 [17C 後頃]」「後漢書-杜林伝」。『日国』の【博洽】は「㊦“はっこう [博洽]”に同じ。㊦→はっこう [博洽], ㊦の用例＝「仮名草子・智恵鑑 [1660]」）は、反転形の「洽博」も有る（「あまねくひろいこと」/「【名】[形動] “洽”はあまねくの意 広々としていること。また、広く行きわたっている。博洽, 同＝「読書放浪 [1933]〈内田魯庵〉」「晉書-文苑伝-左思」。

『現漢』の【博洽】（「【書】㊦ [学識] 該博。“博洽多聞”）」は、【博識】と同様「多聞」の熟語が有る。【洽】 qià の4項（和文に無い【洽購/簽/商/談】）は「洽博」を含めないが、①②（「和睦。互いに協調し一致する」「相談。打ち合せ」[原文＝接洽], 各2・3例）に次ぐ③（「【書】広博^{あまねく} [同＝周遍]。“博識洽聞”）」に、「博洽多聞」を構成する「洽聞」が使われ、『日国』の同語（「【名】[形動] “洽”はあまねくの意 見聞や知識などが広いこと。また、そのさま」）の初出（「本朝文粹 [1060 頃]〈紀齊名作〉」）に「博学洽聞」が見える（未録の漢典は『漢大』に《史記・儒林列伝》等有り）。

『現漢』の【博古】の例熟語中の「多識」（不立項）は日本の両書に有り（「多く物事を知っていること。“多知一”」/「【名】[形動] 多くの事を知っていること。知識が広いこと。また、そのさま」, 漢典＝「易経-大畜卦」, 初出（「集義和書 [1676 頃]」）に11年前に出た「博文」との複合が有る。【博古通今】【博洽】の語積中の「淵博」（「【書】[学識が] 深く且つ広い。“該博な知識”“該博な学者”）」は、逆に『日国』にしか無い（「【名】[形動] 学問教養が広く、奥深いこと」, 初出・漢典＝「空華集 [1359-68 頃]」「魏書-李冲伝」）。

日本語の「該博」（「【該】は兼ね備える意 学問などに広く通ずること。“一な知識”」/「【名】[形動] “該”は兼ね備える意 万事にかねて広く通ずること。広く物事に通じていること。学識などの広いこと」, 初出・漢典＝「隨筆・文会雜記 [1782]」「宣和書譜-一六」）は、『現漢』の【該¹⁴（該）】の5項（【該博/当/欠/死/着】）にも有り（「該博」に同じ）, 同じ gāi の6親字の最後の【該（賅）】（「【書】①完備。全て。②兼ねる。含む。概括」, 各1例）の2項中の【賅博】（「【書】㊦淵博。該博にも作る」）が主項目に該当するが、当該項目は日本の両書に見当たらない。

【該当】（「㊦然る当きだ [原文＝应当]」, 1例。『漢大』の初出＝「清李漁《奈何天・間封》」）は、和

製同形語（「その条件・事例・資格などにあてはまること。“この要件に一する人”“一者” / 「よくあてはまること。適合すること」, 初出 = 「西国立志編 [1870-71] 〈中村正直訳〉」）とは異義である。反転・類義の「当該」（「[名詞に関して用いる] ①そのこと。そのもの。“一事件の関係者” ②そのことに当たること。その受持ち。“一官庁” / 「その事に関係があること。該当」, 同 = 「保税倉庫法 [明治三〇年 [1897]]」）も、『漢大』（「当直 [同 = 当班; 值班]」, 同 = 「元孟漢卿《魔合羅》第三折」）と全然違う。

（夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授）

“对”的情理 “影”的愉悦 (3)

本部分首先从“来复枪→一阳来复→一阳嘉节”的联想，对照汉语和日语的“嘉、佳”、“美、好”、“珍、异”词语群。

由“独在异乡为异客，每逢佳节倍思亲”的诗句，牵出“登高”、“登天”、“升进”、“成名”、“青云直上”等表现。

通过“卡宾枪”、“加农炮”等武器名称，推至“礼、兵”之对和“集束”、“收束”之异同，论及“炮、砲”部首之寓意，“人马”、“铕枪”等之相违。

进而注目音、意连环上成串浮现的一系列相关词语，分析两国语文词典的介绍，探讨中日语言的各自特性。

(夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授)